

「それは失禮しましたそれなら直様出てゆきませう」
 「ですがもしや」と彼は言葉をついで、「失禮ですが貴方は貴族の方では御座いま
 せんですか？」とたづねた。

そこで私は自分の姓名を告げると。

「私ではどうぞどこで獵をなすつて下さい。私もやつぱり貴族ですから貴族の方の御役に立つ事が出来れば喜ばしいです……私の名はパンテレー・チエルトツブル・ハノーブと申すのです」斯う言て頭をさげてはらつと言ひ乍ら馬の頸に一鞭くれた馬は頭を振り起て、後足で立ち上つてたぢ／＼としたそして犬の前足を踏みつけた。犬は刺し徹す様な悲鳴をあげる。チエルトツブル・ハノーブは恐しく腹を立て、口から泡をばし乍ら馬の頭の耳の間の處を拳固で一つなぐりつけた。そして電よりも速くこんで降りて犬の前足をしらべて見て傷に唾をつけてゐる。啼き聲をとめるためにその脇腹を一蹴けつてそれから馬の前髪を捉へながら鎧に足をかけた。すると馬は頭をのぼし尾を上げ乍ら叢林の中へあとさざりするので彼は片足で飛びながらそれでも遂／＼鞍に乗り狂氣の様になつて無暗に鞭を浴せかけ角笛を吹きそして一足とびにこんで行つてしまつた。チエルトツブル・ハノーブ

が思ひがけもなく顯れたその驚きはまだ収まり切らないのにまたも突然叢林のなかへ、頑丈な四十恰好の男が殆んど音も立てない様に小さな黒い馬にのつて出て来た男は一寸立ちどまつて青い草帽子を脱いで、細い聲を優しくして栗毛の馬に乗つた人を見かけなかつたかと尋ねた。見かけた趣を答へると、

「その人はどちらへ行きましたでせう！」と同じ調子で帽子を脱つたまゝいふ。

「あつちの方です」

「どうも有難う御座いました」

唇で接吻する様な音をさせて兩足を馬の横腹に向けて振り小走しりに教へられた方角へ走らせて去つた。私はその先端の尖つた帽子の木の間にかけられるまで見送つた。この二度目の男は前のは様子がまるきり異つて居る。顔は球の様に圓々と肥えて、内氣な人の好い、ひごく柔らかな性質を現はして居る。鼻も肥えて圓くつて蒼い血管が條をなして見えてゐるので酒色に耽つてゐる事が分る。頭の前の方に一筋もなく後頭部には薄い烏色の毛が縋の様にくつ着いて居り切れ長な小さい眼には愛嬌のある瞬を見せ紅い濕のある唇には心よい微笑が浮いて居る。立襟の銅の鈕をつけた上衣はひごく着古したのではあるが清潔したものだ布の袴を高

くく、し上げて肥えた脹脛が長靴の黄色な上端から上に見えて居る。

「彼、誰か？」とエルモライにたづねると、

「彼かね？ありやチホン・イヅァニツチネドビユスキンだね。チエルトツプーハノーツの處に居りますだ。」

「何をして居る人だ貧乏なんか？」

「金はありましねえだがチエルトツプーハノーツだつてまつたく一銭だつてありやしましねえ」

「ぢやなせ一所にゐるのか？」

「そりや仲がよいもんだでねえ。何方も一人で居つた事ありませんねえ……いやほんとうだあねー馬の足の行く處へは蟹が爪を缺むつていふ例の通り」

吾々が叢林の外へ出るとすぐ近くで二匹の獵犬が吠え出した途端に大きな兎が一疋最早大分延びて居る藁の中へ飛び込んだ。それについで種々な犬が幾匹も

叢林の中から躍り出た。その後からチエルトツプーハノーツも跳び出した。大聲も擧げず犬を使喚けもせずまた掛聲もしない息を切して喘ぎ切つて居て途切れの意味もない音聲がおり／＼大きく開いた口からはつはつと洩る顔からとび出し

でもしさうな眼をして飛んで行きながら烈しく可憐さうな馬に鞭をくれる。犬共がも少しで兎に逐ひつかうとする……と兎は一寸身を伏せて勢よくひき返した。そして叢林の中へとび込まうとしてエルモライの傍をすつと駆けぬけた……と犬がまた逐ひかける。「おーい。おーい。おーい」疲れ切つた馬上の人が訥つた調子で辛と言ふ、「頼むぞ、おーい。エルモライは一發うつた……と手傷を受けた兎は柔滑な枯草の上で筋斗を打つて宙に躍る、そして犬に噛まれて苦しさにきう／＼言ふ。犬どもはその周囲に集つた。チエルトツプーハノーツは矢の様に馬から跳ね降つて短剣をひつつかんで「こん畜生」といひさま、犬の中に足をつき立て、食ひ裂れやうとして居る兎をつかんで、そして恐しく顔をしかめて短剣を構も徹れどその喉元に突つ込んだ……突つ込んだとしておい／＼と呼び立てた。チホン・イヅァニツチが杜の縁の處へ現はれた。「おーい、おーい、おーい、おーい！」とチエルトツプーハノーツが再び大聲に呼んだ。すると、「おーい、おーい、おーい」とチホン・イヅァニツチが沈着いた返事をする。

「ですが君夏の獸類獵はするもんぢやありませんね」と私は押し倒された姿を指してチエルトツプーハノーツに話しかけた。

「なあにこりや私の畑でさ」と彼を息をはづまして答へる。
 彼は兎の兩足を切り取つて體を鞍にくゝしつけた。そして前足だけ犬ごもの中へ
 投げてやつた。

「君には獵の規則で彈を借りてる譯ですな」とかれはエルモライの方に向いて言
 つて、そして「貴方にはいや御禮をいたします」と例の忙しい愛憎のない聲で言ひ
 足した。

馬に乗つてから、

「失禮ですが……貴方の御姓名を失念しましたですが」と言ふ。

そこで私はまた自分の名を言つた。

「御知己になつて仕合です、機會もありましたらば御立寄を願ひ度い……だが、チ
 ホン・イヴニツチ、フオムカはどうした？」と少し焦れ氣味で、「兎を逐つて來なかつ
 たのぢやないか？」

「馬が倒れたんで」とチホン・イヴニツチが微笑を含んで答へる。

「倒れた！オルバサツンが倒れた！えゝ！ちよつ！彼奴何處に居るんだ？」
 「彼處の杜の後に」

チエルイツブーハノーヅは馬の鼻面に鞭をくれて、一散に駈けていつた。チホン
 イバニツチは二度私に叩頭をした、一度は自分のため、一度は友達のためにしたのだ
 らう、そしてまた叢林の中へ小刻みに入つて行つた。

此二人の男がひごく私の好奇心を惹いた。抑何がかくも異つた此二人をかく割
 き難い友情の鎖でつないだのであらう？私は種々と聞き質して次の事情を知る事
 が出來た。

パンテレー・エレミツチ・チエルトツブーハノーヅは近所界限から危険な狂氣じみ
 た人物で、酷く傲慢な喧嘩好きな男だと評判されて居た。ほんの暫らく軍隊へ入つた
 が上官と所謂「悶着」を起して、士官とは名ばかりの小尉時代に役を退いた。その
 家系は大へん盛つて嘗ては富有なものであつたが先祖が代々曠野地方の習慣で
 ひごく派手な生活をした——といふのは、招く招かぬに論なく、澤山な客を歓迎して、客
 の苦しくなるまで御馳走をし容の取者等には馬にやる様にといふので、燕麥を何斗
 となく澤山にやつた、音楽師や歌ひ女や、道化師や犬なんどをかゝえたり飼つたりし
 て居た。祭禮などの日には自分の百姓に酒や麥酒を振舞ひ、冬になると自分の馬に
 丈夫な古風な馬車をひかしてモスカウへ出掛けるが時とするど一日中一錢もなし

で自分の地所で出来たものだけで暮らす事もある。領地かパンテレー・エレミツチの父の手に入った頃には大へん情ない有様になつてゐたが、今度はそれを無闇に浪費してしまつた、それで彼の死んだ時一人息子のパンテレーに遺したものはベズノゾオといつて地附きの百姓男三十五人、女七十六人といふ小村のしかも抵當に入つたのと、コロプロツアの荒野にあつた、役にもたぬ、二十八エーカーばかりの地面とであつたが。此地面に付て居る農奴の事は父の遺言の内にも載て居なかつた。實を言ふとパンテレーの亡き父が身を滅した遣り方は一種變つたものであつた、いはば「經濟上手」といふ事が破滅の基であつたのだ。彼の考では貴族といふものは町人商賣人その他この種の「盜賊」と關係してはならぬ、そんな社會のものは盜賊に等しいと彼はいつて居た、で自分の地内に種々の店を開かしたり、組合を設けさしたりして、之が「體裁が良くて價が廉い、まあ經濟上手といふ者さ」と口癖の様に言つて居た。此んな考を死ぬ迄振り棄てる事の出来なかつたのが彼の致命傷で、これが全く破滅の基であつたのだ。けれどもそれがまた彼には限りもない慰安になつて居たのだ！彼は一寸した出来心でもそれを満足させずには置かなかつた。いろ／＼な氣まぐれのあるうちである時、自分の好み通りにひごく大きな自用の馬車

をこしらへて、村中の馬を牽き出し、その持主達にも手傳はして曳して見た者の、ついで出るが早い、か、すぐ坂になつて居る處で顛覆つて微塵に壞れてしまつた。エレメイルキツチ(パンテレー)の父の名はエレメイルキツチといふのであつた、はまた自分の記念碑を丘の中腹に立てさせやうとした事があつたが、そんな事をして氣耻かし、いとも思はなかつたのだ。またある時は寺院を一つ——勿論獨力で——技師の手も借らずに建て、見やうといふ結構な事を思ひついた。そこで森を一つまるきり焚いてしまつて煉瓦をこしらへ、議事堂の様な宏大な土臺を構へて四方に壁をまはし、最後に圓天井を置き始めた、ところがそれがつい崩解れてしまつた。も一度やりなほした——がまた圓天井が崩解れた、三度やつた——が三度微塵になつてしまつた。流石のエレメイルキツチも今度は考へ込んでしまつて、なにか魔がさして居るのだなど考へた……きつと悪い妖婆の邪魔に相違ない……といふので村中の老婆をのこらす袋叩きにしろといふ命令を出した。で村のものは婆さんを袋叩きにしはしたけれど、それでも圓天井は上らなかつた。暫らくするとまた彼は新しい設計で百姓家を建て代へやうと企てた、これもみな例の「經濟上手」から割り出した事である。その設計は、三軒の住所を三角形に取つて、その中心に柱をおつ立て、それ

に彩色した鳥籠と箆とをくゝりつけたものだ。こんな具合で毎日毎日新しい氣まぐれな事を考へる。或時は午勞のソツプをこしらへやうとした。また或時は僕に帽子を造つてやるといふので馬の尻尾を切らうとした。またある麻の代りに葦草を用はうとしたり。齒で豚を飼はうとしたり……また或日モスカウガゼットを讀んで、ハルコフの地主の一人が書いた、「農夫の幸福に關する道徳の必要」といふ一章を見て次の日には早速地内の百姓殘らずに此ハルコフの地主の書いた事を暗誦するまで讀んで見ろといふ命令を出した。百姓どもはそれを讀んだ。そこで領主はその中にかいてある意味が分解たかと訊ねて見た。すると監督の答には——「みな良く了解りまたしといふ事であつた。また其時分の事であつた。秩序を保つためと經濟上の利益になるといふ意見でもつて、その農奴どもに番號をつけて、一々その番號を襟に縫ひつける事にした。主人に逢ふと各自が大きな聲で、「何々號で御座います」といふ。すると主人は優しい聲で、「あゝ、よし々々」と答へる事になつて居た。

斯んなに秩序も立ち經濟も巧かつたに拘らず、エレメイルキツチは次第次第に苦しい羽目になつたので、初めは自分の村を抵當に入れなごしたが、それ等は到頭賣られて仕まつて。終には舊くからの家邸も、村も造りかけの寺院と共にみな差押を食

つて政府から公賣に附せられてしまつたが幸ひそれはエレメイルキツチの存生中ではなかつた——彼はとてもこんな打撃には堪えられなかつたらう——けれども死んで二週間目にはもう斯うなつて居たのである。エレメイルキツチは自分の臥床の上で親戚故舊に圍まれて抱ねの醫者に脈を取らせて死ぬ事は出来たけれど可憐さうに後に残つたパンテレーにはベズソノヅオより外何の遺産もなかつたのである。

パンテレーが父の病氣の報知を受け取つた時にはまだ軍隊に居て例の「悶着」最中であつた。其時年は丁度十九。幼少な時分から父の家を離れた事がなく、極御人好しの少足りない母さんのバツシリツサバツシリエグナの手で我儘に甘やかされて成人した。教育は母親の手一つでなされ、父親は例の經濟上手の空想に耽つて居たので外の事など考へる隙もなかつたのだ。もつとも只の一度假名の發音を間違ゐたといふので父親自ら手を下して息子を罰した事はあつたが、其日エレメイルキツチは思ひもかけぬひごい打撃を被つた。それは彼の一番秘藏の獵犬が木の下に壓しつぶされて死んだ事である。ではあるがバツシリツサバツシリエグナがパンテレーの教育に對して盡したといふのは只それに就て大にやきもきしたといふに過ぎ

ぬ。則ち母親は先づ非常に骨折つて一人の家庭教師を雇つた。この教師にアルサス生れの退職士官でピルコツフといふものであつたが、バッシリサは死ぬまで此人の前では木の葉の様に震へて居たものだ。といふのは、「若し彼の人が私等を見放したら——ほんとに途方に暮れて仕舞ふ！ さうなつたらどう仕やう？、どうしてほかによい先生なんぞ見つけられやう。ほんとにやつとやつとの思で他所の家に居たのを來てもらつたのだもの！」と考へて居たからである。ピルコツフはまたすばやく自分が二つないものに思はれて居る事を見て取つて、それにつけ込んで魚の水を飲む様に酒を飲んで朝から晩まで寝てばかり居た。「學問の修業」を成就してからバンテレーは軍隊に入る事になつた。其頃は母のバッシリツサはもう此世の人ではなく、この大事な事實のある數ヶ月前のものに襲はれたやうにして亡くなつたのである。その時彼の女は白衣の姿をした人が熊に乗つて來た夢を見たのだといふ。エレメイルキツチもほごなく妻の後を追つた。

バンテレーは父の病氣と聞くとすぐ大急ぎで馳せつけたけれども到頭死に目に遭はなかつた。のみならず今迄財産家の世嗣と思ひきつて居るものが思ひがけもなく貧乏人となつてしまつたと知つた時には此孝行息子の驚きは非常なものであつた。

つた。誰だつてこんな急激な轉變に遭遇つては平氣で居られるものではない。バンテレーもこれ以來氣難しくなつて世の中の人を猜む様になつた甘やかされて育ち怒りつぽかつたとはいふもの、正直で寛大で人の良かつた男が打つてかはつて傲慢な喧嘩好きなものになり、近所の人とも交際しない——高ぶつて居るので財産家を尋ねる事はせず、貧乏人は輕蔑して居た——そして誰れにも甚しく尊大に振舞ひ、官憲に對してさへさうであつた。彼はいつも、「己は貴族の後裔だ」と言つて居る。或時などは帽子を取らずに室へ入つたといふので警部を射撃し様とした。勿論官憲の方でも復讐はした、そして機會ある毎にその勢力を知らせやうとしたけれども矢張りバンテレーを恐れては居た。なにしろ無法な男で二言目には小刀で決闘を仕様と申し込のだから仕方がない。一寸口答してもチエルトツブハノーブの眼はぎら／＼して來る聲は荒くなる……「あゝ、えーえーえ、畜生！」……と口籠つて言ひ出したら矢も楯も堪らない。その上彼の性質は全く汚點のないので、少しでも後めたい事には決して手を出さない。こんな風だから誰れ一人彼を訪ねるものもない……けれども彼はそれでなかく氣質のよい、一風變つては居たが人の良い人物であつた。不正或は壓制がましい事は見ず知らずの人に對していも

させない、また自分の百姓のためとなる。巖の様に頑としてその保護をする。「何だ？」といつも激しく自分の頭を叩いて言ふ、「私の百姓に干渉する？ 私の？ 私はチエルトツプハノーヴと言はれるものだ。若し此の私が……」

チホンイヴァニツチネドビユスキンはバンテレー！エレミツチの様には其系圖を誇る事が出来なかつた。父の代までは小地主といふ階級であつたのが四十年間の職務を終つてやつと貴族の階級に列する事が出来た。父のネドビユスキンは何か、私の怨恨を根に持つてするのかと思はれる程、執拗く不幸といふ奴に逐はれ通した類の人であつた。生れてから死ぬまでまる六十年間、氣の毒にも収入の少ないものには附物になつて居る、困難不幸窮乏といふ様なものに取り巻かれて、悶き抜いた丁度氷の下に置かれた魚の様に悶いた食物も足らなければ、睡眠も充分でなく——心にもない追従をしろ、頭になやまし悲んで、精根は盡き果てる、鏝一文を得るにも心をつかひ職務の上では罪もないのに、上官の犠牲となつて、到頭屋根裏か穴蔵で自身のため子孫のために乾いた麵麩の一塊も欲しいと思ひながらその甲斐もなく悶いて果て、しまつた。つまり運命が彼を兎の様に逐ひ立てたのである。

彼は賄賂も——三片の端から一冠貨まで——取はしたが、氣質の好い正直な男で

あつた。瘦せた肺病らしい妻君があつて子供も多数ありはあつたが息子のチホンと娘のミトロドラの外にみな夭死をしてしまつた。其娘は綽名を「町屋の美人」といつて痛ましくもあり、また滑稽でもある事件の後に職をやめて居る辯護士と結婚したのであつた。父ネドビユスキンは生前に其子のために或役所の雇書記といふ地位を探し出してやつた、しかしチホンは父が死ぬとすぐその職をやめてしまつた。両親の果てしもない心配やら寒さと飢えに對する悲惨な煩悶やら母は氣を遣ひすぎて憂鬱になる、父は苦勞し果て、落膽する、旅屋の女主人や商店の主人は口汚ない催促をする——それやこれやで限もない毎日の辛勞がチホンの心の中にしみ込んで小許の事にもひどく物恐れをする性質となつた、長官の影をちらと見たばかりでもう捉へられた小鳥の様に震へ上つて氣を失つた様になる。そんな具合で彼は役所を退てしまつたのである。自然といふものは一視平等といふ處からかはつた人を愚弄するつもりからか、その財産や社會上の地位に全く矛盾する能力傾向を人間に植えつけるものである。それで自然はその特別な注意と愛とを以て貧乏書記の子チホンを感情の強い無性な優しい感動し易い人間——享樂にばかり適してゐて、恐ろしく鼻と舌との感覺の鋭敏なものに造り上げた……しかもその造り

方が頗る念入りなものであつた。そしてその作り上げた此の子を酸い甘藍と腐つた魚とを食つてやうやく生長するやうにさした處がまあ自然の作り上げた此の子はとにかく苦しみながら生長して所謂「人生」といふものを始めた。それで爰に一場の滑稽が持上つた。あゝも無情く父なるネドビユスキンを苦しめた運命はまた其息子に取り附た。まづ見込まれたのだとでも言つてよからう。けれども運命はチホンを取り扱ふに別の行き方を探つて居る。父はそのために苦しめられたが、チホンは寧ろ弄ばれた。運命は彼を驅つて自暴自棄に陥らしめる事もせず、飢といふ賤しい苦痛を以て惱ます事もしなかつたが、露西亞中諸々方々と流浪して、それかられへと卑しい戯けた世渡りをして歩かせた。或時は意地悪で短氣な女主人の番頭とし、また或時は身代はあつても吝嗇な商人の食客にして更に英吉利風に頭を刺つた出目の紳士の秘書役にした。それからまた或る獵狂人の家令と、とりまきを兼ねた様な役に昇らせた……要するに運命は哀れなチホンを驅つて寄生々活といふ味も苦い毒杯を一滴一滴と奪も餘さず嘸み下させたのだ。で彼は其盛りの間を自墮落な主人等の面白くもない毒口や悪戯の的となつて過した。それで幾度となく多勢の亂暴な客がチホンを嘲弄つて無作法な遊戯に自分の慾を満足させた後に

「往つて寝ろ」といふ許可が出ると、獨り自分の室にかけ込んで侮辱された事を思つて顔を赫くし、絶望の冷たい涙を眼に浮べて心に誓つた。そつと此庭を抜け出して、町へ走つて自分の運を試して見やう。番頭かなんか一寸とした位置を見附け出さう。でなきやいつそ飢えて街頭で倒死に死んでしまはう！と。然し第一神様は生得の力といふものを彼に與へなかつた。第二に臆病で決心が出来なかつた。第三にはどうして自分でうまい位置が見附けられやう？ さりとて頼む人もない。「とてもうまい口は授けてくれまい」と此哀れな男は床の上で疲れ切つて寝返りを打ちながら呟く。「とてもうまい口は授けてくれまい！」こんな具合で明日になるとまた同じ賤しい生活をついでゆく。その上自然はこれほどに氣を付けて居たにも拘らず、とりまき役にはなくて叶はぬ資格や才能と云つたら少しでも授けてやる事を仕なかつたので彼の位置はいよ／＼みじめなものであつた。例を擧げて見れば彼は熊の皮の上衣を裏返しに着て、へ／＼になる迄踊る事は出来なかつた。また耳の傍でびし／＼と鞭を鳴らされながら輕口を言つたり曲藝をしたりする事は出来なかつた。それから零點以下二十度位な寒中に裸のまま出て風邪をひいた事も幾度かある。彼の胃の腑はインキや其の他の汚いものを混ぜたブランデーをうけ容れ

るわけには行かない、また細に刻んだ酢漬の菌や毒のある菌などを消化する事は出来なかつた。

その後チホンの身はどうなつたか解からないのであるが幸にも彼の最後の恩人の大分金を溜めて居た受負師が氣嫌のよい折に遺言状を書いてふと考へて次の箇條を加へたる即ち「猶又デョーゾ(即チホン)ネドビユスキンには永久の所有として拙者の正當なる所有にかゝるベズゼレンデイエフカ村及其附屬物一切を彼及其子孫に相殘し申候」といふのである。

それから二三日すると其恩人は鯨鮫の肉汁を吸ひながら卒中を起して死んでしまつた。そこで大騒ぎになり役人が來て其財産に封印をして仕まつた。

親戚の人達が集まつて來遺言状は開られて讀まれた、そしてその人達はネドビユスキンを呼んだので、ネドビユスキンはやつて來た。此連中は大概ネドビユスキンが此家で何をしてゐたのか知つて居るので喧しい叫び聲や皮肉な祝辭が盛に起つた。「やあ地主だ新しい地主が來た！」遺産相続人等が口々に言つた。「うむ全くこれは」と中でも名高い頓智のある諧謔者が口を挟む。「うむ全くこりやさうだて……こりや確に……全くその……歴とした相続人さ！」すると一同がど

つと笑つた。やゝ暫らくの間ネドビユスキンは此幸運を眞實と思へなかつた。遺言状を見せられて始めて彼は顔を赧らめて眼を閉ぢた、そして如何にも絶望でもしたと言つたやうな様子をして聲を立て、泣き出した。集まつた連中はくすくす笑つて居たが、遂には一齊にがや／＼言ひ出した。ベズゼレンデイエフカ村にはたつた二十二人の農奴があるばかり、此んな處を失くしたからとてそれを惜むものは一人もない、だからそれを種々して擲擲つて見るのである。相続者の一人でベテルブルグに重要な位地を占めて居る、ロスチヌラフアタミツチシユトツベルといつて希臘風の鼻をした威嚴のある顔をした男がすつとネドビユスキンの傍によつて横柄に彼を見下した。「私の見る所ではです、ねえ貴方」と輕蔑したやうなすました風をして「君は故人フエドルフエドリツチの心を慰めるためによく親切に世話をして下さつたので、當家に於て立派な位置を持つて居られたのでせうな」といふ。此ベテルブルグの紳士は堪らぬ程氣取つた様子ぶつたもつともらしい調子で云つた。ネドビユスキンは氣が立つて、どぎまぎして見み知らずの紳士の言葉など聞えるどころではなかつた、然し一座の人々は言ひ合した様に一時にひっそりした、と例の頓智者がいかにもさげすんだ様な笑ひ方をする。シユトツベルは手を磨つて前の問を繰

り返した。がネドビユスキンはへども、として上の方を見、そしてぼかんと口を開いた。これを見たロスチスラフ、アダミツチは冷嘲む様に顔をしかめた。

「御目出度いんだねえ君御目出度いんだ誰だつてあんな事して毎日の麵麩にあり附かうとは思ふまいからね然し de gustibus non est disputandum. (趣味については死や角

意い) つまり各々の好きくだから……ねえ？」

背後の方から誰か忙しない併し丁寧な聲を出して大喜びで讀めたものがある。

「一體君には」と仲間の笑ひ聲にぐつと乗り氣になつたシユトツベルはまた言ひ

ついで、「ごんな御得意の藝かあつてこんな好い運が向いて来たんだね？ いや含

耻むには及ばんよ言ひ給へ吾々はみんな言は、en famille (眷族同志)だからえ、どうで

す諸君此處に居るものは皆眷族同志ぢやないですか？」

丁度ロスチスラフ、アダミツチに話の鋒先を向けられた親戚の一人は合憎佛蘭西

語を知らなかつたので賞讃の意味を籠めたかすかな咽喉の聲を出したばかりであ

つた然しまた一人の親類で顔に黄色な顔皺をつけた青年が急いで調子を合せた

「いかにも、いかにも、さうです」といふ。

シユトツベル氏はまたいひ出す。「多分君は逆立をしても歩けるだらうねえ？」

チドビユスキンは苦しさうに四邊を見廻した。人々の顔には嘲ける様な笑ひが浮んで眼はことごとく可笑涙に濡れて居た。

「それから君は雄鶏の様に刻をつくれるだらうねえ？」

あたりの人が一度にぐつと吹き出したが、すぐひつそりして固唾をのんだ。

「それから君は自分の鼻の上で……」

「止せ！」と甲高な激しい聲がロスチスラフ、アダミツチを遮つた、「弱い者を苛め

て氣耻かしいと思はんか！」

皆見かへると、戸口の處にチユルトツベル、ハノーブが立つて居た。

死んだ受負師にはすつと遠縁の親戚といふので彼も親族會議の招待状をうけた。

遺言狀を讀む間は例の通り傲然として一座の中に加はらなかつたのだ。

「止せ！」ぐつと反り味になつてまた言つた。

シユトツベル氏は急にふり返つて見ると別に目立つ處もない、見すばらしい身な

りの男なので小聲で傍の男に聞いた、(要領はいつでも肝要なものである)

「あれは誰ですか？」

「チユルトツベル、ハノーブといふ男です——大した奴ぢやありません」と聞かれ

た方が耳打をした。

ロスチスラフアダミツチは横柄な風をして、「それよりや、餘計な指圖をする君は誰ですか？」と鼻にかゝつた聲で侮蔑む様に目を細くして、「誰です承まはりたいか？——奇怪しな魚みたやうな男だ！」

チエルトツブハノーブは火薬に火のついた様に爆發した。憤怒が昂じて聲さへ出ない。

「ススーススースッ！」と恐物でもした人の様にこんな聲ばかり出して居たが忽ち雷のやうな聲を出した。「誰れだど？誰れだど？チエルトツブハノーブだが如何した？血統の正しい昔からの貴族だ先祖は代々帝王の御役に立つとるわさういふ貴様こそ何者だ？」

ロスチスラフアダミツチは蒼くなつてたちくとした。こんな抵抗があらうとは思はなかつたのだ。

「私は——私は——全く魚で！」

チエルトツブハノーブが真直に進むで来るとシエルトツベルは大に周章て跳ねるやうにして逃げ出した。一座の人達はひどく激して居る此貴族の傍へどつと集ま

つた。

「決闘決闘決闘だ即刻手巾だけの距離！」氣の立つたパンテレーは大聲で、「それがいやならあやまれーうむ、それから彼の男にも……………」

「あやまつた方がいゝでせう！」とシエルトツベルの周圍に總立ちになつた親戚どもがあちらからもこちらからも吐く、「彼はあゝいふ狂氣だからわるくすると君の喉をかつきらないともいへないから」

「いや濟まなかつた濟まなかつた、知らなかつたものだから」とシエルトツベルは訥り乍ら、「知らなかつた……………」

「それから彼の男にもあやまれー！」パンテレーは腹が立つて堪え切れないので怒鳴り立てる。

「君にも濟まない事をした」ロスチスラフアダミツチは、瘡に罹つて居る様に震へて居るネドビユスキンの方へ向いて言ひ足した。

チエルトツブハノーブは幾分かおちついて、チホニンヅアニツチの處へ行き、其手を取つて、きつとあたりを見廻したが誰一人として彼に眼を合せるものがないので勝ち懸つて、深い沈黙の中を戶外へ出た。法律上公然定められたベズレンディエ

フカの新地主と手を携へて。

其日以来二人は決してまたと離れなかつた。ベズセレンデイエフカの村はベズン
ノゾオから僅々七哩である。ネドビエスキンの限もない感謝の情はやがて最烈しい
崇拜の念にかはつて行つた。弱く柔しいそして幾分瑕瑾のないでもないチホンは
物に動せぬ近づく難きパンテレーの前には頭を地に摩つて拜せざるを得なかつた。
「なか／＼大抵な事ぢやないて」と折々獨りで考へる。「知事公と御話をしたり、眞
面に御顔を拜むなんちふ事は……ア、全く神様の御慈悲だ！それをパンテレー
様はなさるんだからなあ！」

チホンはパンテレーのえらいのに驚嘆し力を極めて賞めそやし敏捷くて學問の
ある非常に慕い人だと思つて居た。そりやチエルトツブーハノーグもあまり教育
のある人ではないけれどチホんに較べると雲泥の差があるといはなければならぬ。
チエルトツブーハノーグは實際露西亞文も少しは讀める。佛蘭西語も極拙いが知つ
ては居た——尤も随分拙い。嘗て瑞西生れの家庭教師の「Vous parlez français, Monsieur ?
(貴方、佛蘭西語を御話しますか?)」といふ問に答へて、「Je ne comprend」と言つたがしばらく考へ
てからねえ、「さ」と言ひ足したほどであつた。然しとにかくポルテールがかつて此世

に生存して居た人である事や大へん奇習な作者であつた事も知つて居たし。普魯西
のフレデリック大王は名高い大將軍であつた事も知つて居た。露西亞の作家では
デルツァーヴィンを尊敬して居たけれども愛讀したのはマールリンスキーで獵犬の
一番よいのにアマラット・ベツク(物語中の人物)といふ名を附けた位……

此二人に始めて面會つてから二三日して私はパンテレー・エレミツチに逢ふつも
りでベズンノゾオ村へ出掛けて行つた。その小さな家はすつと遠くからそれとわ
かる村から半哩ばかりの樹などの少ない「山手」とよばれて居る處にあつて畑に
下りた處の様に居る。邸宅と言つても古い倒れかゝつた大小四つの建物がある
あるばかり——主家に厩に納屋に湯殿で。それも離ればなれになつて居て、まはり
に垣もなければ門も見えない。私の馭者は何處へ馬車をつけて良いのか解からん
ので填塞つて仕舞つて見えない位になつた井戸の側で馬を止めた。納屋のそばに
毛のもちやくした狗仔の瘦せたのが幾つか寄つて死んだ馬を食ひ裂いて居る。馬
は多方オブラッサンだらう。其狗仔の一疋が血の附着いた鼻を擧げて急しく吠え
ついたがまた露になつた肋骨に嚙りついてしまつた。馬の側に十七位な浮腫んだ、
黄色の顔をした少年が一人。哥薩克の様な着物を着て足を露出したまゝで立つて居

て言ひつけられた役目を果すのだといふ風で犬を見張つて居ては時々最貪婪な犬に一鞭くれる。

『主人は御在宅かね?』と聞く。

『知んねえや呼んで見ねえ』と返事をする。

私は馬車から下りて主家の階段を上つた。

チエルトツブハノーブ氏の住居は甚だ不愉快な光景を呈して居る。梁は雨風に洒れて所々釘がゆるみ煙突は崩れ家の隅々には湿つて色が變つてもう大分歪んで居る小さな塵埃に汚れて居る藍色の窓が壊れて垂れかゝつて居る軒の下から言ふに言はれぬ難しい様子をして覗いて居る年取つた無頼漢などの服付が丁度この窓のやうだ。戸を敲いて見ても答へるものはない。が戸を通して劇しい聲で何か言つてるのは聞える。

『A,B,C,さあ、おい馬鹿!』と呟れた聲で言つて居る、『A,B,C,D……………さうぢやない! D,E,E,E!……………さあ、こら馬鹿!』

私はまた戸口を敲いた。

すると同じ聲が叫んだ、『御入り何誰?』……………

私は空閑とした小さな玄關の室に入つた。開け放した戸の向ふにチエルトツブハノーブの姿が見えて居る。垢じみた東洋出來の寛衣を着てゆるい股引を穿き、赤い頭巾をかぶつて椅子によつて居る。片手で稚い兎犬の顔を押へて片手には一片の麵麩をもつて犬の鼻先に見せびらかして居る。

『やあ!』と彼は威嚴のある聲で席を起たずに、『よくおいで下すつた。さあ御掛け下さい。今ヴェンゾルの奴にかゝつて忙がしいんです……………チホニイブニツチ』と言つて一段聲を高めて、『おい、どうした? 御客様だぞ』

『只今、只今』とチホニイブニツチが次の室から對へた。『マーシャさん私の頭布を出して下さい』

チエルトツブハノーブはまたヴェンゾルの方へ向て鼻の上へ麵麩片をのせた。見廻すと長の揃はない十三本脚のある、ひどく歪んだ廣い卓と使ひならして窪んでしまつた四つの籐椅子との外には室の道具は何もない。壁もその昔は白く塗つてあつたのだらうが青い星形の斑點が澤山出來て處々剥げ落ちた。窓と窓との間には大きな赤い木の枠に入つた鏡が一つかゝつて居るが曇つた上に龜裂が入つて居る。室の隅には煙管懸と銃が幾挺か立てかけてあり天井からは太い黒い蜘蛛の緯

が吊下つて居る。

「A、B、C、D」と、チエルトツブハノーヅは悠揚またやり出したが忽ち烈しく怒鳴りつけた、「E、E、E、E………わ、こん畜生！馬鹿！………」

然し可愛さうに危はたい戦慄へるばかりで、口を開けやうと思つてもどうしても開かない、只心配さうに尾を揺かし乍ら顔に皺をよせて困つたといふ風に目ばたきをした。そして「いかに、貴方様の仰しやる通りで」といふ様に濫面を作つた。

「そら食へ、さあやれ」と主人は烈しく繰返して言ふ。

「吃驚して仕舞つたんでせう」と自分が口を入れると、

「ちや、逐ひとばしてやらう！」

と言ひさま、一蹶り蹶上げたので犬は可憐さうに、そつと起き上つて鼻の麵粉片をふり落して丁度爪立つて歩く様に、びびく情々として玄關の方へ行つた。道理な事である、初めて訪ねて来た客の前で斯んな虐待をするのはひどい！

次の室へ通ふ戸口が静かに軋つたかと思ふと、ネドビユスキン氏が入つて来た愛嬌よく禮をして、顔に微笑を湛へて居る。

私が立ち上つて頭を下げる。

「どうぞ、其の儘どうぞ其儘」

二人が腰を下すと、チエルトツブハノーヅは次の室へ入つた。

「貴方は長らく此の邊に御いでなすつたので御座いますか」とネドビユスキンは小聲で言ひ出した、慎深く手をかざして咳をしそれから作法として暫らく指を唇の前にあてゝ居た。

「先月やつて来たんです」

「あゝ左様で」

二人は一寸黙つた。

「此頃は、どうも好い御天氣がつままして」とネドビユスキンが盛り返す、そして何だか天氣の好いのは、幾分私の御蔭でもあるかの様に難有いといふ服付をして「どうも作はすばらしく好い様で御座りますヨ」

私はいかにもといふ微笑に領いて見せたばかりで、二人は復黙つた。

「パンテレー様は昨日、兎を二疋お獵りなさいましたな」とネドビユスキンがまたやつこの思で言ひ出した、正しく話をひき立たせ度いとあせつて居るのだ、「いや實に、それは大きな兎で御座いましたよ」

「チエルトツブハノーヅさんは好い獵犬をお持ちですか？」
 「ほんとうにすばらしい犬が御座います」とネドビユスキンは喜んで返事をする。
 「まづ此邊では一番で御座いませうな全く」(すつと私の方へ乗り出して)「それはさうと、バンテレー・エレミツチ様はほんとうに偉い人で御座いますよ。なんでもほしいとお思ひになると——たい一寸さういふ考をお起しにさへなれば——瞬く間にそれがその通りになるんで御座いますからなんでも、まあ發條仕掛の様に整然と出れますのです。バンテレー・エレミツチ様はそれはもう……」
 チエルトツブハノーヅが入つて来た。ネドビユスキンはつこりして話を止めた。そして「御自身で御覧になつたら解ります」といつた様な風に眼で知らせた。そこで三人は獵の話始めた。
 「私の獵犬を見て下さいますか？」とチエルトツブハノーヅは自分に問ねたが、返事も待たずにカーブを呼んだ。
 頑丈な若者が緑色の長い藍色の襟に徽章の鈕子をつけた帆木綿の上衣を着て入つて来た。
 チエルトツブハノーヅが打切ら棒にいふ、「フオムカにさう言へ、アンマラット

とサイガを連れて来いつて、騒がせない様にな了解つたか？」
 カーブは無作法ににやりとして、譯の分らぬ語を残していつて仕舞つた。しばらくするとフオムカがやつて来た。頭髪を綺麗に撫で附けて鈕子をしつかりかけて、長靴を穿いて獵犬を連れて来た。作法であるから私は此恐鈍な動物を賞めてやつた(兎獵に用ふ犬は一體にひどく愚鈍な者だ)。チエルトツブハノーヅは正面にアンマラットの鼻の孔へ唾をかけた。が犬にはそれが少しも難有くはなかつたらしい。ネドビユスキンもうしろからアンマラットを擦つてやつた。吾々はまたいろくど話し出した。話すに従つてチエルトツブハノーヅも全く打解けて最早威嚴を見せるといふ風もなく、輕蔑したやうに鼻息を荒くするといふ風もなくなつて、顔の表情が變つて来た。かれはちらと私を見て、またネドビユスキンを見た……。
 「おい！」と不意に大聲を出して、「どうして彼女は獨りで引つ込んでるんだ？ マーシャ！ マーシャ！ 此處へ来い！」
 隣室で人の氣動がしたが返答がない。
 「マーシャ！ マーシャ！」とチエルトツブハノーヅがまたいかにも可愛いといふ様に言つた、「こちらへおはいりなめに耻かしがる事はないよ」

戸が静かに開いて、丈の高い、嫂嬢とした二十許の娘の姿がちらと見えた。浅黒いジプシイらしい顔付、黄褐色な雨の眼漆の様に黒い髪毛をして、その大きな皓い齒は眞紅な唇の間に輝いて居る。白い着物を着て、藍色の肩掛を金の袷針で頸の周圍につかど止めて、その種族特有の膚緻なすらりとした美しい腕を少し見せて半隠して居る。獸か何ぞの様におづ／＼と羞かしそうに二歩進んだが立ちどまつて下を向いた。

「さあ、紹介しやう」とパンテレーエレミツチが、「これは妻ではないですが、妻も同様に見て頂いて居るものです」

マーシヤは一寸赧くなつて、きまり悪る氣に微笑んだ。自分は軽く會釋して、ひどく可愛らしい女だなど思つた。恰好のよい高い鼻のびた透き通るかと思ふ様な小鼻秀でた眉の勢のある一刷毛、白い殆んど落ち込んだ頬——すべて是等の顔形が、我儘な強い情と向不見な大膽な心とを現はして居る。髪束ねの下から細い光澤のある後れ毛が二筋三筋太い頸に翻れかゝつて、——その秀れた生れ立ちと元氣とを思はせる。

彼女は窓際に行つて、座つた。自分は彼女の迷惑を増すまいと思つて、チエルトツ

ブルハノーグと話を始めた。マーシヤはそつと首を廻して、盗む様に羞かしさうにしかも敏捷く私の方をすかす様に覗ひ始めた。眼の光が蛇の舌の様にちら／＼する。ネドピユスキンが傍に座つてなにか耳打をする、また莞爾した。莞爾した時鼻に皺が寄つて、上唇がひきつづつて、猫か獅子かなんぞの様な顔付になつた……。

「あゝ、これは（手を觸るべからず）といふ種類の女だな」と思つて今度は此方からたをやかな體のつくり、窪んだ胸はき／＼した角のある振舞ひを盗むやうに見てやつた。

「マーシヤ御客様に何か御馳走でもしなきあなるまいぢやないか？」とチエルトツブルハノーグがいふと、

「ジャムなら御座いますよ」と答へる。

「よし、ジャムを持つて來い、それから序にゾオッドカを少し然してね、マーシヤ六弦琴も持つて來て呉れ」と彼は後から大聲で呼びかける。

「六弦琴など何になさるの？ 私は歌なんか詠ひませんよ」

「なせ？」

「やりたくないんですもの」

「なに、つまらん事をいふ、いざとなるとやらうつていひだすくせに」
 「何ですつて？」と眉を急しく寄せ乍ら問ひ返した。
 「頼まれた時にはさ？」といくらかまごついた様にチエルトツブハノーヴがいふ。

「ああ！さうなんですか」

と言つてマーシヤは室を出たが暫くすると、ジラムとゾットカとを持つて戻つて来て、そしてまた窓際に座る。額にはまだ鍔が一筋残つて、二つの眉が胡蜂の觸角の様に上下に動いて居る。……諸君は胡蜂のあの意地の悪い顔を見た事がありますか？「これあ、一嵐やつて来るわい」と私は思つたです。話がだれて来て、ネドビユスキンは全く口を緘んで仕舞ひ強いて笑顔をつくり、チエルトツブハノーヴは眞赤になつて喘々言ひ乍ら眼を見開いて居る。私は別れを告げ様かと思つた。……と不意に、マーシヤが立ち上つて窓を押し開けて頭をつき出した、そして大聲で通りすがりの百姓女を「アクシニヤ！」と云つて呼びかけた。女は吃驚して振り向かうとする機会に迂り轉んで堆肥の上にはつたり倒れた。すると、マーシヤはそり反つて面白さうに笑ふ、チエルトツブハノーヴも矢張り笑ふ、ネドビユスキンは

歡んで妙な聲さへ出した。こんな事でみなまた元氣がついて来た。電光の一闪で嵐は去り………空氣また清涼となつた。

それから半時間ばかりは吾を忘れた心持で饒舌つたり嬉戯けたり、まるで子供の様であつた。其中でも、マーシヤが一番妙いで見たが、チエルトツブハノーヴは寸時もマーシヤから眼を放さない。マーシヤの顔は漸次白くなり、小鼻は大きくなり、眼は光を増すと同時にますます黒味を帯びて来た宛然野獸の遊び戯れて居る様である。ネドビユスキンは短かい、肥えた小さい肢で、マーシヤの後から家鴨の雌を追ひかける雄の様にびよこ〜歩く。ヴェンゾルさへ玄關の方にあるその隠れ所から這ひ出して戸口の處へ一寸立つて吾々の方を見て居たが急に躍り上つて吼へ出した。マーシヤは次の室へとび込んで六弦琴を引抱けて来るや否や肩掛をかなぐり捨て、そ〜くさと座つたが頭を高く上げて、ジブシーの歌をうたひ出した。聲は震を帯びて硝子の鈴を打つた様に鳴り出して、一しきり高く激すると、やがてかすかに消えてゆく。……心は楽しさと痛ましさとで一杯になつた。……チエルトツブハノーヴは躍り出した。ネドビユスキンは調子に乗て足踏みをしたり足をふり動かしたりしてゐる。マーシヤの身を撓めるのは恰で火の中に入れた樺の木の皮の

様だしなやかな指が極めて軽く六弦琴を掠めてとぶかと思れば、その浅黒い喉が二列になつて居る首飾の琥珀の下で静かに張り上る。すると忽ち歌を止め疲れ切つたやうになつて仕まつたが、まだ無意識な様に極めてかろく六弦琴を掻き鳴らして居る。チエルトツプハノーヴは立つて居ながら愉しさに肩を動かしたり一つ所々でくるく廻つたりして居ると、ネトビユスキンは支那人形の様に頭ばかり動かして居る。それからマーシャは身體をしゃんとして昂然と頭を上げ、一段聲を張り上げて狂者の様に歌ひ出す。とチエルトツプハノーヴは再び身を地上に凍めて忽ち天井まで躍り上りそして「もつと早く……」と叫びながら獨樂の様に廻り出す。

「もつと早く早く早く！」とネトビユスキンも口早に聲を挟む。
其晩私がベズソノゾオを出掛けたのはもう随分晩かつた。……

「三十二」

チエルトツプハノーヴの最後

(一)

私が訪問した時から二年程経つて、パンテレーエレミツチの懊惱——眞の懊惱が始まつた。失望災難不運すべてこれらは今迄幾度か経験して来た事だけれど彼は皆これに頓着する事なく、いつもそれに打ち勝つて来たものだ。然るに今度彼の身にふりかゝつた第一の打撃はまことに彼の心を破るものであつた。マーシャが彼を見捨て去つてしまつたのである。

大變氣樂さうにして居た此家をば見捨てる氣にならせたものは何かといふにどうも判然しない。チエルトツプハノーヴは死ぬ日までヤツフといふ近所の若い槍騎隊の休職大尉がマーシャの逃げ出した原因だと思ひ込んで居た。パンテレーに言はせると絶えず口髯を捲いて居たり矢鱈に香油を塗りつけたり意味あり氣な追従笑ひをしたりなどしてたのがマーシャの氣に入つたのだと言ふ。然し乍らこ

の事に就てはマーシヤの血管に流れて居る放浪的なジブシイの血がさらに興つて力のあつたといふ事を認めなければならぬ。それはとにかくある晴れやかな夏の夕暮、マーシヤは少し許りの手道具を小さな一包にひきまごめて、チエルトツブハノイプの家を出て仕舞つた。

此事のある三日許り前から、マーシヤは室の隅に踞つて、負傷の狐の様に壁に打伏して誰れにも一語も口を利かないで、只眼をくりくりさせ眉をびくりくり動かし乍ら幽に齒を喰ひしばつて、そして我身を隠す様に兩の腕を動かして居た。こんな気分になるのは前にもあつた事であるが決して永く続いた事はなかつた。それでチエルトツブハノイプはまたかと思つて自分でも氣にも掛けず女にも別に何ともいはなかつた。然し、或日獵師言語で言へば、最後の二疋の獵犬さへ「去つて仕まつた」といふ犬小屋から歸つて来た時、下婢の小女が震へ聲で、マリヤアキニフィエフナが旦那様によろしく申してくれ、そしてもう二度と御目に掛る事は出来ないかもしれません、が御機嫌よう御暮しなさいます様にと言ひ残して行つた事を話した。チエルトツブハノイプは其場でよろ／＼としたが、噎れた唸るやうな聲をあげながら出掛けに短銃を引つ攫んで、すぐさま逃亡者の後を追つかけた。

一哩半程して近所の田舎町へ通ふ往還に沿つた樺の林の傍で透ひ付いた。太陽は今地平線間近に落ちかゝつて、四邊一面はばつと華な夕の光に包まれた——樹も、草も地面もすべて一様に。

マーシヤの影を見つけるや否や、彼は「ヤツフの處へだ、な——ヤツフの處へ——」と唸る様に言つた。マーシヤの傍へかけつける迄も「ヤツフの處へ行きあがるな——」と幾度か繰り返した、そして一步一步殆んど踏躓として走つた。

マーシヤは立ち停まつて振り返つて彼に對ひ合つた。光線を背にして立つたので體中眞黒で、黒い木材で彫刻されたもの、様に見える、たい、兩方の白晴ばかりは銀色の巴旦杏の様に浮き出て居るけれども、眼そのもの——瞳——は以前より一層濃くなつた。

マーシヤは包を投り出して腕組みをした。

「ヤツフの處へ行くんだ、な、賣婦奴！」と繰り返して、チエルトツブハノイプはあはや彼女の肩先を捉まへやうとしたが、その機會に彼女と眼を見合せたので極りがわるくなり、落附かない様子で其のまゝ立ち止まつた。

「ヤツフさんの處へなぞまゐりはいたしません、もう貴方と一所にはゐられないと

いふだけなのです』とマーシャがおとなしい沈着いた調子で答へる。
 『一所に居られない？なせ居られない？何か私が氣に觸る様な事でもしたといふのか？』

『マーシャは頭をふつて氣に觸るなんてそんな事ないわ只ね私貴方ここに居て氣が塞いでいけないんです……今迄受けた御恩は忘れやしないんですけど私どうしても居られないの——どうしても！』

チエルトツプハノーヴは吃驚した。思はずした、か脇を打つて驚きのあまりに跳び上つた。

『まアこれはどうした事だ！今迄私と一處に暮してゐて、安氣で楽しくばかりして居たものが今更急に氣が詰る！そして私を振り捨てる！行つてしまふ布片を被つて逃げて行く。奥様の様に尊敬されて居たんだに』

『そんな事仕て貰ひたかないわ』とマーシャが口を挟む。

『仕て貰へない？うろつき廻るジブシイから奥様になり上るのを、それを何とも思はんで！どうして思はんのだ此下司女が？そんなことを己が眞實にすると思ふのか？なにか隠して謀んでやがるんだ——謀んで！』

と言つて彼はまた顔を盛めた。
 『謀計なんてそんな事考へて居やしないわ、今迄だつて決してそんな事考へた事はないわ』とマーシャが明亮した聲で決然いふ、『今も云つた通り氣が詰つて仕方がないんですもの。』

『マーシャ！』と叫んで、チエルトツプハノーヴは拳で自分の胸をひと打ちうつて。

『おい、止せ、黙れ、よくも己を苦めた事だ……もう澤山だ！だがな！チツシャがなるといふかまあ一寸それを考へて見い少しはあれの事も思つてやつたつて罰は當るまい！』

『あ、チホン、イヴニツチさんへ宜しくね、それから仰つて下さい、あの……』

チエルトツプハノーヴは手を揉んで『いや馬鹿な事言ふな——行く事あならん！ヤツフの奴に待ち設けを喰はしてやる！』

『ヤツフさん』とマーシャが言ひかけると……

『ヤツフさんは容子が好いよ』とチエルトツプハノーヴが眞似をする。『彼奴あ卑劣な奴だ、野良犬の様な奴だ——全くさうだ——おまけに狼の様な面相をしやあ

がつて！」

まる三十分間二人はいろ／＼と言ひ合つたが彼はマーシャの傍へつと寄つたり離れたり拳固を振り廻して見せたり女の前に頭を下げたり泣いたり怒つたりさま／＼な手を盡した。

マーシャはたゞ「いけませんよ私なんだか悲しい様で……辛氣臭くて仕方がないんですもの」を繰り返すばかり。

次第々々に女の顔はひどく平氣になつて来て、チエルトツプハノーヴが阿片でも飲ませられたのかと言つた位殆んど睡むたさうな顔付をして居た。

マーシャは「退屈なんですよ」の十度も繰り返した。

「ぢや殺しちまうかどうだ？」と不意に叫んで、チエルトツプハノーヴはポケットから短銃をひき出した。

マーシャは笑を含んで顔が生々して来た。

「え、殺して下さい御存分に、でも歸る事だけは私いやですわ」

「どうでも歸らないつていふのか？」チエルトツプハノーヴは引き金を上げた。「歸らないわ私生きてるうちはどうしても歸らないわ私の言つた事は確かだよ。」

チエルトツプハノーヴは忽ち短銃を女の手に投げ渡して草の上にどつかと座つた。

「ぢや己を殺せ………汝が居なけりや生きてる効がない。己は汝に厭がれて来たし——己はまた世の中のものかみんな厭になつた！」

マーシャは屈んで荷物を取り上げて短銃を草の上へ筒口をチエルトツプハノーヴから離しておいて、すつとそばまでよつて行つた。

「まあ貴方どうしてそんなにく／＼するんです？ジブシイの娘はどんなものかつて事御存じないんですか？これが性質なんですから、もう諦めて下さらなくつちや。辛氣といふ奴が来て仲を割いて、どこか分らない遠い／＼所へ靈を誘ふ様になつたからには、どうしてちつとして居られますものか。マーシャを忘れないで下さいよ、ね、こんな好い人はもうありはしませんよ私だつて貴方を忘れやしないわ、だけど二人の関係はもうこれで終よ！」

「マーシャ、己は汝を愛してたんだ」とチエルトツプハノーヴは自分の顔を埋めて居た指の中でつぶやいた……

「私だつて愛してたわ、可愛いパンテレー・エレミツチ」

「己は今でも汝を愛する狂氣の様に夢中になつてゐる——それなのに汝が正氣で全く何の理由もなく、こうしておれを見捨て、おいて世界中を漂泊して歩かうといふには——うむそれで思ひ當る、もし己がこんな文なしの素寒貧でなかつたらよもや汝も己を捨てる様な事はすりやしまい！」

この言葉を聞いてマーシヤは只笑つた。

「まあ此人は汝は金銭なんか何とも思つてないつてよつく言つたのに」と言つて、チエルトツプハノーヅの肩のあたりをひどく小突いた。

すると彼はひよつくり起き上つて、

「だが、まあ少し金をやるからせめてそれ汝は受取つてくれ——一文もなしで如何するんだ？だが、それよりや、殺してくれ！頼みだ、一思ひに殺つて呉れ！」

マーシヤは復首を振つた。「殺せつて？私西比利亞くんだりまでやつて貰ふなんて嫌な事です」

チエルトツプハノーヅは戦慄した。「それぢや、たいそれだけで——罰が恐ろしいからやれないつていふんだな」と言つてまた草の上にとつた。

マーシヤは黙つて傍に突つ立つて居たが、嘆息を吐いて、「貴方には御氣の毒なの

貴方は好い方なんですわ………けどもね私どうしても仕方がないんですもの、さよなら！」

こう言つてくるりと振り向いて、二足ばかり歩きかけた。此時夜は次第に迫つて、蒼茫たる夕の色は、ひしと四邊を立ちこめた。チエルトツプハノーヅは、はつと起き上つて、背後からマーシヤの兩臂を捉へた。

「ぢや、このまゝで、ヤツフの處へ行くんだな蝮蛇奴！」

「左様なら！」とマーシヤは更めて心を籠めて鋭く言つた、そして思ひ切つて歩き出した。

チエルトツプハノーヅはその後姿を見送つて短銃の置いてあつた處へ走りよつて引つ捉むや否や狙を定めて發砲した………然し、引金に手をかけ様とした時に俄に腕が痙攣つたので、彈丸はマーシヤの頭の上をしゆつと通つた。女は立ち止まりもせず、頭をひねつて肩越に彼を見たが、何だか挑發ふ様に歩く度に體を揺り乍ら行つて仕舞つた。

彼は顔を隠して——蓦然に駆け出した。

然しまだ五十歩も走らないうちに彼ははつと立ち竦んで石の様になつて仕舞つ

た。聞き馴れたよく聞きなれた人の聲が彼の耳に漂つて来た。マーシャが歌をうたつてゆくのだ。「そりや若い日の事だつた」といふ歌だ。

一節毎に哀れに又た情の燃えて居る様にそれが夕暮の空を逍遙ふ如くに響いて来るチエルトツプハノーヴは凝然と耳を澄した。聲は次第に遠ざかつてふつたりと消えたがやゝあつてまた遠くから漂つて来た幸と聞きわけられる程ではあるがやつぱり情熱の籠つた調子である。

「人を恐にしやあがるのだ」とチエルトツプハノーヴは思つたが、また直氣をかへて「あゝ否あれが私に告げる永久の袂別の辭なんだ」と悲しさに言つた――そしてはらくと涙を墮した。

次の日彼はヤツフ氏の宿に現はれた、ヤツフ氏は世間並の人で田舎の寂しさを厭つて、「一寸でも若い婦人連に近い所」に居たいと言つて近所の田舎町に住んで居た。ヤツフは留守だつたが給仕に聞けば、昨晚モスカウへ出立したとの事。

「ぢや適切さうだ」とチエルトツプハノーヴは物狂ほしく叫んだ、「互に謀し合せて置いて二人一所に逃げやがつたんだな……よし、今に見ろ！」

そこで彼は給仕の止めるのも聞かずに若い騎兵大尉の室へ躍り込んだ。室の中には安樂椅子の上の處に、槍騎隊の正服を着けた主人の油繪の肖像がかゝつて居る。「うむ、此處に居たか尾無猿！」と大聲に怒鳴りつけて安樂椅子の上にとび上ると、いきなり拳固を一つ喰はしてびんと張つた繪布に大きな穴を開けてしまつた。

給仕の方へ振り向いて、「馬鹿主人にさう言へ、彼奴の汚い面相の留守に貴族のチエルトツプハノーヴ様が御いになつて繪の面相に穴をお開けになつたつても、し又復讐が仕度けりやチエルトツプハノーヴ様の御居になる所は知つとる筈だつて。それもいやなら己の方からやつてくるわ。猿の畜生海の底へ隠れたつて引き出さずに置くものか！」

こんな悪態を吐き乍ら安樂椅子からとび下りて悠々として引揚げた。

然し騎兵大尉のヤツフは復讐を要求しなかつた――實際彼は何處へ行つてもヤツフを見掛けなかつた――そしてチエルトツプハノーヴも強いて敵を探し出さうとも仕なかつたので、何の悪い噂も起らずに済んだ。マーシャも其後間もなく跡を晦して仕舞つた。チエルトツプハノーヴは酒をやり出したが暫くして「やめた」。然し今度は第二の打撃が落ちかゝつて来た。

(二)

それは彼の親友、ライホンイワノヴィツチネドビユスキンの死んだ事である。死ぬ二年位前から漸々體が衰へ出して居たのが、其後喘息を病んで常もぐうぐう眠入つて居て、覺めてもすぐには正氣にならなかつた。村の醫者は「これは何でも卒中のやうなもの、徴候だ」と言つて居た。マーシヤの家出する前三日の間即ち「氣が塞ぐ」と言つたあの三日の間、ネドビユスキンは自分の所有地のベズゼレンディエフカの方へ行つて居たが強い風邪を引いて寝て居た。だからマーシヤの行動は彼に取つては一層思ひ設けぬ事であつた。殆んどチエルトツプハノーヴその人よりも餘計に深くこの事に動かされた位であつた。性質好人物で、臆病なものだからチエルトツプハノーヴに對してもたゞ優しい同情を寄せるばかりで外の事は一語もいはずた、氣の毒に思つてまご／＼してゐるばかり……然し此事件は彼の心を滅茶々に打壞して仕舞つた。「彼女は私の心臓をかきむしつて仕舞つた」と好きな基盤織の安樂椅子に倚りかゝつて自分の指を捻りながらつぶやいた。チエルトツプハノーヴが諦め切つた時でさへ彼は元氣にならずまだ「心の中が空

虚になつた」と思つて居た。「此處が」と胃の腑の上の胸の中程を指して折々言ふ。こんな具合で冬迄ぶら／＼して居た。霜が降る様になつて喘息は幾分よくなつたが、今度は「卒中の様なもの」ではなく、正銘擬なしの卒中に襲はれた。直様正氣が失くなつたのではないので、またチエルトツプハノーヴの顔付もわかるし、また彼が失望して「おい、チツシヤ、おまへおれを見捨てる積りか、己がよしとも言はないのに、マーシヤの様に出て行く積りか？」と呼んで居るのも聞えた。聞えたばかりでなく、廻らない舌で口籠り乍ら返事をした。「お、バーアーエーエーエーイツチ、貴方のいふ通りにいたします」

さうは言つたものゝごとく、其日村醫者の來るのも待たずに亡くなつて仕舞つた。醫者は、まだ全く冷々切らない體を見て、何も手を着ける事もないので、只世の無常を眼前に見て哀れを催したと云ひ、「ソットカ酒を一杯と肴を一口」請求したのであつた。かうあらうとはかねて思はれて居たのであるが、ライホンイワニツチはその財産を尊敬して居た恩人であり、また氣の大ほきい保護者であつたバンテレ！エレミツチチエルトツプハノーヴに遺して死んだ。然しそれはこの尊敬すべき恩人のために大した利得にはならなかつた、といふのは、其後間もなく其財産は公

賣に附せられて、一部は墓碑の彫像の費用に廻された。チエルトツプーハノーグはこれでもつて彼の父親の狂染みた性質が彼にも現はれたといふ事が分らうが朋友の死灰の上にそれを建てるのは最適當な處置と考へたのだ。で天使の祈禱して居る處を現はした其彫像は、モスカウへ注文された然し商人は田舎には彫刻の鑑識家なんか滅多にあるもんぢやないといつて、天使の代りに女神フロラ(花の神)の立像の、カザリン時代に設計せられそのまゝになつて、モスカウ近くの廢園の一つに長い間飾られて居たのを薦めて送つてよこした。これについては充分譯のある事で此彫刻はロココ式で肉附のよい小さい腕波打つてゐる捲き髪露な胸の邊の薔薇の花束婉柔に曲げた體附などが大變巧に出來て居るが、それが無代價で此商人の手に入つたからである。こんなわけで今も猶此神話的な女神の像は優美に片足を舉げて、テイホンイヴァニツチの墓の上に立つてゐる。そしていかにも氣取つた勿體ぶつた微笑を含んで村落の墓場へいつもく訪ひ寄つてその邊を逍遙ひ歩く犢の群や羊の群を見下してゐるのである。

(三)

忠實な友を失つて、チエルトツプーハノーグはまた酒をやり出した今度は前よりすつと酷い。萬事もう全く具合わるくなつて仕舞つて、遊獵を仕やうにも金銭はななく、無け無しの財産は消費つて仕舞ひ残つて居た僅かばかりの雇人等も逃してしまつた。パンテレー・エレミツチは茲に全く孤獨になつて、自分の心を打開けるは恐か、只一語の話をするものさへもなくなつた。只彼の傲慢のみはこんなになつても更に減じる様な事はなかつた。いやそればかりでなく周囲の事情が悪くなればなる程益々横柄に尊大に近づき難いものとなつて仕舞つた。かくて彼は完くの人類嫌ひとなつた。たゞ一つ彼の心を慰め彼の心を歡ばすものがまだ残つて居た。それはドン産の堂々とした灰色の馬で、マレツク・アデルといふ名を附けて居たが、これは實に素破らしい逸物であつた。

此馬が彼の手に入つた次第は斯様である。

或日、彼が馬に乗つて隣村を通つて居ると居酒屋の前に百姓が寄つて集つて何か大聲に喚いて居るのを聞いた。群衆の真中で頑丈な腕が全く一つ處で上つたり下つたりして居るのが見えた。

「何が起つたのだ？」と彼は持質の毅然した調子で小家の入口に立つて居た百姓

の婆さんにたづねた。婆さんは座敷でもして居る様に入口の柱に寄りかゝつて居る。酒屋の方を諦視して居たのである。白雲頭の腕白が一人更紗の襦袢を着て檜の十字架を小さな裸の胸にかけ、小さな兩肢を廣げて座つて居る。そして固く握つた小さな兩の拳が婆さんの樹の皮で造つた上履の間になつてゐる。雛が一羽ずつとその近くによつてライ麦の麵麩のかびた缺片をつゝいて居る。

「あんで御座りますだかね、あなた様」と婆さんが返事をする。萎びて黄な手を小兒の頭に載せて、「あんでも若い者が猶太人を打ち擲るとかいふこんで御座りますだ」

「猶太人を？なんていふ猶太人だ？」

「あんちふだか知りましねえだかね、あなた様。此頃猶太人か一人此の邊に参りました、それがどこから来たか——誰れもしりましねえだ。グアシヤ、おつ母とけへ來うよ、これ、しつ、しつ、畜生奴！」

婆さんが雛を逐ひやる間にグアシヤは婆さんの下袴につかまつた。

「ほーれ、見さつせい打つとりますすべいね」

「どうして叩くんだらう？なにか仕たのかな？」

「どうだか知りましねえ。だがきつとそれだけのゐるい事がありますすべい。それでなくたつて打のが當然だよ。彼奴が基督様あ磔刑にしたんだかね、あなた！」
チエルトツブーハノーヅは大聲を擧げて乗馬用の鞭でもつて馬の頸の邊を一打ち打つて、驀然に群集の方へ馳け出した、そしてその中へ躍り込んで、其同じ馬鞭を擧げて右に左に滅多矢鱈に百姓どもを殿ち据ゑ、恐ろしい聲で、「無法な奴等だ！黙め！御法度で罰するんだ、私にすることぢやないぞ！御法度だ！御法度だ！御法度だ！」と喚いた。

二分とたゝないうちに群集は支離に逃げてしまふて酒屋の前の地面には、小さい瘦せた、真黒な動物が、帆木綿の長い着物を着て髪を振り亂して、へとくになつて倒れてゐる……蒼い顔見張つた眼開いた口……何と言つたらよからう？…………
氣絶したのか、但しは全く死んだのか！「何で猶太人を殺したんだ？」とチエルトツブーハノーヅが威嚇す様に鞭を揮り廻し乍ら出来るだけの聲を張り擧げて叫んだ。

群集は力のない唸り聲を出してこれに應じた。百姓の中には肩のあたりを擦るものがあり、腰を擦るものがあり、鼻のあたりを撫るものもある。

「なか／＼酷く鞭を用ふなあ」と後の列でいつたものがある。
 「どうして猶太人を殺したんだ、おい基督教の假面を被つた外道等？」とチエルト
 ツプハノーグがまたいふ。

然し其時地面に平伏して居た動物がひよつこりとび起きてチエルトツプハノー
 グの處へ走り寄つて、痙攣でも起した様に鞍の端に絶り附いた。

「生きてゐるやあがる！」といふ聲が背後の方から聞えて來た。

「彼奴あまるで猫だ！」

「貴方しいいやま御助けなすつて御救ひなすつて！」と言つたが氣の毒な猶太人
 は其間戦慄へ乍ら全身をチエルトツプハノーグの足の處へおしつけて、「御助け
 なすつて下さらなげにや殺されます、殺されます、どうぞ貴方しいやま！」

「何か恨まれる様な事でもしたのか！」

「なにもすりやいたしません、お、神様！此界限の牛が幾匹か死んだといつて……
 ……みな私が疑ひを掛けます……だが私は……」

「まあ、そんな事あ後でいゝわ」とチエルトツプハノーグが遮つて、「それより、さ
 あ鞍にしつかり掴つて隨いて來た。それから汝等！」と群集の方へ向いて言ひ足

す、「汝等あ己を知つとるか？——己は地主のバンテレーチエルトツプハノーグ
 だ。ベズゾノグオに住んでるんだ——だから私を對手取つて訴訟が仕たけや勝手
 にしろ——それからまたやり度けや猶太人を對手取つてもいゝわ、」

「訴訟を起すわけは御座りません」と髭の白い立派な顔付をした、古代の家長の姿
 そのまゝの百姓が丁寧に辭義をしながら言つた。（かうは言つたものゝ猶太人を打
 つた事なら微塵も他人に負けては居なかつたのだ）「私共は貴方様をバンテレー
 レミツチ様だといふ事はよく存じて居ります。どうも好い事を御救へ下すつて
 御禮の申し様も御座りません！」

「訴訟をするわけやねわ」と他の者も調子を合せた。「だが猶太人の野郎いつか取
 つめてやらにあなんねえ！逃げやうたつて逃すものか！始終氣を注げて居るから
 さう思へ！」

チエルトツプハノーグは鼻息あらく口髭を引張つて、かつてチホン・ネドビスキ
 ンを救つたと同じ様に迫害者の手から救つた猶太人を連れて並足で家に歸つて來
 た。

(四)

二三日過ぎて僅一人チエルトツブハノーヴの家に残つて居た馬丁が誰か馬に乗つて来て貴方に會つて話し度いと言つてると取次で来たので入口の階段の處に出で見るとそれは猶太人であつた。ドン種ドン種の立派な馬に乗つて馬は庭の真中に如何にも雄々しく泰然として立つて居る。猶太人は何も冠らず帽子を小脇にかひ込んで、鎧よろいの紐に足をかけてゐる。鎧よろいのものにはかけてゐない。ほろ／＼になつた長い上衣の裾が鞍の兩側へ垂下つてゐる。チエルトツブハノーヴを見かけて、ちゆつと唇を鳴らして、兩腕を張り、肢を曲て急に俯伏になつた。然しチエルトツブハノーヴは挨拶を返さないばかりでなく却てひどく怒つてしまつた、そして見る／＼火の様になつた。穢い猶太人が此様な立派な馬に乗つて来るなんて！……全く無禮極まる！「やい、エチオピアの怪物め！泥ん中へ放り出されないうちにとつと降りろ！」と怒鳴つた。

猶太人は從順しく直様袋の様に馬から轉げ降りて、片手で手綱を控えながら、莞爾もので頭を下げながら、チエルトツブハノーヴの傍へ寄つて来た。

「何の用があるんだ！」とパンテレー・エレミツチは嚴然として言ふ。

「あなた、いや、まあ馬を見て戴き度いと思ひますだよ！」と猶太人は一刻も御頭を止めずに言ふ。

「う……さう……馬あ、いゝ馬だ。だがどこから引つばつて来たんだ？盗んだんぢやあるまいな？」

「飛んだ事を仰ります、あなた、いや、まあ！私あ正直な猶太人で御座ります。盗みなどしやしませんね、たい貴方に上げ度いと思つて得て来ました——真正に！之を得るにやなか／＼骨折骨折のういたしました。たがね、なんと好い馬で御座りませうがな！ドンの州中探したつて、またとありやしましねえ！御覽なせいまし、あなた、いや、まあ、何ちう馬で御座りませう！さあ、何卒此方へまはつて見て下され！ほら……ほら……ぐるつと廻つて側に立つて見て下され！そいぢや、鞍を取りませう、どうで御座ります、あなた、いや、まあ？」

「馬は上等だ」とチエルトツブハノーヴは平氣を糺つて言つたが、胸は鍛冶の大槌の様に鼓動して居た。彼は馬といふものが心から好である、だから一目此馬を見た時もうその逸物だといふ事は見抜いて居た。

「一寸、まあ御覽なせい、あなたしや、ま！頭の邊を叩いてね、はい、はい、びつー、びつー、ひつー、斯様に風に！斯様に風に！」

チエルトツブハノーヴは厭だといふ風を見せ乍ら頭の邊に手をかけて其處を二つ三つ軽く叩いた、それから指を前髪から背椎に沿つて、すつと通した。そして腎臓の上の急所に手の届いた時には鑑定家の様に軽く其處を壓した。すると馬は忽ち背椎を弓の様にして驕を持つた黒い眼でもつて不審さうにチエルトツブハノーヴを見廻し乍ら鼻息を荒くして後肢を動かした。

猶太人は笑つて、ちよつと手を拵つて、「貴方しや、ま、此奴御主人様を知つとります、だ御主人様を！」

「詰らん事を言ふな」とチエルトツブハノーヴは迷惑さうに遮つた。「此馬あ汝から買はうつたつて……金銭はないし、呉れるつたつて猶太人から物が貰へるものか、己は神様が御自身で下さるつたつて人から物など貰ふこつちやない！」

「どう致しましてね！私が御進物として差上ると申しでもいたしましたかな！」と猶太人が叫ぶ。「御買ひなすつて下されませう方しや、ま……なあに金の事なら御待ち申してもよろしう御座ります」

チエルトツブハノーヴは考へ込んだ。

「一體幾何ほしいつて言ふんだ？」と、どうく口のうちに囁いた。

猶太人は兩肩を聳やかして、

「買ひ價で宜しう御座ります。二百留で」

馬は倍位な價値は充分ある——ひよつとしたら言ひ價の三倍位はするかもしれぬ。

チエルトツブハノーヴは傍を向いて熱でもある様に欠伸をした。

「其處で金は……何時？」と、烈しく眉を擡め乍ら猶太人の顔を見ないで尋ねた。

「何時でも貴方様の御都合で」

チエルトツブハノーヴは頭を反らしたが眼は擧げなかつた。「それちや返事にならん。明白と言つちまへ、ヘロデの息子め！己が汝等に借金をしとられると思ふかえ？」

「へいそいちや申します」と言つたが急いで言ひ足した、「六ヶ月の期限では……如何で御座りませう？」

チエルトツブハノーヴは返事をしなかつた。

猶太人は彼の顔付を覗つて、「どうで御座りませう？ 彼奴を貴方様の御腕へ入れさせて下さりますか？」

「鞍は要らん」とチエルトツプハノーヴが突然いつた。「鞍を外せ——おい？」

「はい、はい、外しませうで御座ります」とほく／＼者の猶太人は鞍を肩に取り乍ら口籠つていふ。

「それから金は」とチエルトツプハノーヴは念を押……………「六ヶ月中にな。そうして二百留とは言つたが二百五十留やる。いや、なんにも言ふな！ 支拂約束で二百五十留いゝだらう！」

チエルトツプハノーヴは猶眼を擧る氣になれなかつた。今迄決して彼の自負心のかく迄酷く傷けられた事はなかつた。

「さつと然うだ進物の積りなんだ」と腹の中で思つた。「御禮の積りで持つて来たんだな彼奴！」斯う思ふと彼は猶太人を接吻してやり度い様にも思つたがそれと同時に彼を打ちのめして呉れ度い様な心持もした。

猶太人は少し元氣がついて満面にお世辭笑ひを浮べ乍ら、「貴方いちやま露西亞風に手から手へ御取り下され……………」

「もつと見て見い！ 何事だ！ 希伯來人の癖に……………露西亞の習慣だ！ おい！ 此野郎！ 馬を引いて行つて厩に追ひ込め。そうして麥でも喰はして置け。己れは後から行つて世話あするわ。それから名は斯うつけるんだ——マレツクアデル！」

チエルトツプハノーヴは上り段を上つて行かうとしてあちらへ向たが急に振り返つて猶太人の處まで驅んで行つて温暖に手を握つた。猶太人は屈で彼の手に接吻し様としたがチエルトツプハノーヴは跳び返つて小聲で、「誰にも言ふな！」と言ひすて、戸口の中へ消えてしまつた。

五

其日からチエルトツプハノーヴの主なる興味主なる仕事主なる愉快はマレツクアデルであつた。その可愛がる事と言つたら、マーシャを可愛がつたよりも酷く、ネドビユスキンを大切にしたりよりもつと大切に思つた位である。またその馬の好い事！ まるで火の様に——まるで火薬の様に爆發さうだ——そしてポヤル（彼大帝の改革以前文武兩官に勢力を）の様に堂々たるものだ！ 一般的な事をさせても疲れ占めて居た往日の露西亞貴族の稱の様に堂々たるものだ！ 一般的な事をさせても疲れた色を見せずよく持續いて誠に従順なものだ、それで居て飼料の費用などはまるで

いらぬ位だ。外になにもないといふと足下の地でも囁む位であつた。並足で歩く時には乳母の腕に抱かれて寝かし付けられる様な心持がするし、だくを踏む時には海上に揺られる時の様な心持だし、一足驅にやる時には風を追ひ越す程な勢だ！呼吸が更に切れない完く肺が丈夫なのだ。腿はまるで鋼鐵だ、躓くなるといふ事はあつた例がない！溝や垣を越すのはわけもない事だ——それに何といふ利口な奴だらう！主人の聲を聞くと頭を振り上げて飛んで来る、もしちつとして立つて居ると言つておけば彼をばなれて来てしまつても、動かうともしない。然かし一寸振りむくと直様「此處に居ります」といふ様な細い嘶を擧げる。それから何にも怖くない。鼻をつまゝれる様な開夜にでも、または吹雪の中でも途に迷ふ様な事はない。何事があつても不見不知の人を傍へ寄せやうとはしない。若しよるものがあれば噛みついてやるといふわけ！それで犬までも決して寄り付かうとしない。もしよりつかうものなら忽ち前足を一寸その頭の上にあげたかと思ふと、それが此畜生の最後であるのだ。天稟の氣高さを持った馬には鞭は飾りに揮ればよい——神かけて觸る事はいらぬ！いやもう何も言ふには及ばぬ、まつたくの寶物だ馬ではない！

チエルトップのハノーヅはマレックの事と言はうとしても、さて何と言つたらよいか分らなかつた。なにしろひどく大切にしておいて居た！毛色は銀——古いのではない新しい銀——の様に輝いて、一種の薄黒い光澤がかゝつてゐる。もし其上をすつと撫でやうもんなら、それこそ天鵝絨の様だ！鞍も鞍下布も轡も——すべての飾りが全くしつくりと整然として輝々して——まるで繪の様な！チエルトップのハノーヅは——多く言ふ必要もあるまいが——手づから愛馬の前髪や鬣を編んだり、麥酒で尻尾を洗つたり、その上一度ならず光澤薬で蹄を磨き磨いた。時々マレックのアドルに乗つて出掛けてゆく、近所の人達に會はうといふのではない——彼は以前の通り彼等を選り捨てて居た——が田畝を横ぎり、人家を通つて……近所の愚物どもに遠くからマレックのアドルを賞めさせるためにゆくのだ！又どこかに獵でもあるとかある富裕な地主がかけ離れた自分の持地で會合を催すとかいふ事を聞きつけると彼はいつでもすぐさま出掛けて行つて、遠い地平線のあたりで緩と駆けさせて速いので美しいのでひどく觀るものを驚かす、それで居て誰一人として傍へよせつけぬ。ある時、さる獵好きな地主が従者と共に一生懸命逐ひかけたがやつぱり遁げて仕舞ふのを見て全速力で飛ばせながら勢一ぱい

後から呼び懸けた。「おい、君待つてくれ！なんでも好きなものと馬と交換してくれ！千留だつて惜みあしない。妻だつて子供だつて喜んでやる！一文なしになつたつて構やしないんだ！」

チエルトツプハノーヴは急に手綱を締めてマレックIIアデルを止める、と獵好きの紳士が乗りつけた。「やあ君」と大聲に、「幾何で承知して下さるか？え君！」「もし君が帝だつたら」とチエルトツプハノーヴは力をいれて「然も彼はシエークスビヤの事を聞いた事もないが」(譯者曰く、吾が馬の香が王國に開してかく言ふなるべし)「馬の代りに君の領地をすつかり遣るといふかもしれないが、それでも御免だ！」斯う言つて、くすくすと笑ひ乍ら手綱を絞つてマレックIIアデルをぐつとひつ立てて獨樂かなんぞの様に後足で空中をぐるりと廻らして、さてばつと駈させた！すると切株を乗り越え、乗り越え電光の様に行つて仕舞つた。そして獵好きの紳士は、(噂)によると富裕な公爵だ帽子を地面に叩き付け、身を投げ伏して、顔を帽子に埋めて、三十分ばかりは起きも得なかつた。

チエルトツプハノーヴはまたどうしてこの馬を大事にせず居られやう。かれが再び近所の人達に對して立派に鼻を高くし最後の得意を示し得たのは實に

此の馬の御蔭ではなかつたか？

(六)

兎角するうち時は容謝なく経過つて支拂の期日が近寄つて來ただのに二百五十留はおろかチエルトツプハノーヴは五十留の金さへ持ぬ。どうしたらよからう？どうしたら拂はれやう？遂に彼は斯う定た、「いゝわ、もし猶太人が用捨しなかつたら、もしどうしても待れんといつたら、家でも田地でもくれてやるわ、そうして馬に乗つて何處でもかまはん去つて仕舞はう！マレックIIアデルを遣て仕舞ふ位なら飢死してもいゝ！」こんな具合で流石の彼も大に當惑して、然も銷沈つて仕舞つたのである。然るにこの切迫つまつた場合に、運命の神は、後にも前にもたつた一度恵を垂れて微笑を見せた。といふのは、ある遠縁の親戚のチエルトツプハノーヴは名も知らなかつた女が遺言して彼の眼には大金と見える——丁度二千留を殘して死んだ！然も彼は其金を所謂危機一髪の際に受取つた即猶太人が來る筈の日の前日に。チエルトツプハノーヴは嬉しくてまるで狂氣の様になつた。然しヴオドカの事は決して考へもしなかつた、マレックIIアデルが手に入つた其日から酒は一滴も

口にしなかつたのだ。そこで彼は厩にとび込で、その愛馬に顔の両側と皮膚の薄い鼻孔の上に接吻した。「もう別離なくつてもいいんだ！」斯う言つて、よく櫛を入れた籠の下に手を入れて頸のあたりを軽く叩いた。主家へ歸つて來ると、二百五十留を勘定して小さな包に封じ込めた。さうして置いて、寝向に寝轉んで、煙管を吹かし乍ら後に残つた金を如何使つたらよからうかと考へ込んだ——素敵に好い犬を買はう。眞實の COSTROMA 種を、白と褐色の斑を、それに定めた！それからベルフイシユカとさへ一寸話をして、それには縫目に一面黄色な飾をした哥薩克の上衣を一着新調してやらうと約束した。そして上氣嫌で床に就いた。

其晩厭な夢を見た、その夢は、マレック・アデルには乗らないで、なんでも一角獸見た様な一種奇體な動物に乗つて獵に出た、すると雪の様に眞白な狐が一疋此方に向つて走つて來た……で鞭をくれ様とした犬を使喚け様とした——が乗馬鞭の代りに一束の科の皮を持つて居た。狐は後へ向いて舌を出し乍ら彼の正面を走つて行く。そこで一足飛に駆け出させた處が、一角獸が蹶いて、自分は投出された……そして或る警部の手に眞直に落ちた。すると警部は彼を總督の前へ連れて行つた、處が其總督がヤツプであつた……

ふと眼が覺めると、室のなかは眞暗で、丁度二番鶏が啼いて居る……何處か遠い遠い所で馬が嘶いた。頭を上げると……今一度幽な幽な嘶が聞えて來た。

「あれ、あれ、マレック・アデルが嘶いてるんだ！」と腹の中で思ふ……「きつと彼奴の嘶聲だ。だがどうしてあんな遠い處で嘶くんだらう。はてな！……そんな事はない筈だが……」

チエルトツブ・ハノーグは不意に全身に悪寒を覺えた直様臥床から跳ね起き、靴や着物を盲探しに探して、身支度をし枕の下から厩の鍵を引つ撥んで、中庭へとび出した。

（七）

厩は中庭のすつと端にあつて、一方の壁は野原の方に面して居る。チエルトツブ・ハノーグは早速鍵を錠前に宛ふ事が出来なかつた——手が震へて居るので——それからまたすぐには鍵を廻されなかつた……で息を休めて、凝然として立つて居た、もし内側で何か動く氣配でもしは仕ないか！「マレック・アデル！マレック・アデル！」と低い聲で呼んで見た、まるで死の様な静けさだ！チエルトツブ・ハノーグが思はずぐつ

と錠を押すと戸はぎりと鳴つて、すーつと開いた……ちや、もどから錠を掛けてなかつたのだ。敷居を越へても一度呼んで見た今度は名前を残らずマレック・アデルと呼んだ。然かし忠實なマレック・アデルからは何んの答へもない、たい鼠が一疋籠の中で騒いだ。するとチエルトツプ・ハノーグは厩の中のマレック・アデルを入れてあつた三つの仕切の一つのなかへとび込んだ。其處ら一面漆の様に眞暗だつたが仕切の中へすつと入つた……空虚だ！彼の頭はぐらくし出した。まるで頭の中で鐘ががんぐ鳴つてる様だ。何か言はうとしたが、たいしゆつといふ様な聲が出たばかり、そこで上から下四方八方息もつかずに膝元を震はし乍ら手探りにして順々に次の仕切へ入つて見て……乾草を天井まで積み上げてある三番目のへも入つて見た。こちらの壁へ躓き、あちらの壁へ躓いてはつたり倒れて逆回転つたが起き上つて急に開きかけた戸口から中庭へひかう見すにとび出した。

「盗まれた！ベルフェイスユカ！ベルフェイスユカ！盗まれた！」と有る限りの聲を張り上げて呼んだ。

馬丁のベルフェイスユカは寝て居た高士間から裸衣を着たばかりで大急でとび出した……

酔人の様に主人とそのたつた一人の馬丁とは庭の途中で御互に打つつかつて狂人の様にぐるぐる廻つた。主人も事の譯を話す事も出来ず僕も何の用があるのか分らなかつた。「嗟呼！嗟呼！」とチエルトツプ・ハノーグが悲しい聲を出す。「嗟呼！嗟呼！」と馬丁が附随いて言ふ。「提燈だ！おい！提燈を灯せ！灯だ！灯だ！」といふ聲が終にチエルトツプ・ハノーグの力のない唇から洩れたので、ベルフェイスユカは家の中へとび込んだ。

然し火を見附けて提燈を灯すのは大抵の事ではなかつた。擦附木はまだ其時分露西亞には滅多にないものだつたし、勝手へ行つて見ても餘燼の残はもう夙に消えてしまつた。燧石も燧も容易に見附からないし見附つてもなかくうまく行かなかつた。齒をざりざりと噛み乍らチエルトツプ・ハノーグは周章で込んだベルフェイスユカの手から燧を引奪つて自分で火を鑽りだした。すると火花が夥しく飛び散つたが、それよりも猶夥しく悪態やら唸やらがとび散た。それでも火口には火がつかもしないし付ても消えて仕まう、ふーつと膨た四の頬と唇で一生懸命燃え付く様に吹いたけれど何の効もない！到頭五分程して、やつとの事で燧燭の片端が挫けた提燈の底で燃え出した。そこでチエルトツプ・ハノーグはベルフェイスユカを連れ

て厩の中へ駆け込んで提燈を頭の上へさし上げて見廻すと………
全く空虚だ！

中庭へ躍り出して彼方此方残る隅なくとび廻はつた——何處にも馬なぞ居やしない！パンテレーエレミツチの中庭を取り圍んで居る網代垣は、すつと以前から癩類で、處々傾いで地面に倒れてゐる處もある………厩の側はかなりな廣さの間まゝで頭覆つて平坦になつて居る。ベルフイシユカは此處をチエルトツブハノーグに指して見せた。

「旦那！御覽なさい此處を、晝間見た時にやこんな風ぢやありません。御覽なされ杭が地面から抜けてます。これでも何奴か此處から牽き出した事が分りま

さあ」
チエルトツブハノーグは提燈を携げてかけ寄つて地上のそこゝを照らして見た………

「蹄の跡、蹄の跡、蹄の跡新しい跡！」と早口に囁いた。「此處から牽き出したんだな此處から！」

斯う言つて直様垣を躍り越へて、「マレツク！アデル！マレツク！アデル！」と

大聲に呼び乍ら真直に野中の方へ走つて行く。

ベルフイシユカは昏迷して垣の處に立つて居た。提燈から出る光の輪はしばらくすると見えなくなつて星もなく月もない深い暗黒の中に吸ひ込れてしまつた。

幽に幽にチエルトツブハノーグの絶望の叫聲が傳はつて来る………

(八)

彼が家に返つて来た時にはもう明るくなつて居た。彼の姿はまるで人間らしくは見えなかつた。着物は泥に塗れて顔は残忍と猛悪な相を現はし、眼は曇よりして陰鬱に見えた。噎れた聲でベルフイシユカを逐ひやつて獨で室に閉ぢ籠つた。彼は疲れ切つて立つても居られなかつたがさりとて床へ入りもせず戸口の傍の椅子に腰をかけて頭を押へて居た。

「盗まれた！……盗まれた！……盗まれた！……」

「だが如何いふ具合にして盗賊は夜の間に此錠前を下した馬小屋からマレツク！アデルを盗む事を企んだらう！晝間でさへ見しらしぬ人は寄せ附なかつたあのマレツク！アデル、あれを盗む然もちつとも聲も音もたてない様に？それから庭の犬が

一匹も吠えなかつたのはどうしたわけだらう？もつとも今は只二匹——二匹の稚い仔狗——だけしきや残つてない、その二匹も寒くもあり腹も減るので多分塵埃の中にすつこんでゐたのだらう——然しそれにしても！

「マレック！アデルが居なくなつてこれから如何したもんだらう？」とチエルトツプ！ハノーグは凝然と考へ込む。「もう最後の愉快もなくなつた、もう死ぬべき時が来た。金が丁度来たんだから今一匹馬を買はうか？いや、あんな馬が何處へ行つたつて見つかるもんか？」

「バンテレー・エレミツチ様！バンテレー・エレミツチ様！」と戸の處で怖々と呼ぶのが聞えたのでチエルトツプ！ハノーグは跳ね起きた。

「誰れだ？」と自分のとは思はれない様な聲で叫んだ。

「私で御座います、貴方の馬丁のヘルフェイスユカで」

「何用だ？あれが見附つたか？あれが歸つて来たのか？」

「否、旦那様先頃あれを賣つたあの猶太人の奴めが……」

「それがどうした？」

「参りました」

「ほーほーほーほー」と唸つてチエルトツプ！ハノーグは直様戸を突き開けた。

「此處へ引張つて来い！引摺つて来い！」

髪を蓬々と振り亂して恐ろしい風體をした「恩人」が不意に現はれたのを見て

猶太人はヘルフェイスユカの背後に立つて居たが密と逃げ出さうとした。然しチエルトツプ！ハノーグは躍りかゝつて喉元を捉へた。

「嗚呼！金を取りに来やがつたな！金を取りに！」と猶太人の頸を締めて居ながら自分が締められる様な唸けた聲を出す、「夜中に盗んで置きあがつて日中金を

取りに来るつちふんか、うむ？え？おい？」

「何卒、あなたしやま」と猶太人は呻き出さうとする。

「さあ言へ、己の馬あ何處にある？何うした、あの馬？何誰に賣つた？吐かせ、さあ吐かせ！」

猶太人は是に至つて呻く事すら出来なくなつて顔色忽ち鉛の如く恐怖の色さへ

消えてしまつた。兩手はだらりと垂れ、全身は烈しくチエルトツプ！ハノーグに震

られるので革の様に前後に動揺く。

「金は拂つてやる、一文残らず拂つてやる」とチエルトツプ！ハノーグは吼える様

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に、「だが若し直に言はなきや難の様に締めてくれるぞ!……」
 「だがもう締めて仕舞つたちやありませんか旦那様」とベルフィシユカが謹ん
 言ふ。

是に始めてチエルトツブハノーヅは我に返つた。

猶太人の頭を放すと地面にばたりと倒れる。そいつを引き起して椅子に据へて、
 チエルトツブハノーヅはゾオッドカ酒を一杯注ぎ込で、やつと正氣に戻らした。
 正氣にした處で彼と話を始めた。

話して見ると猶太人はマレックIIアデルの盗まれた事を少も知つてないといふ
 事が分つた。そして實際、「尊敬してゐるパンテレーエレミツチ様」のために自分
 で周旋した馬を盗み出す氣になる筈はないのだ。

でチエルトツブハノーヅは厩へ彼を連れて行つた。

兩人して厩の仕切や秣桶や戸の錠を吟味したり乾草や藁をひつくり返して見た
 りして中庭の方へ行つた。チエルトツブハノーヅは垣の蹄跡を見せて突然に自
 分の腰をはたと叩いて、

「待て!」と大きな聲で言つた。「何處から貴様あの馬を買つたんだ?」

「マロアルシャンゼル縣のフェルホセンスキーの馬市で御座います」と猶太人が
 答へる。

「誰から?」

「哥薩克から」

「よし! 哥薩克だな、若い奴か老人か?」

「中年で——確した人で御座りました」

「それで何んな奴だつた? 何んな風だつた? 狡猾さうな奴だつたらうな?」

「全く悪黨らしい御座りました貴方いや、」

「それで其奴あ何と言つた、うむその悪黨は? ——其奴あの馬あ長い間持つて居た
 のかな?」

「なんでも長い間持つとつたつて言つた様に思ひまする」

「よし、それぢや、きつと彼奴に相違ない! 左様ぢやないかなあ、おいこら!……貴
 様の名あ何ぢふ?」

猶太人は驚起して、小さな黒い眼をチエルトツブハノーヅの方へ向けた。

「私の名前で御座りますか?」

「うむ、さうだ、なんて言ふんだ？」

「モーシエル・レイバで御座ります」

「よしぢや、聞て呉れ、モーシエル・レイバ、おい友達——貴様は道理の解る奴だが——マレック・アデルは舊の主人の外には氣をゆるして手をつけさせるんぢやないと思ふがなあ？ 汝も見ると通り鞍を置いたり轡を噛ませたりして鞍下布を脱がせてな——そらそこに乾草の上においてあるわ！ 舊の主人でなければマレック・アデルが踏み殺してしまつたわけだ！ 村中の眼を醒ます様な大聲を出したわけだ。なあ、そうは思はんか？」

「御尤で、御尤で御座ります、貴方しやま……」

「うむ、ぢや、まづ第一にその哥薩克を探さなきやならないといふことになるんだなあ！」

「だが、貴方しやま、まづどうしたら見附るで御座りませう？ 私だつてほんに一寸くらゐつたばかりで今頃何處に居るか、名はなんているのか知りましねえしな、嗟呼、呼」と猶太人は耳を蔽ふばかりのちいれ髪を愁しさうに振りながら言つた。

「レイバ！」とチエルトツプ・ハノーグは不意に大きな聲で、「レイバおい！ この

通り己は正氣でない、氣が狂つてる！……貴様が手傳つてくれなきや己あもう終ひだ！」

「けれどもどうして私やなんぞ」……

「まあ、己と一所に行つて盗賊を探して呉れ」

「だが何方へ行つたもんで御座りませう？」

「馬市に行つたり、往還側道の容謝なく、馬盗賊の處へも、町へも、村へも、小村へも——何處へでも、何處へでも行くんだ！ それから金の事は心配はいらん、己は此頃金持になつたんだからな、同胞！ 一文無しになつたつて、大切の馬を取り返さにおかかん！ 彼奴哥薩克の敵め、逃げやうたつて逃がすものか！ 何處へだつて追隨して行くわ！ 地獄中へ隠れりや地獄中へも追隨して行く！ 地獄へ行きあ魔王の處までだつて追隨して行くわ！」

「え、なんだつて魔王の處へなんぞ？」と猶太人はいふ、「そんな事をしないたつて大丈夫で御座ります」

「レイバ！」とチエルトツプ・ハノーグは言ひつゞける、「レイバ、貴様は猶太人だ、汝の信仰は悪いけれども、貴様の精神は多くの基督教徒よりは、すつと立派だ！ 己を

惘然だと思つてくれ！己は單獨ぢや不可ん單獨ぢや到底遣り切れん。己はすぐにいかつとなるなる方だが貴様は頭腦が確然してゐる——素敵にいゝ頭腦だ！貴様の種族のものはみんなさうなんだが貴様は教はらなくたつてなんでも遣つてのける！だが大かた貴様は己の金の出場所を疑つてゐるんだらう。まあ己の室まで来い——金銭をみんな見せてやる。で貴様は其金を取てもいゝ己の頸から十字架を外してもいゝ。たゞマレックIIアデルを取返してくれ、一度あれを戻して呉れ！」

チエルトツブIIハノーヅはまるで熱病やみの様に身體を震はせて居る。汗が滴々と顔を流れ落ちて涙に混つて髯の中に消える。レイバの両手を握つてひたすら頼入つた、そして殆んど接吻しやうとした……精神錯亂の氣味なんだ。猶太人はそれを拒んで自分には到底外へ行く事が出来ない、自分の仕事があるからといふ事などを言はうとしたが……駄目だ！何を言つたつて聞こえないのだ。どうにかうにも仕方がないので、猶太人も遂々承知した。

其翌日チエルトツブIIハノーヅは農馬車にレイバと相乗でベズゾノヅオを出立した。猶太人はなんだか困つたやうな顔付をして、瘦こけた體がごとごと揺れる腰掛の上で躍るので、片手で車體の欄を柵まへ片一方では新聞紙に巻いた手形の小包を容れてある胸のあたりを押へてゐる。チエルトツブIIハノーヅは彫刻かなんぞの様に座り込んで、眼ばかり四邊に配り乍ら折々溜息をついてゐる。腰には短刀を附着けた。

「馬と己との仲を割いた悪漢も今は用心して居るだらう！」と公道へ出た時に吐いた。

家の世話はヘルフィンユカと可憐さうなので世話をしつた。姓婆との二人に任せておいて来た。

出掛けに「マレックIIアデルに乗つて歸つて来るか、さもなきや決して歸つて来ない」と二人に言ひ残した。

「其時お直にお前は私と婚禮をするのだせ！」と臂で料理番の肋骨の邊をついてヘルフィンユカが戯言を言ふ。「配じる事おねえだよ、旦那様お御歸りになる氣遣ひはねえだからね、して私あ獨りつ切りで寂しくて死んでしまふわな！」

(九)

一年経つた………全一年 バンテレー・エレミツチについては何の消息もなかつ

た。料理番はもう死んでしまつたので、ペルフィシユカも此家を捨て、町へ出様と決心した町には床屋に奉公してゐる甥があつてそれから頻りに來いと勧められてゐたので。其時俄に彼の主人の歸つて來るといふ噂が擴つた。教區の僧侶はパンテレーエレミツチから手紙を一通受取た、其中にはベスゾノゾオに歸る積りだといふ事を知らせ下男に近い間に戻るから用意して置けと前以て命て置いて貰ひ度いと書いてあつた。この言傳をペルフィシユカは家を少し掃除して置けといふ事に了解したが併しかれば、そんな話にはあまり信用を置かなかつた。處が二三日してパントレーエレミツチが一人切りで、マレック・アデルに乗つて中庭に現はれた時には始めて僧侶さんの言つた事の眞實だつた事を知つた。

ペルフィシユカは主人の處へかけ寄つて錠に手をかけ乍ら馬から降りるのを手傳はうとしたがチエルトツブ・ハノーヴは自分で下馬り驕りがに、周圍を見まはして大きな聲で言ふ、「マレック・アデルを探し出さしにや置かんと言つたが其の通り敵の邪魔運命の邪魔さへも物ともせず遂々探し出して來たわ！」するとペルフィシユカはずつと側へ寄つて主人の手に接吻した然しチエルトツブ・ハノーヴは僕の此の献身的な仕打に何の注意をも拂はなかつた。マレック・アデルの手網

を取つてうしろに隨へて大股に馬小屋の方へ行く。ペルフィシユカは凝然と主人を見送つたがなんだか氣か沈んで仕舞ふ。「やあ、どうも一年の間に大へん疲せて年を取つておしまひなすつた。そうしてどうも殿しい情ない方におなんなすた！」誰れでもパンテレーエレミツチは目的を達したので氣も浮々としてゐるだらうと思ふかもしれない、たしかに彼は浮々してはゐる………がどうもペルフィシユカの氣は沈む、加之一種の恐怖をさへ感ずるのであつた。チエルトツブ・ハノーヴは馬を元の場所に入れて軽く背中を叩いてそして言つた、「そら、また歸つて來たんだ、これからはする事によく氣を付けてな。其日彼は一人の自由民を雇つて番人にした自分は復自分の室へ引籠つて以前の様な生活を始めた………」

全く以前の様にではないが………然しそれに就ては此れからいふ………戻つた翌日、パンテレーエレミツチは自分の室へペルフィシユカを呼んで外には誰も話す人はないので——勿論彼はもと通り威厳を見せ様といふ風をして持前の低音で——マレック・アデルを探し當てた一伍一什の物語を始めた。チエルトツブ・ハノーヴは話しをする間窓の方に向て座つて長い煙管で一服吹かしてゐるとペルフィシユカは戸口に立つて兩手を後に廻して敬んで主人の頭の後部を見つめ乍

ら主人の話す事を聞いた。いろく無駄骨を折つたり面白くもない旅をついけた後にパンテレーエレミツチはたつた一人でロミヨンの馬市までやつて来た。此時猶太人のレイバは連れて居なかつた。彼は氣が弱いのので堪え切れなくなつてもう以前に逃げてしまつたのだ。それから五日目に、もう出掛け様といふ間際になつても一度小馬車のすらつと並んで居るのに沿つて歩いて居ると、離に繫いだ三疋の馬の間の一頭の馬にふと眼がついた——それがマレックIIアデルであつたのだ！彼は一目見てさうだと思ひ、馬もまた彼を見知つて居て、ひんく嘶き乍ら繫いだ細を引つ張つて蹄で地を掴きむしつた事などを話してきかせた。

「ところが其馬は哥薩克が連れて居たのぢやないのさ」とチエルトツブIIハノーグは振り向きもせず例の低音で話をついける。「ジブシイの馬商が連れて来てたんだ。己は勿論直様腕力で連れ出さうとしたんだがジブシイの畜生火場でもした様に市中に響く大聲で喚きやがつて此の馬は神かけて或るジブシイから買つたに違ひないと言ひ出した——それでどうでも私が盗んだといふなら證人を出しなさいと吐かすぢやねえか……己はいましく仕方がなかつたけれど遂々金を拂つてくれたあの畜生！おれの思つて居たのは大切な馬を見附け出したいふ事と

心の平和を恢復したといふ事だけなだからな。それから又カラチエフスキー縣で一人の人を哥薩克と見ちがへて——猶太人のレイバが其奴が己の馬を盗んだ奴だと言つたので——其奴の顔を叩きつけてやつた。處が哥薩克と思つたなあ坊様の息子だつたといふわけさ。それで賠償金を取られてな——百二十留丈なあに金なさあこしらへやうとおもや何時でも出来る己あマレックIIアデルを連れて戻つたのが一番うれしんだ。己はもう幸福だ——平和で愉快にくらせるんだ。それで汝に一言言つとくがな、そんなこともあるまいが、もし汝がああな哥薩克を此近所で一目でも見たら何にも言はずに直様こんで来て鐵砲をおれに渡たせ、さうすれや己がいゝ様にするからな！」

パンテレーエレミツチがペルフィンユカに話した事は斯うだ。彼の舌は斯うは動いたけれども心では口でいふ様に全く平和ではなかつたのだ。彼の舌は斯うは嗟呼！彼の心の底では連れて歸つた此馬が眞のマレックIIアデルであると信じ切つては居なかつたのだ。

氣懸りの時がすつと續いた。平和は最早味ひ難い事となつて仕舞つた。彼にても實際何日かは幸福な日があつたので、其時には心の裏に起る疑などはなんでもない事に思はれて煩い若蠅の様な恐らしい考は追拂つて仕舞はう仕舞はうと思つた。そして自分で自分を笑はうとした然しまた不快な日も多く煩い考が床下の鼠の様にそつと来て心の根を噛んだり裂いたりし出すので人知れぬ苦痛の中に日を過した。忘もしないあのマレック・アデルを見附け出した日には、チエルトツブ・ハノーヴはもう歡極つて恍惚として何の事も覺えなかつた……然し翌朝其處の宿屋の天井の低い小屋の中で一夜中より傍つて寝た此喜悅の凝固ともいふべき取戻したマレック・アデルに鞍を置かうとした時に始めて胸の奥に強い悲痛を覺えたのであつた……彼はたい首を振た然し種は既に蒔かれたのだ。歸りの旅の間一週間程續いたがは若しやと思ふ事などは殆んど起りもしなかつたが、ベズノヴオへ歸るや否や元の正銘のマレック・アデルが居た自分の家に歸るや否や疑はますます大きくなります。判然となつて來た。歸り路には悠然と乗込でゆらりと歩ませ乍ら彼方此方を見廻して、たゞ「チエルトツブ・ハノーヴの思ふ事は何でもさつと叶ふんだ」と時々ふつと思ふ外何も考へずに短かい煙管を吹かし乍らひとり

で何となく微笑んだ。然し家へ歸り着いて見ると萬事の具合がひどく變つてしまつた。然し彼は此等の事を胸一つに秘めて居た、只虚榮のためのみで心の疑懼を言葉に現はさせ様としなかつたのだ。彼は今度のマレック・アデルが實はもとのと違つてゐるなごどほんに一寸でも諷す者があつたらその人を片々に引き裂きかねなかつたのである。それ故彼の顔を合はす二三の人などから「目出度く馬を取返した」と祝詞を述べられるとそれは受納けはするもの、強いてそんな祝をいつて貰はうとはしなかつた、で前よりはひどく人交際を避ける様になつた——これはよくない祥である！まあ言つて見ると彼はもう絶間なしにマレック・アデルを試験して見た。少し離れた原中の或地點まで乗り出して見たり、またそつと厩に入つて戸を閉めて馬の鼻先に立つてちつと眼を見入つて囁やく様に言つて見る。「汝か？ 汝か？ よ？」……また或時には黙つて氣を注いで幾時間も馬を見つめて居る、そして氣も晴れ渡つた様に小聲でいふ、「さうだ！ あれだ！ 勿論あれだ！」また或時は途方に暮れた困つた色を顔に浮べて出てゆく事もある。チエルトツブ・ハノーヴは此マレック・アデルと前のマレック・アデルとの間に肉體上の相違があると、いふので思ひ惱んで居たのではない……もつともそりや幾分の相違がありはし

た前の馬の尾と鬣とはもつと薄かつた耳はもつと尖つて居た踵はもつと短かつた。眼はもつと澄んで居た——然しこれらは或はたいの思ひ做しかもしれないぬ、それよりなにより一番チエルトツブハノーヅを迷はしたのは言はば精神上の相違ともいふべきものであつた。前の馬の習慣はこれとは大分違つて居た。遣り方が全く同じとはいはれぬ。例へば前のマレックIIアデルはチエルトツブハノーヅが腕に入るといつでも一寸そこいらを見廻して細くひんと嘶いたものだ。然るにこれは知らない様子をして乾草をばくくやるか頭を垂れて假眠してゐる。二匹共主人が鞍からとび降りた時にはしやんと停つてゐるが前の馬は呼ばれるとすぐ聲の方へ歩いて來たのに、これは矢張ちつと立つてゐる。前の馬は勢限り速く、それでゐて高く大足に駆つたのに、これはもつと緩した足並でもつと小刻みな速歩を踏む。そして時々靴を(挫く)——といふのは後足を前足にかち合はせるのだ。前の馬はこんな事にしろ決してこんな見ともない事はしなかつた——のになあ！この馬はまた、これは深くチエルトツブハノーヅの感じた事であるが、兩耳を實に思らしい風につり上げる前の、は全くそんな事はなかつたのだが、片方の耳を後へ反らしてなんだか主人のために警戒でもする様にとそのまゝにして居るのだ！前の馬は身の廻り

が汚くなつたと見ればすぐ後足で仕切の壁をこつくやる。然しこれは糞が腹まで堆積なつても平氣なもの。前の馬は風に向つて立たせておくとき深い息を吸つてぶるく身震はした、これはたい息を荒くするばかり。前の馬は雨が降ると弱つたが、これはどうして濕氣などは何とも思はぬ……なにしろこれはあれに較べると一層卑しい——どうも卑しい！そしてどこか優雅な處が缺けて居て御し悪い——どうもこれは辭まれぬ。前の馬は可愛かつたが此馬は……

チエルトツブハノーヅは時とするところんなに思つたが此考が彼に取つてはひどく辛いものであつた。また或時は新らしく開墾した幾つかの圃地を通つて走らせる。或は窪んだ谷間の谷底に乗り入れておいて尤も峻しい丘頂にのり上げる。こうして彼の胸は大喜びで早鐘を打つ大きな叫びが唇を突いて出る。そこで彼は自分の乗つてゐるのが正真擬もないマレックIIアデルだときめてしまふ。ほかの馬でどうして此奴のやつてる様な藝が出来るものか？

けれども金不足や不運合はかくても猶時々やつて來た。長い間マレックIIアデルを探し歩いたので金子も大分消費つてしまつた。今はもうコストロマ種の犬など夢にも思はないでもと通りただ一人であたり近所などを乗り廻して居た。すると

或朝、ベズノゾオから四哩ばかり行つて、一年半前に威張つて見せたあの公爵の獵仲間にはつたり遭遇つた。そして丁度其日、兎が一疋生離からとび出して犬に追はれて坂をかけ下る様になつて居やうとはこれも運命の仕業であらう！ほーらーよ！ほーらーよ！獵人はみなどつと兎の後を追ふ、チエルトツブハノーヴもそれについて連中の人達と一所にならずに、二百歩許も側によつて、先頃やつた通りにとばして行つた。大きな水の流れが一筋丘の腹を横つて曲り紆つて走つて居る、それがだん／＼高くなるに従つて次第／＼に狭くなつてチエルトツブハノーヴの行手を遮つた。今彼が飛び越さうとする處十八ヶ月前には實際跳び越した其處の處は幅八呎深さは十四呎ある。勝利——げに心よい方法でもつて繰返さるべき勝利を——豫想してチエルトツブハノーヴは意氣昂然と笑つて鞭を鳴らした獵仲間も馬を驅させて居たが彼等の眼は此勇敢な騎手にばかり注がれて居る、馬は彈丸の様にとんで行つた、そして今水流が丁度鼻先へ現はれた——さあ、さあ、一跳躍だ、あの時の様に！……然しマレッククアデルはびたりと停止つて左へぐるりと廻つてチエルトツブハノーヴが川縁へ流れの方へ手綱を引いたにも拘らず、谷間に傍つて駆け出した。

馬はその時恐懼たのだ、自信がなかつのだ！

チエルトツブハノーヴは羞辱と憤怒とに胸が燃えて涙ぐんで手綱を落して、馬の行くに任せて小山を下に真直に獵中間を離れて遠く遠くかけさせた。彼等の嘲弄を聞き度くない。計りでなく早く彼等の厭な眼から逃れ度いのだ！

口に充滿泡を吹いて、脇腹を無慈悲に拍たれて、マレッククアデルは家にとび歸つた。そしてチエルトツブハノーヴは直様自分の室に閉ぢ籠つた。

「どうもあれぢやない、おれの可愛い奴ぢやない！彼奴なら自分の頸骨を挫いてもおれに恥をかゝせるやうな事はない！」

(十一)

到頭チエルトツブハノーヴを所謂「殺してしまつた」のは次の事情であつた。一日彼はマレッククアデルに乗つて、ベズノゾオの屬してゐる教區の會堂の傍にある牧師の邸の後園の邊を徘徊つてゐた。前屈になつて哥薩克式の毛皮の帽子を目深にぐつと引いて、兩手を鞍の前輪に弛く垂れて心の中にある漠然とした不満の感を持つてゆつくりと歩ませてゆく。と不意に誰れか彼を呼びかけた。

馬をどめて顔を擧げるとかねて往來してゐる助祭であつた。藍色の三角帽を同じく藍色の豚尾に編んだ髪の上に冠つて黄色な帆木綿の上衣を着腰から下の大部分は藍色の織物の片で捲いて居る此僧は後園に出て來るとパンテレーエレミツチの姿を見附けたので彼に尊敬の意を表しその機を以て何か質問をするのが彼の義務だと考へた。一體教會の人などいふものは諸君も御存じの通り何か腹の中でそんな事でも考へなければ俗人なんかと話しをするものではない。

然しチエルトツブハノーヴは助祭なんかに向構す一寸頭を下げたばかりで口中で何か小聲に言ひ乍ら既一鞭當てゝゐた其時……

「いや、どうも素破らしい馬だ！」といつて助祭は急いで後を附け足す。「全くこりや御自慢なすつても宜い。實に貴方の敏捷いには驚きました、どうも全く獅子の様ですわい！」

此助祭殿は自分の能辯を鼻にかけてゐた、これには牧師殿も少なからず困らせられた、といふのは、牧師は口が煩る拙でゾオドカを飲んでさへ舌がよく回らぬといふ人物なので。

助祭は猶言ひつゞける、

「悪漢の姦計にかゝつて一疋失くしてしまつても、そんな事を口惜しがつて挫げても、しまはれないで、かへつて反對に、神様の御思召を益深く御信仰になつて、いま一匹決して前のに劣らない、いやむしろ優つてゐると申してもよい位なのを御求めなすつた、ですから……」

「何を詰らん事を言つてるんだ？」とチエルトツブハノーヴは不氣嫌さうに遮つて、「他の馬たあ何の事だ！他の馬ぢやない、同じ馬だ、これがマレックIIアデルだ……自分で見つけて來たんだ。妄語吐かすな、野郎！」

「おや！おや！おや！」と助祭は指で髯を弾き乍ら熱心の眼を輝かしてチエルトツブハノーヴを見つめ乍ら面倒臭いといふ風を見せて聲を強めて應へる、「こりやどうぢや？貴方の馬は、私の記憶に誤なければ、去年の祈念祭より二週間程前に盗まれたわけでした、今はもう拾壹月も末に近いですからな」

「うむ、それがどうした？」

助祭はやつぱり髪を弾いて、

「はて、あれからもう一年もつとも経つておりますわ、それで貴方の馬はあの時分灰色の斑でした、丁度今のその馬の様にな、いや實は其馬の方がかへつて濃い様に

も思ひますぢや。それがどうしたといひますにな、灰色の馬といふものは一年も経つと大へん淡くなるものですて」

チエルトツブ「ハノーヴは驚駭とした……誰れか彼の胸に短刀を突き込みでもした様に。さうだ、灰色の馬は色が變る！こんななんでもない事にさへ今迄氣がつかなくなつたのは如何したものか？」

「うぬ、糞豚尾！退け、退け！」憤怒に燃える眼をあげて、突然大きな聲を出したと思ふと忽ち呆れて立つた助祭の眼には見えない様になつてしまつた。

「さあ、もう事は終局だ！」

今や既に萬事實際了す、萬事は打破された最後の札が投げられた。萬事はもう「淡くなる！」といふ一語の下に粉微塵になつて仕舞つた！

「跳べ、跳んで行け、畜生！汝いくらとんだつて此言葉から逃げ出す事わ出來ないんだ！」

チエルトツブ「ハノーヴは家に馳せ歸るや、再び室に閉ぢ籠つて仕まつた。

(十二)

此無益な馬はマレック「アデルではない事、それとマレック「アデルとの間にはちつとも似よりのない事、一寸でも氣をつけて居る人なら一目見た時から此位な事は知れる事だといふ事、チエルトツブ「ハノーヴは全くつまらぬ術でやられたのだといふ事——否！もとより其意でゐて、自ら欺き、自ら我眼を瞑つてゐたのだといふ事——これらがすべて今はもう疑を挟む餘地のないものとなつて來た！」

チエルトツブ「ハノーヴは室の中を往つたり來たり、壁際まで行く、と單調にくるりむき直つて檻の中の猛獸の様に歩いて居る。彼の虚榮心は痛く傷けられた。けれども彼は手傷を負うた虚榮心の痛苦に悩んだばかりでなく、絶望に心を亂され、憤怒に胸もふさがつて、復讐の渦に燃えて居た。然し誰に向つて怒るのか？誰れに復讐をすればいゝのか？猶太人にか、ヤツプにか、マシーヤにか、助祭にか、哥薩克の盜賊にか、近所の人達悉皆にか、全世界にか、但しはまた自分の身にか？彼は全然譯がわからなくなつた。最後の札が投げられたんだ！此比喻は彼の氣に入つた、そして彼は復人間の中で最も不用な、最卑しい、ほんの御笑ひ草、道化、糞、白痴、僧侶の嘲弄の的にな

つた！……想像して見ると、あの豚尾の牧師めが灰色の馬と愚な紳士の話をやつてるのが判然と見える様だ……え、くそつ！感情は昂奮つて抑へ様としても抑へられない。此……馬は、マレッククIIアデルぢやないとしても、やつぱり……好い馬で、これから幾年か役に立つかも知れないと思つて見やうとしたが無益だつた。憤激の餘左様でなくともこれ迄既に前のマレッククIIアデルに對しては濟なかつたと思つて居るので、こんな事を考へては又新らたにこれに侮辱を加へるのだと思つて、此考は其場で棄て、しまつた……さうだ、實際さうだ！此驚馬を此腐れ肉を、目の白痴でもあるまいに、あのマレッククIIアデルと同等に見て居たのだ！それからこの驚馬が彼に盡した役目についても……それに跨つて歩くのを好い事と思ふか？決して！決して！そんな事があつたとして乗るものか……こんな馬はもう靴組人の犬の餌食に賣つてやる——其位な最後で丁度いゝんだ……さうだ、それ位で上等だ！

二時間もつともチエルトツブIIハノーグは室の中を往つたり來つたりした。

「ベルフイシユカー」と突然に断乎呼んだ、「すぐに酒屋へとんでつてな、ゾオドカを一瓦取つて來い！いゝか？一瓦だぞ、おい早くせい！たつた今此處でウオドカが

入用なんだ！」

ゾオドカは間もなくパンテレーエレミツチの卓の上に現はれて彼はびくりとやり始めた。

（十三）

若しチエルトツブIIハノーグの此時の容子を見たものがあつたら、若し憤怒の形相すさまじく、一盃また一盃と飲み乾してゐるのを見てゐる者があつたら——其人は思はず慄然とせずには居られまい。夜は漸次更て、獸脂の蠟燭は卓の上に朦朧と灯つて居る。チエルトツブIIハノーグはあちらこちらと隅から隅まで歩く事はやめて、顔を一面眞赤にして座り込んだ眼の光は鈍くなつて、一度は床に視線をおとしたが、ついでいてきつと眞暗い窓を見つめた。やゝあつて起ち上るとゾオドカを注いでぐつと煽つたがまた腰を下した腰を下して凝然と一つ所を見つめてゐて身動きもしない——只呼吸がだん／＼速くなり顔がますます赤くなるばかりだ。なんでも或決心が心の中に熟して來た様に思はれる、其決心を自らは耻かしいと思つたのが馴れてはだん／＼平氣になつて、今はたつた一つの考が一途に執拗くひし／＼と

よせて来る。たつた一つの影像ばかりがますます判然と見え出した。そして大酔の燃える様な重さに壓されて、怒りの餘り苛立つた感情が心の中に潜れてゐた残忍の情と處を代へて復讐を思ふ微笑が彼の唇に上つて来た。

「さうだ時が来た！」と事もなげにまるで退屈したやうな調子で言つた。「やつつけなきやならん」

彼ははいま最後のゾオドカを一杯あほつて短銃——マーシヤを射撃つたあの短銃を——床の上から取り下して弾丸をこめて幾發かの藥莢を——何かの役に立たせるために——隠袋に収めた。そして廊の方へ廻つて行つた。

戸を開け始めると番人がそばへかけよつた。彼は大聲にぞなりつける。「己だ！ 盲目か貴様あ？ 其處退け！」番人が一寸傍へよると、「去け去つて寝ろ！」とまたぞなりつける。「此處にや貴様の番をする様なものはないんだ！ いや大變な珍物だ番甲斐のある財寶だ！」こう言つて廊に入つた。マレットクIIアデル………賈物のマレットクIIアデルか敷藁の上に横になつて居る。チエルトツプIIハノーグは「起さろ畜生！」と言ひ乍ら一蹶り蹶上げた。そこで羈縄を針からはづし鞍下衣を刺して地面に投げつけ従順な馬を手荒くぐいと仕切の中で廻して中庭にひき出し中

庭から野原へなんの事だかさつぱり分らないので駭ろいてゐる番人には目もくれず夜中に鞍も置かない馬をひいて出て行く。勿論番人は聞いて見るのが怖しかつたので、たゞ近所の森林へ通ふ道を行つて曲り角で見えなくなるまで見送つた。

（十四）

チエルトツプIIハノーグは大跨に立ち停る事もなく振り向きもせず歩いてゆく。マレットクIIアデル——終まで此名で通さう——はおとなしく後に隨いた。其夜はごちらかと言へば晴れた夜で前の方に黒い塊をなしてゐる杜の鋸齒した輪廓も見わけられる位であつた。戸外の冷たい空気に接した時チエルトツプIIハノーグは馬を殺すといふ全く彼の心を抑へつけて仕まつた強い別種の酔さへなかつた。ならしたゝか飲んだゾオドカの酔は醒まし度いと思つた。頭は重く血は喉と耳とで、ぎつぎつと鳴つてゐるけれども彼は案外しつかりした足取で行くべき目的地も分つて居た。

彼はもうマレットクIIアデルを殺さうと決心した。一日中外の事はなにも考へないで………どうどうそれと決心してしまつたのだ！

彼はこんな事をやるのに一向平氣なばかりでなく、もう信じ切つて猶豫なく義務だと思つても居る様に出て行つた。こんな不幸な事も彼に取つてはほんに何でもない事に過ぎない。斯うして偽欺者の馬を片附けてしまふと彼は何方に對してもみなそれ〴〵義務を果す事になるのだ。即自らの愚昧を罰し眞の愛馬には罪を謝し世の中の人(チエルトツプ)ハノーヴは此「世の中」といふ奴にはひどく心を勞した)には彼の決して悔るべからざる事を示す事が出来る……その上彼自らも偽欺者とともに一命を終らうとするのだ——今は何用あつて此世に生息へやう？斯る考が如何して彼の頭に宿つたか彼には殆わくもない事の様には思はれた——けれどもそれは全然出来うべからざる事でないまでもなかく説明し難い事である。身の近くには一人も人は居ず金といつては一文も持たぬ孤獨の生に深く心を破られた上に酒で血潮を燃やしたので彼は狂氣染みたる有様になつたして狂人の極めて恐な出来心でさへ當人の眼には相當の理由が見えて居るいや正義だとさへ考へられて居るのだ。で、とにかくチエルトツプハノーヴもこの正義に服従はうと力めて猶豫なく罪人に對する宣告を早速實行しやうとした罪人といふ語は誰れを指すのか判明した定義をば自らも知らないで……實を言へば彼は自分の仕様とし

てゐることを殆反省しても見なかつたのだ。「さうだ片附けなきやならん」とばかり恐かにも酷しく言ひつゝつけた、「片附けてしまはなきやならん」と。斯くして罪なき罪を被つた馬は彼の後から従順く隨いてゆく……がチエルトツプハノーヴの胸には憐憫の心は更にない。

(十五)

彼が今馬を牽き込んでゆく森から程遠からぬあたりに半は若い樫の叢に蔽はれた小さな谷が一つある。チエルトツプハノーヴはその谷に下りてゆく……マレックアデルは躓いて危ふく彼に倒れかゝらうとした。

「おれを押しつぶす氣だなうむ、こん畜生！」と喚いて自衛の心持でか隠袋から短銃をひき出した。彼は最早前の様な激しい憤怒を感じはしない、たゞ罪を犯す前には誰れでも出逢ふといふ特別な感覺の麻痺を覺えたばかりだ。が自分の聲には少なからず驚かされた——木深い谷の腐つた香のむつとする濕氣の中に黒々とさし延ばしてゐる枝々の覆に壓されて彼の聲がいかにも兇暴しくまた奇體に響いたのだ！のみならず彼の叫び聲に應じてなんだか大きな鳥が不意に頭の上の木の梢で

ばさくした……チエルトツブハノーヅは思はず慄然とした。いは彼の行動に對する見張人を覺醒した様なものだ——しかもこゝは如何なる場所であらう？ 人つ子一人行逢ふべくもない寂寥たる境である……

「畜生何處へでも勝手にうせろ！」と呟いて彼はマレックIIアデルの手綱を放し短銃の臺尻で肩のあたりをいやといふ程殴りつけた。マレックIIアデルは敏捷く向き直つて谷を駆け上つて……逃げてしまつた。が蹄の音はちき途絶えた。今しも吹き起つた風があたりの物音を一處にひつくるめて交せて仕まつた。

チエルトツブハノーヅもそろ／＼谷からよち上つてさきの杜までやつて来た。そして家路を辿つてゆく。なにか心持が穩でない頭や胸に感じて居た重苦しさは手にも足にも擴がつて歩き乍らも腹が立つ氣がふさぐ物足らぬ飢しい誰れにか侮辱でもされた心持だ獲物を搔つ浚はれ食物を踏ん棄られた心持だ……

自殺しかけてやり遂げなかつた人は斯様な感じを知つてにちがひない。不意に誰れか背後から背頸の處をついたものがある。見廻すと……マレックIIアデルが道路の真中に突つ立つて居る。後から自分の主人に隨いてやつて来て自分の居る事を知らせるために鼻で主人をついたのだ。

「おゝー！」とチエルトツブハノーヅは大きな聲で、「勝手に勝手に死にゝ来たんだな！ ぢや、まてー！」

眼を瞬く間に短銃を攫み出した引金を引いて銃口をマレックIIアデルの顔に當て、發砲つた……

可憐さうに馬は横にとび退いて後足で立ち上つて二十歩許かけ出したが不意にばつたり倒れてしまつた。そして地上で身を悶きながらはつはつと喘ぐ……

チエルトツブハノーヅは両手で耳を塞いでかけ出した。膝はふる／＼ふるへである。酔も復讐の念も他を願ない自信も——すべて忽然と影を隠した。あとにはたゞ羞耻と嫌惡の感じと——それから今度こそ相違なく一命を終るべき時が来た事の自覺だけが残つた。

(十六)

六週間程経つて馬丁のベルフイシユカは折柄ベズゾノヅオを通りかゝつた警部を呼び止めなければならなかつた。

「何の用か？」と警官が訊ねる。

「何卒貴方様私の處まで御來下さい」と馬丁は丁寧に叩頭をしていふ。「パンテレ
ーエレミツチ様がどうも死にさうで御座ります。それで面倒が起らにやいゝがど
思ましてな」

「なに？死ぬ？」

「さうで御座ります。最初は毎日ゾオドカをおやりなされましたが今ちや床につ
いたざりでまるきり瘦せておしまひなされました。もうなんにもわけが分らん様
に見えますだ、まるで口がきけませんかでな」

警部は馬車から出て、

「坊さん所へ言つてやつたらうな？懺悔は済んだか？聖式はしてもらつたか？」

「いえ、まだで御座ります」

警部は顔をしかめて、「如何した事だえ、一體如何いふ事だえ？おい？汝も其
位は心得てるだらう……大變な事だ、汝がその責任を負なければならんぞえ？」

「そりやも私も一昨日と昨日と二度も聞いて見ましたんで」と怖々もので馬丁
は返答する。「パンテレーエレミツチ様坊様ん所へ一走り行つて参りませうか？つて申
しますと、黙れ白痴、それより自分の用でもせいと仰しやるでがす。だが今日話をし

かけて見ますると旦那様お私を見なすつて口をひこくなすつたばかりで御座
ります」

「それで今迄は多量にゾオドカを飲んで居たのか？」と警部が訊ねる。

「まあ飲む方で御座りました、だが何卒貴方様旦那様の室まで御來を願ひます」

「よし案内せい」と不平らしく言つて警部はベルフイシユカの後に隨つて行く。

實に驚くべき光景が彼れを待つて居た。濕つばい薄暗い裏座敷の鞍下布に包ん
だ見すばらしい寢臺の上に粗い毛織の外套を枕の代りに當て、チエルトツプーハ
ノイズが寝て居る。顔の色も今はもう蒼白くはない草色で死人のやうだ、眼は鉛の
様な眼瞼の下に落窪んで、尖つた撮み上げた様な鼻は——まだ紅くて——頬髭の上
にくつついてゐる。胸に藥莢入れの隠袋をつけた、いつもながらのコーカシア(露西
亞の一地方)風の上衣を着て、紺のサーカシア(露西亞の一地方)風の股引を穿いて居る。
頂邊の眞赤な哥薩克帽が眉際まで額を隠してゐる。片手には獵用の鞭をもつて、片
手には刺繍した煙草袋——マーシヤの別れに贈られたのをもつて居る。床に近い
卓の上には空虚になつた酒の瓶が二つ置いてあり、床の先の方には二枚の水彩畫が
釘で壁にとめてある、一枚は打見たところ六弦琴を手にした肥つた男——多分ネド

ビエスキンの肖像らしい、もう一枚は全速力で駆けさせてゐる馬上の人を寫してある……馬は子供なんか、壁や塀に戯書する度拍子もない動物に似てゐるけれども念入りに彩色した馬の灰色毛の斑點騎者の胸の薬莖入れの隠袋長靴の尖つた指先豊富な口髭などを見れば疑を容れる餘地がない——此繪はパンテレーエレミツチがマレックIIアデルに乗つてゐる處を描いた積りなんだ。

面喰つた警部は何をしたらよいのか分らない。室内には死の様な静けさが行き渡つてゐる。「何んだ、こりや、もう死んでる！」と腹では思つたが聲を張り上げて。

「パンテレーエレミツチ！おい、パンテレーエレミツチ！」

すると大變な事が持ち上つた。チエルトツブIIハノーヴの眼瞼がそろつと開いて眼球がすぐ朦朧となりはしたが、最初右から左へ次に左から右へ動いて警部の處でびつたりとまつて——ちつと見る……何か、雨の眼の鈍い白睛の處で尖つた平生の閃光らしいものもとに戻つたのだ。紫色になつた雨の唇が漸々に離れて、頃れた墓場からでも迷つて來た様な聲が聞えた。

「遠い祖先からの貴族の家に生れたパンテレーエレミツチの臨終だ。邪魔するならして見ろ！己あ借金もなけりや貸もない……去れ者ども！行け！」

鞭を持つた手がそれを揚げ様とした……が駄目だつた！雨の唇がまたしつかりと硬ばりついて、雨の眼が閉ぢられた、そしてチエルトツブIIハノーヴは以前の通り空袋の様に扁平い、わびしい床の上に横になつた、そして兩足もしつかり閉ぢられた。

「死んだらさう言つて來い」と出掛けに警部は小聲でベルフイシユカに言つた。

「それからもう坊様を呼びにやつたら良からう。相當な儀式をしてな臨終の式をうけさせなきやならんぞ」

ベルフイシユカは其日坊様を頼みに行つた、そして翌朝は警部の處へ届けて行つた。パンテレーエレミツチは其夜の中に死んだのである。

近所のものが打寄つて彼の遺骸を埋めた時に二人の人が柩の後に随つて行つた、ベルフイシユカとモーシエルレイバとである。チエルトツブIIハノーヴの死んだといふ噂がどうにかして彼の耳に入つたと見えて猶太人は恩人に對する最後の敬意を表したのである。

「二十三」

生きな舍利

「お、永き苦痛の我祖國

露西亞の民が住まへる地」

エフ、チユー、チユー。

佛蘭西の謎に「乾いた漁師と濡れた獵人とはみぢめなものだ」といふのがある。自分には漁に趣味を持つて居ないので晴れた美しい天氣の時分には漁師の心持がどうであるか、また天氣のわるい日に漁の澤山あつたといふ樂が、どれほど濡れて心持の悪くなるのを願ひうるものであるか、それは知る由もない。然し乍ら獵人には雨といふ奴は實に災難である。丁度此災難にエルモライと私とがビエレグスキー地方へ松鶴打ちに出かけた時一度出會つた。雨は早朝からちつとも止まない。雨除けの方法は仕盡してしまつた。雨合羽をすつぱり頭から被つて雨滴を避けて木蔭に佇んだ。……雨合羽が射撃の邪魔になる事は言ふまでもないが、水の滲み通る

のは頗るなさない様だ。それに木の下へは始めは實際雨も達かなかつたが、しばらくすると葉の上になまつた雨水が急に落ちて来るので、それが枝々から瀧の様に我々に降りかゝる。冷たい水が襟飾の下を潜つて背椎を傳つて流れる……エルモライの言つた通り「全く氣持がわるかつた」「いや、ビートルベトロヴィチ様」と彼は遂に叫び出した。「こんなちやや切れねえだ……今日は獵は出来ましねえ。犬の嗅ぐ臭も流れちまつたし、鐵砲へは火がつかす……え、何ちう事つた！」

「どうしたらよからうな！」

「さあ、アレクシエフカへ參りますよ。貴方御存じねえかもしんねえが——あそこに貴方の母様の御領地で同じ名の村があります。此處から七哩で。今夜あそこへ泊つて、そして明日……」

「此處へ歸つて來るといふのか？」

「いえ、こゝへちやありませんねえ……アレクシエフカの先にいゝ場所を知つております……松鶴にや此處よりいくらい、だか知れましねえ」

私は此忠實な伴侶にそれならなせ前にそちらへ連れて行かなかつたのかと突き

込んで問ふ事はしなかつた。そしてその日二人は母の持村の方へ辿つて行つた。正直に言ふとさういふ村のあつた事は今まで夢にも知らなかつたのだ。で此村落に折よく小さな番小屋があつて古くはあつたが今迄人が住んで居なかつたので清潔ではあつた。私はまづ一夜を安穩に其中で過した。

翌朝は大變早く起きた。太陽はいま出たばかりで空には一片の雲もなく四邊はすべて一倍目覺しく輝いて居た。——昨日の夕立の名残に鮮かな朝の光線が照り傍うて居たからである。馬車の仕度をして貰つて居る間私は小さな果樹園の方へぶらぶらと出掛けて行つた。園は手入れがしてなく全く荒れ果て、居るがそのなかに小亭があつて、それが香のよい瑞々しい叢で圍まれて居たのであつた。

嗚呼戶外はごんなに爽快であつたらう。晴れた空には雲雀がチ、ロと鳴いて、その鈴の様な囀聲は銀の珠數玉の様に降つて来る。翼の上にはきつと露の玉を載せて揚つたにちがひない。その聲は露に漬された様に思はれる。私は帽子を脱いで心地よい深呼吸をした……深い谷の傾斜の上に生離に近く蜜蜂の巣が一つ見えて居る。狭い徑がそこに通じて延びた秣草や葎草の密生した垣の間をうねつて居る。その草の上にはどこから來たのか暗緑な麻の尖つた莖が幾本かによきよきと

競ひ立つて居る。

私は其徑に沿うて曲つて蜂の巢の處へ行つた。その側に細枝を組合せて造つた小屋が立つて居る。冬期にはその中に蜂の巢を入れておくのだ。開きかゝつて居る戸口を覗き込むと内は眞暗で寂として燥いで居て薄荷と香料の匂ひがする。隅の方に幾つかの四脚臺が取りつけてあつてその上に蒲團にくるまつてなにか小さなものがゐる……私はそこをばなれやうとした……

「旦那様旦那様！ビートルベトログイツチ様！」

幽な調子の遅い噺れた澤邊の葎の叫きかとも思はれる様な聲が聞えた。ふと立ち留る。

「ビートルベトログイツチ様！どうぞ御入り下さいまし」と前の聲がまた言つた。聲は先刻氣附いた隅みの四脚臺のあたりから來るのである。私は近寄つてあまりの事にしぼしは言も出なかつた。私の前には生きた人間が横になつて居るのだ。併しそれはまあ何といふ不思議な生物であつたらう？

頭は全く凋衰してしまつて、一様な銅色となり、——さながら時代が付いて黄色になつた古い聖畫と言ふ趣鋭い鼻は刃のどがつた小刀かとも見え唇などは見分もつかぬ

程——只齒と双の目だけは酷く光つて居る。そして手拭の下から黄色い毛の疎鬆い幾束かゝ額に縋かゝつて居る。蒲團の皺になつて掛つて居る腮の處に同じ銅色の小さな掌が動いて居て小枝の様な指がゆつくりのびちりみをして居る。私は猶注意して見た顔は決して醜いといふ方ではなく確に美しい然し何だか不思議でまた恐ろしい。そしてその顔が特に私に恐ろしく思はれたといふものはその上に——その金扇の様な頬の上にもがいて……もがいて、しかもそれを現はす事の出来な——微笑がほの見える居たからである。

「私が御わかりになりませんか旦那様？」と前の聲がまた呶く様にいつた。殆んど動かない唇から出て来た聲だ。「え、御尤で御座いますとも、どうして御わかりになりませう。私はルケルヤで御座います。……覚えておいでになりますかしら貴方の御母様のスバスコエの御邸で舞踏の音頭取をいたしましたもので、……御存じで居らつしやいますか私いつも亦合唱の音頭取をいたしましたが」

「ルケルヤ！ 汝だつたか！ さうかなあ」と私は叫んだ。

「はい左様で御座いますよ旦那様！ 私がルケルヤで」

私はなんといつてよいか分らなかつた。ちつと自分を見つめて居る澄んだ死人

の様な眼をしたその黒い不動とした顔を失神として眺め入つた。こんな事がまあ事實ある事であらうか？

此木乃伊の様なルケルヤが——あの家内中一番の美人——あの丈の高い肉附のよい色白で匂つた歌つたり笑つたり踊つたりしたあの女！ ルケルヤ、あの伶俐なルケルヤ、青年はみなその愛を求め當時十六歳の少年であつた私でさへその人のためにはひそかに胸を焦がした——ルケルヤであらうとは！

「お、ルケルヤ、汝はまあどうしたのか！」とやうやく私は言つた。

「え、大變な不幸に遭遇ひましてね然し御厭でも私の身の上話を御聞き下さいまし其小さな桶へお掛け下さいまし——もつと近くへでなければ私の申す事が聞こえませんが御座います……此頃は餘り聲が出ませんのですよ……でもまあ御目にかゝつて嬉しう御座いますわ！ どうしてこのアレクシエフカなどへいらつしたんで御座います？」

ルケルヤは極めて静かに弱々しい聲ではあるが切れ目なく話しをした。

「狐師のエルモライが連れて来たのさだがそれよりも話してくれ……」

「私の難義いたしました事を御話しするので御座いますか？ 御話しいたしましたせう

とも。それは今からすつと以前——六年か七年前の事で御座いました。其時は丁度私がヴァツシリー、ボリヤコフと結婚の約束をいたした計りの時で御座います——貴方ヴァツシリーを覚えて入つしやいますかしたら、ほんとに立派な男で御座いましたね、髪の手を美しく捲た？——奥様の御給侍を勤めて居りましたのですが。其頃貴方は田舎にいらつしやいませんでしたね、モスカウへ學問しにいらつして居て。ヴァツシリーと私とは實際愛し合つて居りまして、一時もヴァツシリーのことには忘れない位で御座いました、それでこの起りましたのは春の事で御座いました。え、或夜……日の出に間もない頃でした。……ちつとも眠られなかつたので御座いますよ、すると苑のはうで夜鳴鳥が大變好い音で鳴いて居ますの……私、われしらす起きて上り段の上まで聞きに出てしまひましたのです。ほろ／＼ほろ／＼と聲がきこえますの……すると不意に誰れか私を呼んだ様な気が致しました。それがヴァツシリーの聲の様でやさしく、「ルーシヤ」といふので御座います……私は四邊を見廻しました、そして多分まだ眼が醒めなかつたせいなので御座います、たらう踏みはづして一番上の段から地面の上へ轉げ落ちたので御座います！ですけれど私大した負傷はないと思つて居りましたの、すぐ起き上つて室へ歸つて参りま

した位でしたからね。たゞ何にかうちらの方に——身體のうちに——傷んだ所がある様に思ひましたばかりでした……ちよつと息をつかせていたゞきます……半分ばかり……ね、貴方」

ルケルヤは言葉を切つた。私は彼女を見やつておどろいた。殊に驚いたのは彼女が此話をするに何だか面白さうに嘆息もつかず、呻吟もせず、不平もこぼさず、同情を求めるといふ風もなく話した事であつた。

ルケルヤはまた話を續ける。

「その事があつてから憔悴れ出しまして、だん／＼瘦せてしまひましてね、皮膚は黒ずんでしまひますし、歩くのが怠儀になりますし、それから——どう／＼兩足ともさかない様になりましてね、立つ事も座る事も出来ませんので、始終横になつてばかり居なければならぬ事になりました。そして食事も進みませんので、だん／＼悪くなると計りで御座いました。奥様は御親切にも醫者に御見せ下さいまして、病院へ遣つて下さいました。ですけれど、病院でも愈す事は出来なかつたので御座います。そればかりでは御座いませぬ、一人としてどんな病氣なのか分つた御醫者はなかつたので御座いますよ。」

そりやもういろんな事をし盡してくれましてね——焼燂で背椎をやいたり氷で冷したりいたしましたが何の願も御座いませんで、どうどうすつかり身體が麻痺れましてしまひましてね……ですから御醫者様方ももうとても療治をしても無駄だと思ひますし御邸に跋をお置きなつても仕方が御座いませんで……え、ですから此處へ送られて参りました——こゝには縁者が御座いますのでね。さういふわけで御覽の通りこゝに斯うして居りますのです」

ルケルヤは復讞つたぞして再微笑つて見た。

「然しこれはあまりひどいぢやないか——こんな處で」と思はず聲が大きかつた……そしてあとをなんと續けてよいのか分らないので『それでヴァツシリ、ポリヤコフは何うしたのか?』と尋ねて見たがこれは全く愚な問であつた。

「ポリヤコフが何うしたと仰るので御座いますか? 哀惜がりました——少しは哀惜がりましたけれど、他の女と結婚してしまひましたグリッノエから参つた娘だね。グリッノエは御存じで御座いませう? 此處から遠くは御座いませぬ娘の名はアグラフエナと申します。彼の人はほんとに私を愛して居たんで御座います——

けれどもねえ貴方彼の人も若いんで御座いますもの、獨身では居られませぬわね。と言つて私はどうしたつて配偶になる事は出来ないぢや御座いませぬか? で彼の人の探した御嫁さんといふのは氣質もよく可愛らしい方で御座いますよ——そしてもう子供が御座いますの。彼の人は此處に住んで居りまして、此邊の人の處で書記を勤めて居るので御座いますが、貴方の御母様は證明書を添えて暇を御遣りになつたものですか、なかくよくやつて居る様で御座いますよ、難有い事に」

「ぢや御前は始終こゝに寝て居るのかネ?」と又私は尋ねた。

「はいもう七日程になります。夏は此小屋に居りますが寒くなりますと湯殿の方へ移してくれましてるのでそこに寝て居ります」

「誰れか看病してくれるのか? 意を注いでくれる人があるのかネ?」

「え、やつぱり親切な人達は何處にも御座いますもので、此處でも皆様が私を見棄てる様な事はなさいません。それに私はそれ程皆様の御世話にならないでも濟むので御座います。食物と云つては碌なものはいたしません、水は此處に德利の中、德利へは手が届きまじすし、片腕はまださゝますからね。此村に小女が一人御座いま

して孤兒で御座いますが時々来て見てくれました親切な娘で御座います。たつた今迄こゝに居りましたが……御遣ひでは御座いませんでしたかしら眞實に可愛らしい美しい娘で御座いましたネ。その娘が花を持って来てくれますの。死には花が御座いません——前には御座いましたが——今はもうなくなつてしまひました。ですが野の花も好いもので御座いますね庭園の花よりか良い薫のする事が御座いますよ。山百合ね、まあ……なによりよい香で御座いますわ！」

「ちや、ルケルヤ汝は退屈だとも無情とも思はないのか！」
 「どうしてそんな事思つてよいもので御座いませう？ 私偽を申すのはいやで御座いますから申しますが、最初はほんとに倦厭になつてしまひました。ですから近頃はもう馴つこになつてしまひまして、つと耐え性がよくなりました——もう何とも思ひません。他所様にはもつとわるい方も御座いますからね」

「でも世の中には雨風を凌ぐ屋根もない人がありますし盲の人も啞の人も御座いますのに私は有難い事に眼も判明しておりますし何でも聞えます——どんな事でもね。田鼠が地の中で穴を掘つて居りますと——それさへ聞きわけられます。そ

してどんな香でもね、ごく幽なのでもわかるので御座います。圃の蓍や庭の菩提樹に花が咲けば——聞かなくても分る位で私が一番先に知るので御座いますよ、とにかく風が少しでもそちらの方から吹いて参りますればね。はい、もう神様の御思召に背くものは私よりはつと悪いので御座います。こゝなんで御座いますよ、健康な方は誰でも罪に陥り易いもので御座いますのに私は全く悪い事からは縁が切れてしまひました。先日坊様のアレクセイ様が御來下すつて聖餐式を授けて下さいましたその折仰いますには、「汝は懺悔する必要はない、此態では罪を犯す事は出来ないのである？」つてね。ですが私は「心の中で犯す罪はとうしたもので御座います、せう？」と申しました處が、「うむ、なあに、それは大した罪ではない」と仰つて御笑ひなさいましたね」

ルケルヤは猶言葉をついける。
 「で御座います私心の中でも大した罪は作らないつもりで御座いますよ、なせつて私もう考事など致さない様に、わけて昔の事を憶ひ出さない様にしてありますのですからね。ですから時間も割合早く経つてしまふんで御座いますよ」
 有體に言へば私は全く驚いてしまつた。「ルケルヤ汝は始終獨りで居るのに如何

して考事の頭に浮ばない様にできるんだ？それとも汝眠つてばかり居るのかネ？」
「いゝえ、貴方！始終眠つてばかりとは参りません。大して痛めるわけでは御座い
ませんけれど、それでも痛みが、その右の體の内の方と骨とにありまして、それで思ふ
様に眠られないので御座います。はい……けれども、まあ此處に獨りで横になりま
してね、こうしておるので御座います。斯うしておりました何も考へませんで、たい生
きて呼吸をして居る事を思ひますばかりで、其事だけに氣を取られて居るので御座
います。私の見たり聞いたりいたします事はね、蜜蜂がぶんぶん、とびまはつたり巢
の中であつたりしますのや、鳩が屋根へおりてくうくう、いひますのや、鶏が雞を連
れて麵麩屑を啄きに來ます事なぞで御座います。また雀がとび込んだり、蝶が舞ひ
込んだりね——こんな事がほんどに慰みになるので御座います。昨年は燕がそこ
の隅の處の天井に巢までかけましてね、雛を幾羽か孵化しました。それはく面白
う御座いましたよ！一羽が巢にとび歸つて、すり寄つて雛に餌をやると、またとんで
去つてしまひます。それからまた見ると、他のがもう入れ代つて居ますのです。ど
うかしますと、親鳥が戸口を通つたばかりでとび込まないで去つてしまふ事が御座
います。すると小さいのが、すぐに嘴を開けてちい／＼鳴き始めますの……私しは

翌年も來てくれる様に望つて居りましたのに、人の噂には獵師が鐵砲でうつてし
まつたのださうで御座います。あんなものを獲たつて何になりませう？燕なんぞ
甲蟲と大きさがたいして違はない位なので御座いますもの……なんて貴方が
た非道い方たちでせう？獵をする人は——
「私は燕など撃ちはしない」と急いで自分は言つた。「一度」とルケルヤはまた始
めて、「それは滑稽かつたので御座いますよ、ほんとに。兎が一疋とび込みましてね、
眞實で御座いますよ！大方獵犬に追はれたので御座いませう、とにかく戸口から轉
げ込んだ様に見えましたの！……私のすぐ傍にちいこまつて、永い事座つており
ました。始終鼻をくん／＼させたり、腹をひこ／＼させましてね——まるで御役人
様のやうで！そして私の方を見るのです。きつと私は決して恐いものでないとい
ふ事が了解つたので御座いませう。到頭立ち上つて、びよ／＼戸口まで参りまし
て通路の方を見まはしました。その様子といつたら何と言つたら、良いでせう、ほん
とにおかしな兎で御座いました！」
ルケルヤは「滑稽では御座いませんか？」といふ様な服付をして私を見た。對
手の氣に入るやうに私は一寸笑顔をして見せた。ルケルヤは濁いた唇を濕して、

「それでネ冬になりますとどうしても餘計わるくなるので御座いますよ暗いもの
 ですからね蠟燭を點火けるのもいやですしそれに蠟燭をつけたつて益には立たな
 いので御座いますもの。書物も讀めるには讀めますし讀む事も好きですけれど讀
 むものが御座いません。書物なぞ一冊も御座いませんよしあつたどしましたとこ
 ろでどうしてそれを持つて居る事が出来ませう？坊様のアレクシイ様が慰みにな
 るだらうつて唇を持つて来て下さつたので御座いますけれどそれは役に立たぬと
 御考になつてまた持つていつて御しまひなりました。併し暗いには暗いんで御座
 いますけれど始終なにか聞えるものがあるので御座います。蟋蟀が鳴いたりそれ
 でなければ鼠がどこかき破り始めなごいたしましてね。こんな工合ですから何
 事も考えない方が……いゝので御座います」

「それから御祈禱もついでにいたしております」とルケルヤは一寸息をついで話
 をついでける。「たい私あまり澤山存じませぬのですけれど——御祈禱をね。それに
 神様に御迷惑をかけてはすみませぬしまた何んの御願ひ申すことが實際御座いま
 せう？私の御願することは神様の方が私よりもよつく御存じで御座います。神様
 は私に十字架を授けて下さいましたこれは神様が私を愛して下さるしるしで御座

います。ですからもう悟らなきやならないので御座います。で私は「主の御祈禱」
 や、「聖母様の讚美歌」や、「惱めるもの、請願」やらを繰り返し何にも考へないで、
 静づかに横になつて居ります。それで私は斯様して無事に居られるので御座いま
 す」

二分経つた。私は此沈黙を破らす身動きもしないで腰掛にした桶の上に座つて
 居た。自分の前に横になつて居る生きては居るが無慚な此生物の石の様な酷しい
 静寂が私の身に傳はつたのか私もなんだか麻痺れた様になつてしまつた。

「おいルケルヤ」と私は遂に口を切つた。「汝に話し度いと思ふ事があるんだがな、
 汝を病院——町のいゝ病院へ連れて行く様に準備をさせたいと思ふがどうだらう
 ？なあに解るものか多分まだ癒す事が出来やうよ、とにかく汝を獨りで置くわけに
 は行かない……」

ルケルヤの眉毛がかすかに動いた。そして迷惑さうに小聲で、「いえ——病院な
 どえやらないで下さいまし私に構つても下さいますな。そんな處えやられますと
 却て苦痛をますばかりですから！もう斯うなつては如何して癒されるものですか
 ？……ね、先達此處へ御醫者が一人参りまして私を診察し度いつていふので御

れがバツと廣がるかと思ふと何となく気がさつぱりしまして良い心持になるので御座いますね、さてそれではそれが如何したのだと申されるとさつぱり何んだか解りませんのです。只ね若し人が周圍に居りますと夢なんか決して見ませんで自分の不幸をばかり考へるので御座いますよ、どうも左様思はれますのです」

ルケルヤは痛はしい嘆息を洩らしたが。その呼吸もその手肢と同様自分の思ふまゝにはならなかつたのである。

ルケルヤはまた口を切つて、「旦那様は大へん私の事を氣の毒がつて下さる様に御見受申しますが、どうぞそんなに御心配下さいますな！眞實に御安心のために一事御話いたしますが、まあどうかしらますと今でも……御存じで御座いますか？私の若い時分はほんとに氣輕な女で御座いましたのを！まるで氣狂で御座いましたワ、……でどうで御座いませう？今でも歌をうたふんで御座いますよ」

「歌を詠ふ？……汝か？」

「え、昔の歌や、合唱の歌や、宴會のや、クリスマスなのや、いろんなのをね！私そんなのを澤山存じて居まして、今だに忘れないんで御座いますよ。只舞踏の歌だけは唱ひません、今の體には逆も向きませんから」

「どんな風に歌ふのか？——自分の慰さみにか？」

「え、たい自分の慰さみにですが、それでも聲を上げて歌ひます。大きな聲は出ません、誰にもわかる位には歌へます。私を介抱してくれまます小女が一人居ると申しました、それが孤兒で、伶俐なので御座いますよ、私はそれに歌を教へまして、ね、もう四つ程覚ええました。こんなで居て歌をうたふなご、申したら嘘と思召すかも知れませんが、一寸御待ち下さいませ、すぐやつて御目にかけますから」

ルケルヤは息を繼いだ……此半死の人間が歌をうたふ用意をして居るのだと思ふと思はず知らず戰慄とした。然し私がまだ一語も出さないうちに、もうややく聞きわけられる程な、清く澄んだ歌の調子の良い聲が悠々として私の耳に響いて来た……聲は縷々として次また次と起る。「牧場にて」といふのを歌つた。その石の様な顔の表情は少しも變らず、其眼さへ一つ所を見つめたまゝである。さり乍らその細く、哀しい、いざよふ様な聲の響がまあごんなにか人の心を動かす様に鳴り出でたであらう？煙の絲のゆらめく様な調子である。彼の女はもう一生懸命その靈魂を歌の調に注ぎ込もうと努めて居る……自分は最早懼ろしい感じはなくなつて、一種いふに言はれぬ憐憫の情に胸の震へを覺えた。

「あゝ、もう不可ません」と突然ルケルヤがいふ、「もう、とても力が御座いません。御目に掛つた嬉しさに気が顛倒してしまひました。」

彼女は眼を瞑ぢた。

私はその冷え切つた小さな指の上に手を措いた……すると彼の女は暫らく私をちつと見て居たが、その金色の睫で縁を取つた黒い眼瞼が復閉ぢた、そして古い立像の様に静かになつた。がそれも暫しで双の眼は薄暗い中で輝いた……涙に濡れて来たのである。

私は前の通り凝乎として居た。

「私なんて愚で御座いませうー」とルケルヤは思ひもかけぬ力のある聲で不意に言つて眼を大きく見開いた。そして臉をして涙を散らさうとした。「御耻しう御座いますーまあ、どうした事で御座いませう？こんな事つて永らく無い事で御座います……昨年の春、ヴァンヤポリヤコフが此處へ来て呉れました時以來、無い事で御座いますよ、あの人が一所に居りまして話をして居た間はなんとも御座いませんでしたが、行つてしまはれた時には私寂しくつてごんなに泣きましたらう！私とした事がどうしてまあ涙など翻したので御座いませう？けれども一體に女なんて申し

ますものは、なんでも無い事に涙が出るので御座いますのね」と言つたがまたつけ足して、「旦那様、あなた手巾を持つて居らつしやいませう……御いやでも御座いませうが一寸拭いて頂きます」

私は急いで望み通りにしてやつた。そしてその手巾をルケルヤに贈た。始めのうちには辭退して……「こんな結構なものを頂いたとて私に何んの役に立ちませう」と言ふ。手巾はまつたく普通のものであつたけれど、清淨で眞白であつた。それから彼女はそれを繊弱い指で掴んでまた放さうとは仕なかつた。私はもう此小屋の暗黒に馴れてしまつたので判明と彼の女の面貌を見わける事が出来た、その顔の銅色の下にほんのり見える、やさしい潮紅の色さへ認められた。また少くとも自分丈にはさう思つたのであるが昔の美しい儂がその顔のうちに認められたのである。

「旦那様、貴方眠れるかと仰いましたね？」とまたルケルヤが口を切つた。「ほんに眠るのは少許で御座いますけれど、眠さえますと、毎も夢ばかり見るんで御座いますよ——それは、立派な夢を、夢の中では私病氣ぢやないんで御座いますよ。いつも健康で、若う御座いましてね……ですが一つ悲しい事には覺めた時に樂々と延びをし度いと思ふんで御座います、私は恰で鏡で繋れてる様なんで御座いま

「あゝ、もう不可ません」と突然ルケルヤがいふ、「もう、とても力が御座いませぬ。御目に掛つた嬉しさに氣が顛倒してしまひました。」

彼女は眼を瞑ぢた。

私はその冷え切つた小さな指の上に手を措いた……すると彼女の女は暫らく私をちつと見て居たが、その金色の睫で縁を取つた黒い眼瞼が復閉ぢた。そして古い立像の様に静かになつた。がそれも暫しで、双眸の眼は薄暗い中で輝いた……涙に濡れて來たのである。

私は前の通り凝乎として居た。

「私なんて恐で御座いませう！」とルケルヤは思ひもかけぬ力のある聲で不意に言つて眼を大きく見開いた。そして臉をして涙を散らさうとした。「御耻しう御座います！まあ、どうした事で御座いませう？こんな事つて永らく無い事で御座います……昨年の春、グアシャポリヤコフが此處へ來て呉れました時以來、無い事で御座いますよ、あの人が一所に居りまして話をして居た間は、なんとも御座いませぬ。したが、行つてしまはれた時には、私寂しくつて、ごんなに泣きましたらう！私とした事が、どうしてまあ、涙など、翻したので御座いませう？けれども一體に女なんて申し

ますものは、なんでも無い事に涙が出るので御座いますのね」と言つたが、またつて足して、「旦那様、あなた手巾を持つて居らつしやいませう……御いやでも御座いませうが一寸拭いて頂きます」

私は急いで望み通りにしてやつた。そしてその手巾をルケルヤに贈た。始めのうちには辭退して……「こんな結構なものを頂いたとて私に何んの役に立ちませう」と言ふ。手巾はまつたく普通のものであつたけれど、清淨で眞白であつた。それから彼女はそれを纖弱い指で掴んでまた放さうとは仕なかつた。私はもう此小屋の暗黒に馴れてしまつたので、判明と彼女の女の面貌を見わける事が出來た。その顔の銅色の下には、ほんのり見える、やさしい潮紅の色さへ認められた。また少くとも自分丈にはさう思つたのであるが、昔の美しい俤がその顔のうちに認められたのである。

「旦那様、貴方眠れるかと仰いましたね？」とまたルケルヤが口を切つた。「ほんに眠るのは、少許で御座いますけれど、眠さえずしますと、毎も夢ばかり見るんで御座いますよ——それは、立派な夢を、夢の中では私病氣ぢやないんで御座いますよ。いつも健康で、若う御座いましたね……ですが、一つ悲しい事には、覺めた時に、樂々と延びをし度いと思ふんで御座います。私には恰で鎖で繋れてる様、なんで御座いま

すもの！。一度なんぞそれは不思議な夢を見たんで御座いますよ。御話し申しませうか？ちや聞いて下さいまし。牧場に立つてる夢なんで御座いますかね、身の廻りはすつかり丈の高いライ麥で黄金色に穂つてました……そして私は赤犬を一匹連れてますんですよ——なんでも大へん意地悪な犬で始終私に噛み付かう噛み付かうとしてるんで御座います。其時私は鎌を一挺持つてましたが、それがたいの鎌ぢやないのですの、ほんとの御月様——鎌の様な形ちをしたあの御月様のやうなので御座います。そしてその御月様でもつてライ麥を刈つてしまはなきやならぬいで御座います。ですがなんだか熱苦しいので倦怠くはありますし、それに御月様で眼がくらむ様で御座いますので、つい懶惰つとなつてしまひました。すると矢車菊が一面に生長つて居て、それがまたばかに大きいんで御座いますよ！そして其先端をみな私の方に向けてるんで御座います。そこで私はそれを摘まうと夢の中かで思ひました。グアシャが来る約束でしたから、先づ花環をこしらへやう、まだ花環を編む位な時間はあるだらうと思つたので御座います。で摘み始めました。が摘んでも摘んでも指の股から翻れてしまつて仕方がないんで御座います。ですから到頭花環をこしらへる事が出来なかつたんで御座います。さうして居

る内に誰れか私の極傍まで来る音がしまして、「ルーシャー」「ルーシャー」と呼ぶんで御座います……。「あ、どうと間に合はなかつた惜しい事をした！」と思ひました。が、まよと思つて矢車菊の代りに御月様を頭の上に乗せたので御座います。丁度冠の様にそれをかぶりますと直様身から御光がさしまして四邊一面ぱつと明るくなつたんで御座います。するとまあ、どうしやう穂並の先端を渡つて私の方へ足早に走る様にやつて来る人が御座いますの。それがグアシャではなくつて眞實の基督様なんで御座いますよ！どうして基督様だと知たのか、それは分らないんで御座います。繪ではあんな方ぢやないんで御座いますかねえ——でも只基督様であるといふ事は解りました！鬚はなくなつて丈の高い若い方で、どこもかも白づくめでたい帯ばかりは金色で御座いました。そして御手を私の方へ御差し出しなすつて仰いますには、「恐るゝな装はれたる花嫁、我に従へ。汝は天國の舞踏の合唱を指揮し、また淨樂界の歌をうたふべし」つてね。で私はしつかりと御手に御縋り申したので御座いますよ。犬はすぐ踵に接いて参りました……がその中に神様と私とは次第に空へ浮び始めましたんですよ！神様が御先に立ち……鷗の様に長い翼を空充滿にお擴げなすつて……そして私は御後に御つき申して参りました

の。犬はと見ますと、後に残つて居なきやならないので御座いました。そこで私はあゝ彼の犬が私の病氣だつたのだな、さうだ、天國には病氣の居る場所はないのだからと氣がついたので御座います」

ルケルヤは一息を休めた。

「それからまだ一つ見たんで御座います」と更にルケルヤが話しかける。「それは幻影だつたかもしれませんが、眠とはいはしません。兎に角私は現在の此小屋に寝て居た様に思つたので御座います。すると亡くなつた両親がまゐりましたので、そして私に向つて丁寧に叩頭を致しました。物はいいはないんで御座います。ですから、「一體まあ、どうして私になんぞ叩頭なさるんです、え、御母さん、御父さん？」と尋ねますと、二人が申しますには、「それは斯うなんだ。汝は此世で大層な若しみをしてくれた。その功德で自分の靈魂を救うたばかりでなく、吾等の重荷をさへお絶てしまつて、今では吾等の罪滅ぼしをして居てくれるのだ」つてね。そして此れだけの事を言つてしまつて、両親共また私に叩頭をしたと思ふと、二人の姿はふつと消えてしまつて残つてゐるものは壁ばかりといふので御座います。それから此事が

大變氣懸りになりましたして懺悔の折にも、牧師様に御話しいたしたので御座います。牧師様はそれは幻影ではあるまい、幻影は僧侶だけに見えるものだからといふ御考で御座いました」

「もう一つ御話し致しませう」とルケルヤは話をついける。「往還の柳の下に座つてゐる夢なんぞ御座いますよ。杖を持つて袍をかけて、手拭で鉢巻をいたしましてね、丁度順禮の女の様なんで御座います。そして私はどこか遠い、遠迄廻國して行かなきやならないんで御座います。すると順禮の群がひつきりなしに私の側を通つてやつて参ります。その人達はみな同じ方にとぼくと歩いて参ります。みないかにも疲れたらしい顔色をして居りますし、誰れもかもよく似寄つた顔付なんで御座います。すると、その人達に交つてうろく、一人の婦人の歩いて居るのを見付たので御座います。他の人より頭だけ位丈の高い人で、變な着物を着て居ました。私共の様でない——露西亞風でないね。顔も變で——變れた様で居てどこか嚴格してました。そして他の人達はみんなこの婦人を避けるやうにして去つてしまひますのに、その婦だけは急にふり返つて、すつと私の方へ参りました。疑乎と立つて私を凝視して居ります。その眼が黄色で、大きくて澄んで、鷹の様なんで御座います。

「何方ですか？」と尋ねますと、その婦人の申しますには、「私は汝の死神なの」つてね。しかし私ちつとも驚きはいたしません。かへつて、ほんとに嬉しう御座います。してね、自分で十字を切つた位で御座います！すると私の死神だといふ婦の申しますには、「氣の毒だがね、ルケルヤまだ汝を連れてはいかれないんだよ、さよなら！」つてね。私まあごんなに悲しう御座いましたらう！……「連れてつて下さいまし御母さん、どうぞ！」つて申しますと、その婦は私の方に振り向いて何か言ひ始めました——なんでも死期を指示して下さいのだとは分りましたが、語が判明しなかつて譯が分らないんで御座います。「聖彼得祭が済んでから」……「といふ語で眼が醒めたので御座います……はい、こんな不思議な夢を見るので御座います！」ルケルヤはちつと上の方を見つめて……深い感慨に沈んだ……

「只悲しい事には一週間位ちつとも眠られないで暮す事が御座ますの。昨年ある貴婦人が見に来て下すつて眠られなくつちやいけないと仰つて薬を一瓶下さいまして一度に十滴宛飲めつて致へて下さいました。それが大變効が御座いましたね、よく眠り／＼いたしました。ですがもうその瓶は疾くに終になつてしまいました。貴方御存じでせうか、あれは何て薬で御座いませう？ どうしたら求められるので御座

座いませう？」

其婦人はきつと阿片をやつたものに相違ない。私は左様いふ薬をいま一瓶贈らうと約束したが、今更にルケルヤの忍耐性の強いには驚嘆の聲を挙げざるを得なかつた。

「まあ、旦那様は！ どうしてそんな事を仰います？ これが忍耐性なんていはれませんが、ものか？ それ柱の上に立つて居たシメオンね、あれは確かに忍耐性が御座いました。三十年も柱の上に立つてたといふ事で御座いますものね！ 其外或聖徒は自分で丁度胸まで土の中へ生き埋めになつてると、蟻が顔を食べたんで御座いますつね……それから或學者に聞いたんで御座いますが、まづ或國があつて其國へイシユマエル人が戦争をしかけてまゐりました。それで國の人達を苦しめたり殺したり思ふが儘な振舞をいたしましたが、その國の人たちはどうする事も出来なかつたので御座います。すると某處へ多数の中から一人の清浄な處女が現はれましてね、大きな剣を垂げ、八磅もある重い甲冑を着けて敵に對つて出陣いたしました。そして敵を海の外へ逐ひ出して仕舞つたといふ事で御座います。ですが敵を逐ひ出して仕舞ひました時、處女が敵に向つて申しますには、「今は私を火刑にして下さい、國に代

つて火刑になつて死ぬといふのが私の誓であつたのだから」つてね。そこで、イシユマエル人は處女を捕へ火刑にいたしました。此時から其國の人達は自由な身になつたさうで御座います。こんなところほんとの貴い行で御座いますわねえ！それなのに私などは如何で御座いませう！」

私は何時そんな風にジャンダルクの傳説がこの女の耳に入つたのか不思議に感じた。そして暫らく黙つて居た後で、その處女の年齢は何歳かと問ねて見た。

「二十八……か九……三十歳にはなりませんまいと思ひます。でもなせ年齢なんか御聞なさるんで御座いますか？ 私はまだ他に御話する事がありますのよ……」ルケルヤは不意に濁びた咳をして呻き出した……

「汝あまり話し過ぎて、それでいけないんだらう？」と私は注意してやつた。

「左様で御座います」と辛と聴き取れる位な小さい聲で、「もう御話をやめた方がよいのです。でもそんな事なんかかまふもんで御座いますか！ 今に貴方が去つて御しまひなされば何時までも思ふ存分だまつて居られますもの。とにかく胸がすつきりいたしました……」

私は離別の語を告げた。そして薬を送る約束を繰り返してもつと何かほしくは

ないか、も一度よく考へて見て話したらよからうと言つて聞かせた。

「何もほしくは御座いません。このまゝで澤山で御座ります」とひどく怠慢さうに言つた然し感情の昂つた聲であつた。

「何卒皆様御健康にね！ ですが、旦那様御母様に一言御話しなすつて下さいまし——此邊の百姓はそれは貧乏で御座います——若し御年貢を幾何かでも減らして戴けましたらねえ！ 百姓どもは田地も少ないし何の利益も御座いません……さうして下すつたら、ごんなにか、みんな難有がりませう……ですが私は何も要りません、もう此儘で結構で御座います」

私はルケルヤの希望を叶へてやらうと誓つて既に戸口まで歩み寄つた……と彼の女はまた私を呼び戻した。

「ねえ旦那様記憶えてゐらつしやいませう私ほんとは好い髪の毛で御座いましたはねえ！」といひ出した、その眼の中、口のほとりには何やら不思議な閃が見える、

「御存じで御座いませう膝までとく様なね！ それを思ひ切つてしまつたのもすつと以前で御座います……それはよい毛で御座いましたかねえ！ ですからもう切つてして梳いたりなど出来ませう！ 此處ではとてもね！……ですからもう切つてし

まつたので御座います……はい……では、さよなら旦那様！もう御話が出来ません……

其日獵に出る前に村の警吏に會つて、ルケルヤの事を聞いた。そして村ではルケルヤの事を「生きた舍利」といつて居る事、あの態で居ても少しも村人に厄介をかける事、また村人は一度もルケルヤの愚痴や不平を聞いた事のない事などが分つた。「何をしてくれとも申しませんが、それで居て何をしてやつても喜ぶんで御座います。まあ世にも稀れな心の穩かな婦人ともいふので御座りませう」斯ういつて警吏は次の様に語を結んだ、「罪のために神様の罰をうけたんだとまあ思ふ人も御座りませんが、そんな事あどうでもいゝでせう。彼女が罪があるかないかは、まあ——まあそんな裁判はいたしません先づあのまゝにしておくが、いゝで御座ります」

數週間の後私はルケルヤの死んだといふ事を聞いた。つまり死神が……「聖彼得祭過ぎ」にやつて來たのだ。人の話によると臨終の日、ルケルヤは絶えず鐘の音が聞こえると言つて居たといふ事だ。アレクシエフカから寺院までは五哩以上もある上、日曜でもない日なのに、これは不思議な事ではある。さり乍らルケルヤは

それが寺院からの音ではない、上の方から來るのだと言つたさうだ。恐らく彼の女とても天からと言ひ得なかつたのであらう。

「二十四」

車輪の音

「一寸申上げて置くだが」とエルモライが小屋の中へ入つて来て言つた。自分は丁度食事を終つた處でかなり獵はあつたが、一日松鶴を追ひ廻して疲れたので一寸休まうと思つて旅行用の寢床の上に横になつたばかりであつた。六月十日頃の事で暑さは劇しかつた……。「申上げて置くちうのは彈丸がみんな失くなつて仕舞つたちうのがす」

私は跳ね起きた。

「みな失くなつた？ どうして？ 村落から大かた三十磅程持つて来たのぢやないか——袋一杯？」

「そりやさうで御座いますだ大きな袋で御座りましたで三週間位は充分ありました。何ういふわけだか分りましたねえが袋に穴か何かあつたに違ありません。なにせ彈丸がありましたねえだ……それでも十發位は残つて居りますべいか」

「ぢや何うしたらよからう？ 極好い場所を控へてるんだがなあ——明日は六群位はせしめてやるわけだつたに……」

「そいぢや、チエーラまでやつて下せいまし。こゝからあんまり遠くはありません。え、たんだ四十哩だあね。行つて来いと仰りあ私風の様子に驅んで行つて彈丸四十磅位は持つて歸りますべい。」

「で何時行かうて言ふんだ？」

「はてね、すぐに参りますだ。延せるものですが。だがそれにしても馬を雇まにやりますすめい。」

「何故馬を雇ふんだ？ 自分の馬ぢや悪いのか？」

「自家の馬ぢや逆も彼處迄お驅れましねえ。軸馬あ跛ひいてるんだかね……酷く。」

「何時からそんなになつたのか？」

「それあ先日御者が蹄鐵打ちに連れてきました。それで蹄鐵打つたのが鍛冶が不器用な奴だつたと見えましてね、今ぢやそろつと踏む事も出来ましねえだ。痛めたなあ前足だが擧げたつ限りで御座りますだ——犬の様子。」

「ふむ、さうか？ ちや勿論蹄鐵は脱つてやつたらうな」
「いんえ、まだ脱りましねえが、どうしたつて脱かしてやらにやなりましねえ。釘が一本肉まで打込まれたい、どうもさうらしいだ。」

自分は御者を呼んで來させた。そしてエルモライの言つた事は眞實である事を知つた。軸馬が實際蹄を地につける事が出來なかつたのだ。で、すぐ蹄鐵を脱つて濕つた粘土の上に立たせておく様に言ひつけた。

「それで旦那あ私に馬雇んでチエーラへ行く様にさせうと思はつしやるだか」とエルモライは猶執拗くいふ。

「こんな曠野で馬が雇へると思ふのか？」と吾れ知らず氣が苛ついて怒鳴りつけた。自分等の居た處は荒れ果て、神様にも見放なされた様な場所、住民はすべて貧に追はれて居る様であつた。吾々はやつとの思でかなり廣い小屋を一つ見つけた位であつたのが、それにさへ煙突がなかつた程だ。

「はい、それあまあ仰やる通りぢや御座えますが」とエルモライは例の通り平氣で「此村に一人の百姓が居りました、いがえらく利口な奴で、身上もよかつた、それが九匹馬を持つとつたが、今あ死んでしまつて、總領息子が後をやつております、この息

子といふなア、まるで馬鹿だけんどまだ親父の溜めた財産を費ひ切つてもしまひましねえ。彼奴に頼んだら馬あ出來ます、良けりや行つてつれて來ますべし、其奴の兄弟共あ抜目のねえ奴等、だちう事だけんどやつぱり兄が頭なんだからね」
「何故？」

「それあ——總領だかんね、どうしたつて弟共あ言ふ事をさかにやなんねえだ」と云つてそれからエルモライは一體に弟といふものに對して筆も及び難い氣煩を吐いた。

「私彼奴を連れて參りますすべし。彼奴あ魯鈍だ、きつとどうまく約束が出來ますだよ。」

エルモライが彼の所謂「魯鈍」を探に行つた後、私はいつそ自身チエーラへ出掛て行つた方がよくはないかといふ考を起した。第一には今迄の經驗によつて自分にあまりエルモライを信用して居なかつた。或時町へ買物にやつた所が一日中に悉皆用をすまして歸るといふ約束であつたのを、一週間も何處へか行つてしまつて、錢はみな飲み果たして行きには馬車で行つたものが歸りには徒歩で來た様な事があつた。第二には自分は自分はチエーラに一人の知人がある。それが馬商であるから、

私は馬を一匹それから買つて役に立たなくなつた軸馬に代へやうと思つたからである。

「もうそれに定めた」と獨りで考へた。「自分で行つて來やう途上また眠る事も出来るし——幸ひ大馬車は癡心地がよいから。」

「旦那連れて參りました」と十五分も過ぎてからエルモライが小屋に駆け込んで來て言つた。背後に丈の高い百姓が一人隨いて來た白い襦袢に青い半股引木皮の靴をはいて居る、その白い眉毛近視の眼椀形の紅鬚膨れた長い鼻開いた口彼はたしかに「鈍」に見える。

「もし旦那この男あ馬あ持つとりますだ——して喜んで居りますだ」とエルモライがいふ。

「左様で御座りますはい私は」……と百姓はもぢくし乍らやゝ暖れた聲で言ひ出した、そして疎鬆な頭髪をふり乍ら持つて居た帽子の結び紐を指で叩いて……

「はい、私は……」
「汝の名は何といふ？」

「百姓は下を見つめてちつと考へて居る様子であつたが、「名前で御座りますか？」

「うむ何ていふのか？」

「はて、私の名前——フィロフエーと申しますだ」

「うむぢや、フィロフエー汝馬を持つてるさうだが、三匹のを一組出してくれまいか——私の馬車へつけるんだがね——なに馬車は軽いんだ——そうして汝チユーラ迄私をのせて行つてくれまいか。月夜で明かるいし、冷しくもあるからな。が此邊は道路の具合はどんなだらう？」

「道路で御座りますか？道あちつともわるい事あ御座りません。本道迄あ十六哩か——まそれよか多くあ御座りましたねえ……一所ちよつと危険な處が御座りますだが外にやなにも心配は御座りませぬ」

「一寸危険な處つてどんな所か？」

「へい、途に淺瀬を越さにやならん處がありますでな」

「だが旦那あ自分でチユーラへ往つしやるといふだか？」とエルモライがたづねる。

「どうよ」

「お、」と私の忠實な僕のエルモライは頭を振つて言った。「お！お、」とつゞけさまに言つて床へ唾を吐くなり室を出て行つた。

チユーラ行はもはやエルモライには少しも興味のない事になつた、いや懶い詰らぬ事となつてしまつたのだ。

「汝は道路をよく知つてるか？」と私はフィロフエーに話しかける。

「へい、存じて居ります。だがそのねえ旦那どうも……さう急では、そのどうも……」

察する處エルモライはフィロフエーを雇ふに、かれは恐物であるからといふので只金は出すと許り言つて——何程出すとも言はなかつたらしい。處がフィロフエーも恐物ではあるが——これはエルモライの言だが——只それだけでは満足しなかつた。それでかれは五十留くれと請求する——實に法外な代だ私の方ではすつと廉く——十留ならば出さうといつた。そこで私達は押問答をする事になつた、フィロフエーの奴最初にはなな／＼強硬かつたがその中に少しづつ漸次競いさげて来た。エルモライが一寸また入つて来て私に口添をし始めた、「此恐物あ——」また

「十八番が始まつた！」とフィロフエーが低い聲で言つた——此恐物め全然錢勘定を知らねえだよ」かういふのを聞いて自分は、二十年程前に自分の母が二つの往還の辻の處に旅舎を建てたが、その番頭にしておいた家僕がまるで錢勘定をしらないで、たい貨幣の數さへ多ければ金額が餘計なのだと思つて居た——いや實際銅貨の代りに銀貨の釣銭を出したものだ而かもたえず恐ろしく怒鳴りながらそんな事をした。ために旅舎は遂に失敗に終はつたが今錢勘定の話でそんなことを憶ひ出した。

「やい、フィロフエー！貴様全くフィロフエーだな！」と嘲弄つて置いていまくしさうにびつまやり戸を閉めて出て行つた。

フィロフエーは斯ういはれても何の口答もしなかつた、フィロフエーと言はれるのは——實際あまり氣の利いた事ではないが斯んな名を持つたものはたとへ命名式の折にもつとよい名をつけてくれなかつた教師が悪いのであるとしても馬鹿にされたつて仕方がないと觀念してゐるらしい。

それでも到頭二十留といふ事で話が纏つた。フィロフエーは馬を連れて來ると言つて歸つて行つたが、一時間ほどして還り取りの出来る様に五匹引張つて來た。

鬘や尾はひびく縛れて腹は丸々と太鼓の様に張つて居たけれどなか／＼よい馬であつた。二人の弟もフィロフエーと一所に來たが、ちつとも兄に似ては居ない。小さい黒い眼の鼻の尖つた奴どもで確かに「敏捷い奴」だといふ事を思はせる。二人は早口にいる／＼と話した——エルモライに言はせると「囁り散らした」のだ——けれども兄のいふ事は聴いて居た。

彼等は小屋から馬車をひき出して、一時間半程は車と馬との仕度に急がしかつた。まづ綱の曳索をゆるめてまたしつかりと締め直した。二人の弟は「栗毛」を軸に附け様としきりに言ひ張つた、そのわけは、「彼奴あ下り坂が上手だぞ」といふのであつた、けれどもフィロフエーは「朧毛」の方に定めてしまつた。で朧毛が軸につけられた。

彼等は乾草を馬車の中に積んで跋になつた軸馬の頸環を腰掛の下に入れた、それはチユエーラで購ふ馬につける必要があるかもしれないから萬一に備へたのだ……家へ走り戻つたフィロフエーは長い白いだぶだぶした古ぼけた上衣を着て高い棒砂糖形の帽子を冠り、炭汁を塗つた長靴を穿いて歸つて來た、そして勢よく馭者臺に上つた。私も時計を見乍ら坐に即いた。十時十五分過ぎである。エルモライ

は行ておいでなさいともいはないで——しきりにヴァレトカを打擲えて居た——フィロフエーは手綱を引絞つて細い細い聲でいつた、「ほ——ら！畜生！」
弟共は兩側へ跳び退いて側馬の腹を鞭つた、すると馬車はがら／＼と出た門をくいつて通路へ出ると朧毛が自家の方へ向かうとした、がフィロフエーが二つ三つ鞭をくれて性根をつけた、すると見る間にもう自分達は村落を出端れて繁つた榛樹の密生した林の間を、かなり平坦な道路に沿うて輾つて居る。

静かな妻え渡つた馬車を驅るには極めてよい晩である。微風が林の中の其處此處にさらさらと鳴り渡つて、小枝を揺すぶつておいてすーつと消える空には凝乎、した白光のする雲が見えてゐる、月は高く上つて皎々として光を四邊に投げた。私は乾草の上に身を延ばしてう／＼とやり始めた……がふと「危険な場所」の事を憶ひ出して起き上つた。

「おい、フィロフエー、淺瀬へはまだ餘程あるのか？」
「淺瀬へで御座りますか？七哩にや近く御座りますまい」

そこで自分は考へた、「七哩！ぢや、そこまでゆくには一時間では難かしい。すると其間に一寝入り出来る」で、また尋ねた、「フィロフエー、汝道路はよく知つてるの

か？」
「へい、どうして間違ひつゝ御座りますか、い、こつちへ来たなあ初めてぢや御座りませぬえ」

「まだもつと何か言つた様ではあつたが私にはもう聞えなくなつて……眠てしまつた。」

よくある事だが私は丁度一時間で起きる積りであつたが目は覺めなかつた。然し一種奇體な幽ながらびちや／＼と／＼いふ音が私の耳元に聞えたので目を覺ました。私は頭を擡げた……

「さても不思議！私には以前通り馬車の中に寝ては居るが馬車の廻りはその縁から五六寸以内の處まで来て居る水が一面に廣がつて居て小さな判然として光る渦に砕けて月の光に輝いて居る。前の方を見渡すと馭者臺にはフィロフエーが背を屈め頭を垂れて立像の様に座つて居る。少しはなれて小波の起つて居る水の中に彎曲した軌の弓形と三四の馬の頭と背とが見える。すべてが凝然として音もせず、まるで何處か魔法の國か夢——蓬萊の夢の中にでも居る様だ……」一體どうしたわ

「けだらう？」私は馬車の蓋の下から見返つた……「はて河の真中に居るのだ！……岸は三十歩も彼方にある。」

「フィロフエー！」と自分は叫んだ。

「何で御座りますか？」

「おい、眞實に！こりや一體何處に居るんだ？」

「河ん中で御座りますか？」

「河ん中あ解つてるが、かうしてゐちや溺り込んで仕まうだらう汝はいつも斯うして渉るんか？え、何だ汝は眠つてるんか、フィロフエー！おい、どうだ！」

「小許間違ひました」と案内者たるフィロフエーがいふ。

「片方へ寄りすぎました、小許失敗りました、ただがまあ暫らく待つとつた方がえ、で御座りますか？」

「暫らく待つ？一體何を待つてるんか？」

「へい、尤にそこらを見廻はさせにやりましたねえ何方へ向くか彼奴が首を向けた方へ行つたら好えんで御座りますか？」

私は乾草の上に起き直つた。軸馬の頭は凝然として動かない。頭の上にはたゞ

明るい月の光に照されて片方の耳がかすかに前後に動いて居るのが見えるばかり。
「おい、彼奴も眠つてるんだな、龍毛も！」

「なあに、今水を嗅いで居るんで御座りますよ」とフィロフエーが答へる。
復四邊は静まり返つた、只奔流のかすかな音ばかりが前の如く聞えて居る。自分

はまるで痺痺れた様になつて仕舞つた。

月の光夜の色の流れ、その中流に吾等二人が居る……

「あのから、いふのは何の音か？」

「あれかね？ 草の中に居る鴨か……でなげにや蛇だかね」

不意に軸馬の耳がふるへる、双の耳がびんと立つ、鼻息を荒くして動き出す。「ほら

ほらほら、ほらほら！」とフィロフエーは有る限の聲を絞つて急に喚き出した、座り込

んだまゝでしきりと鞭を浴せかける。馬車がどつと粘着いた處から引き出されて

前の方へおち込み、河の流れを割いてあちらこちらに揺れたり傾いたりして進んで

ゆく……初めにはなんだか漸次深く沈んで行く様に思はれたが、二三度引かれ揺

られた後では俄に水の面が低くなつた様に思はれて来た……水は漸次低く低く

なつて馬車が水の中から生れて来た様だ、見る間に車輪と馬尾とか見えて来た、こん

度は馬が胴震ひをすると大きな露の玉がとびちつて金剛石の雨——いや金剛石で

はない——鷹々たる月の光に照らされた碧王の雨を降らす。馬は元氣よく一曳き

曳いて全く自分等を砂ばかりの岸にひき上げた。そして山側の方へとつとと駆け

てゆく、その月に輝く幾本の白い足が競ふ様にきらきらと動く。

「倍フィロフエーが何といふだらう！」といふ考がふと私の心に閃いた、「そーら、

私のいふ通りだつた！」とか何とかそんな風な事をいふだらうと思つた。けれど

も彼は何もいはなかつた。で自分も彼の不注意を責める必要もないと考へて乾草

の中に横になつても一度眠てやらうとした。

* * * * *

然し私は眠られなかつた、それは獵の疲勞が出たからでもなく、またたつた今出會

つて来た汗を握らす様な経験が睡氣をなくして仕まつたといふ譯でもない、實は今

吾々はえも言はれぬ美しい野の中を走つてゐるためである。其邊には豊饒な廣い

青々とした河沿の牧場が打開けてゐて、其中には幾つかの水溜や小さな湖水、さゝやか

な流れ入江などがあつて、其岸には柳や其他少々な木が繁つて居る——まつたく露

西亞の景色だ、露西亞人の好く景色だ、我國の古い傳説中にある勇士が馬に乗つて真

白な白鳥や灰色の家鴨を撃ちに行つたといふ景色を思はせる。行手の道路は黄色のリップンの様に迂廻つて居る馬は足並軽く駆ける——私は眼を閉ぢられなかつた。私はこの景色に見とれて居た！しかも萬象は懐かしい月の光の中に静かに漂ひ溶け込んで居るのである。フィロフエーもやはり此景色には感んに入つた様子である。

「此處いら聖エゴルの牧場つて言ひますだ」と私の方へふり向いて言ふ。「それから此向ふに大公方様の牧場といふがありますだが露西亞中何處へ行つたとてこんな牧場はありませぬえ……あゝどうも好い景色だ！」

軸馬は鼻息を荒くして胸震ひをした……。「うむ氣の毒に」とフィロフエーが低い聲で眞面目に言ふ。「どうも好い！」と嘆賞の聲を繰り返してそれから長い呻聲を出した。「もう收獲時もやつて來ました、何の位抹茶が刈れると思はつしやる——ほんとに山の様だあね——そして入江にや魚が澤山居りますだよ、こんなブリム(名魚の)がね」と變な調子でいひ足した。「だが世の中面白いもんだあね——死ぬにや及ばねえ」
彼は不意に小手をかざして、

「ほう！御覽なせい！湖水の上に……ありや鶴が立つとるんぢやなかんべいか？鶴あ夜魚を取るもんだかね？やあ！ありや木の枝だ鶴ぢやねえ。むう間違つた。どうも御月様にや何時でも欺されるだ」

斯んな具合でだん／＼やつて行つた……がもう牧場の端に行き着いて小さな林と畑とが見えて來た片側に灯が二つ三つ閃いて居るので小さな村落のある事が知れる——もう本道まで四哩しかない。私はつい眠てしまつた。

私はまた自分では眼が醒めなかつた。今度はフィロフエーの聲で起された。

「旦那……もし旦那！」

私は起き上つた。馬車は往還の眞中の平な所に立つて居る。フィロフエーは駈者臺の上で私の方へ向き直つた見張つた双の眼が私をそれを見て實際驚いた今迄かれがこんな大きな眼を持つて居やうとは思はなかつたのだ不思議な意味を感いて居る様だ。

「音が！……車輪の音が！」

「なんて言つた？」

「音がしますだあよ！低頭して聞いて見さつせい。聞えるだんべい？」

私は馬車から頭を出して息を殺したすると自分等よりはすつと後のごきか遠い處から微に途切れ〜に車輪の音らしい響が聞えて来た。

「聞えるだんべい？」とフィロフエーがまた言ふ。

「うむ聞える荷車が来る様だ」

「お、聞えましねえだか……しッ！あゝ手太鼓……口笛も……聞えまするか？帽子を取つて見さつせい……もつとよく聞えるだに」

帽子は取らなかつたが耳を澄まして聞いた。

「うむさうだ……さうだらう。だがあれが如何したといふのだ？」

フィロフエーは馬の方へ向き直つて、

「小馬車が来るんだあね……軽い、鐵籠の車輪だな」と言つて手綱を取り上げ「悪徒が来るに違えねえだ旦那此邊ぢやね、チューラ近くぢや、彼奴等ようく悪戯しやあがるだ」

「恐な！なんだつて必定悪漢だなんて思ふんだ？」

「いや私の申すのは眞實の事つた！太鼓を叩いて……それから空車に乗つて……さうで無うてなんで御座りませう？」

「ふむ……チューラ迄はまだ餘程あるのかな？」

「まだ十二哩もありますだよ、それに此邊にや一軒だつて住家あないでがす」

「うむぢや、もつと速くやれ、愚圖々々してたつて仕様がかい」フィロフエーが鞭を揮ると馬車はまた動き出した。

私はフィロフエーの言ふ事をあまり信用したわけではないが、なんだかどうも眠付かれない。「實際さうだつたら如何しやう？」と思ふと厭な心持がしはじめた。

私は車の中に起上つて——其時まで横になつて居たが——更に四方を見廻した。

私が眠つて居た間に薄い霧が地面までは降りないが空一面を罩めて来た、それが高く立こめて居るので月はその中に白く顯はれて恰も煙の中にあるやうに見える。

地面に近い處は割合に判明して居るけれども總てが朦朧として區別がつかなくなつて居る。周圍一面は平坦なさびしい地方だ、畑ばかりで、その外にはなにもない——

只處々に叢また谿があつて——また畑がある、大概は耕してないので僅かに汚い草

が生へて居る。あゝ眞に死の様な……荒涼たる境！こんな時唯一聲鶉でも鳴い

たら！

三十分程進んで行つた。フィロフエーは引切りなしに鞭を鳴らしたり舌打をしたりしてゐるが二人共一語も口をきかぬどかくして丘を上り切つた……フィロフエーは手綱をひきしめて馬を止めたが即座言つた。

「ありや車輪の音でがす、旦那まつたくさうでがすよ」

私はまた頭を車の外へ出した、屋根の下から出なくても聞えたのであるが、まだ遠くからとはいふものゝ、大變判断と車輪の音人の口笛を吹く音ぞん／＼いふ太鼓の音それから馬の蹄の地を打つ響さへ聞えて来た何やら歌ふ聲や笑ひ聲も聞える様な気がする。風が實際そちらから吹いて居るのではあるが何物とも知れぬ幾人かの旅人は一哩か或は二哩も此方へ近寄つて来た事は確である。フィロフエーと私は互に顔を見合せて、フィロフエーは帽子をぐいと前へ引いて手綱にのしかゝる様にして馬に鞭をくれる。馬は一足飛びに駆け出したがそれも永くは續かないでまた小刻になつて仕舞ふ。フィロフエーは續けて鞭を加へる。私達はさうあつても逃げなきやならん！

私は始めの中こそフィロフエーの様な心配はして居なかつたのであるが何うしたのか此時不意に實際追剌に追隨られて居るのだなと感付いた……私は別に新

らしい事を聞きはしない、同じ太鼓の音同じ空車の音同じ断續する口笛同じがやくした喧騒……然しもう疑ない。フィロフエーの言葉に間違ひはないんだ！
又もう二十分も過ぎた……此二十分の間私達の車のから／＼／＼いふのに交つて他の車のから／＼／＼いふのが聞えて来た……

「止せ、フィロフエー」と私は言ふ、「もう駄目だ——何方したつて同じ事だ！」

フィロフエーは弱つた様な聲で「どう！」と言ふ馬は休む機會の出来たのを喜ぶ様にびたりと止る。

さあ大變！太鼓が直ぐ背後でしきりに鳴つて居る車がから／＼と響く、人が口笛を鳴らしたり、叫んだり歌つたりする馬の鼻息が聞える、蹄音がする……

逐ひ付かれた！

「困つた事つた」とフィロフエーは低い力の籠つた聲で言つて只無暗に鞭を揮つても一度馬を勵まさうとした。が其瞬間不意にシツ、シツと追ひかける聲が聞えてひごく大形の幅の廣い馬車が瘦馬を三匹附けてから／＼と自分等に追ひついて前へかけぬけたがすぐ様並足になつて道を塞いだ。

「まつたく追剌のやり口だ！」とフィロフエーが呟く。

私は實際慄然とした。……氣を張りつめて凝然と眼の前の颯々たるやう暗くなつた月光の中を視まもつた。前の馬車には横になつたり座つたりして——すべ
 てで六人が、襦袢一枚に粗末な上衣の胸をはだけて居る、その中で二人は帽子も冠つ
 て居ない、長靴を穿いた巨きな足が車の欄干にかゝつてぶら／＼してゐるかと思ふ
 と腕が矢鱈に上つたり下つたりする……身體は前後にぐら附いて居る……こ
 れはもう確かに泥酔者だ。無暗にわい／＼騒いで居る奴等の中に一人本調子でひ
 びく聲高に口笛を吹いて居る奴がある、他の一人はなにかしきりに悪態をついて
 居る。馭者臺には仁王の様な奴が肩衣をかけて手綱を取つて居る。彼等は私達に
 は目もくれない様な風をしてろ／＼と歩ませてゆく。
 如何したらよからう！外に仕方がないので……矢つ張り並足であとに續いた。
 四五町はこんな風をして進んで行つたが、この何方つかずの狀態は實に苦しい……
 ……自分の身を護るなんといふ事はもう問題にならないのだ！向ふは六人此方は
 杖一本持つて居ない。戻らうか？すぐに奴等に捕まるにきまつて居る。ふとズー
 コフスキの詩(カメンスキー)將軍の虐殺を歌つてある一節の一行を憶ひ出した。
 「あはれ賤しき剣盜の思むべき斧よ！……」

でなきや——汚い繩で頸を締められるか……溝へ打ち込まれる……でその
 中で息が塞つて係蹄にかゝつた兎の様にもがく……
 いや、恐ろしいつたら！
 彼等は矢つ張り私達には目もくれないで並足でやつて行く。
 私は小聲で言つた、
 「フィロフエー！一寸とも少し右の方へ寄せて見い通り抜けられるかどうか」
 フィロフエーはやつて見た——右へ寄せた……が奴等もやつぱり右へ寄る……
 ……通り抜けられさうにない。
 フィロフエーは一度左へよせて見た……然し矢羽奴等は車を通させない。
 のみならず聲高に笑つた。それは私達を通させないといふ意味だ。
 「いよく彼奴等悪黨に遠のねえよ」と肩越しにフィロフエーが囁く。
 「だが何時まで猶豫してゐるんだらう？」と私も矢張り小聲で言つた。
 「つい其處の——窪地の——川の上の——橋ん處へ行くまで……彼處で私等を
 如何かする積りだよ！何時だつて其術だかね……橋ん處で。どうせもう分つ
 とりますだよ、旦那」こういつて猶溜息と共に言ひ足した、「とても生しちや歸しま

すめえ彼奴等發露ん様にせにやなんねえだかんね。旦那私たんだ一つ悲しい事があるでがす。私の馬がなくなると兄弟どもは最う馬ア持てないでがす」

私はこれを聞いて實に驚いた、フィロフェーは斯んな場合にもまだ馬の事などを氣にして居るだのに自分は實の處フィロフェーの事など一寸とも考へて居ないだ「彼奴等まつたく己を殺す氣かしら？」と心の中で繰り返して居た。「なにも殺す必要はあるまい持つて居るものは残らずやりさへしたら……」

而も橋はだん／＼近くなつて次第々々に判然と見えて來た。不意に鋭い喊聲が聞えた前の馬車は恰も疾風のやうに突進して橋の處まで行くと忽ち一寸傍へ寄つてびたりと止まつてしまつた。私の心はもう鉛の様に沈んでしまつた。

「おい、フィロフェーもう死ぬんだ。汝を斯んな羽目にして濟まなかつたな」

「貴方の罪の様に仰しやるだね旦那。なかに運ちうものあ仕様がありましねえだ！さあ危頼みだぞ」と軸馬に言葉を掛ける、「やつてくれよ！これが最後の仕事だやつてくれ一生懸命に。どつちしたつて生命がけだ……」
そこで彼は馬を勵ましてだくを駆けさせる。すると追々橋へ——あの凝乎とし

て氣味のわるい馬車の方へ近づき出した……馬車の中は殊更らしく静まり返つて居る。こらつといふ一語もない。バイリ(魚)や鷹や其他すべての肉食動物が獲物の近よる折に示めす静けさだ。今私達の車が向ふの車と一列に並んだ……と突然に肩衣をかけた大男が馬車からとび降りてすと自分等の方へやつて來た！大男は別にフィロフェーに語をかけたでもないがフィロフェーはひとりでに手綱を絞つた……と馬車は止まつた。

大男は馬車の戸に兩手をかけてせゝら笑をしながらむく／＼した毛の頭をうつ向き加減につき出してやさしい穏な聲で次の様な事を言つたその調子は職人風である。

「旦那え、私等正當な酒を飲んで來んでさ——婚禮のね、仲間の色男を一人婚禮させてやつたんで——つまり床入をさせたんでさ、私等若いもんで向ふ見ずでしてね——それに酒は澤山ある醉を醒ますものアなんにもねねと來どりやすからな、どうでせう旦那ちよつびり、仲間、プランの一杯も飲ませるだけ惠んぢや下さるめいか？さうして下さりや貴君の御健康を祝しましてな貴方の事お忘れませんや、だかもし承知して下さらんや——いや何卒御怒りなさらんで下せえましよ」

「こりや何の事だらう」と私は考へた……「戯言か？……嘲弄か？」

大男は頭を下げたまゝちつと立つて居る。
丁度この瞬時に月は霧をわけて現はれた。そして彼の顔を照らした。顔にも眼にも口の邊にもせゝら笑ひの跡が見える。けれども別段人を脅かす風も見えぬ……只何だか少しも油断をしない様に思はれる……そして齒が大へん皓くて大きい……

「御安い御用だ……これを上げやう……」と私は急いで言つて隠袋から財布を引き出し二留の銀貨を取り出した——其時分銀貨はまた全國に通用して居たのである——「さあそれでいゝかね？」

「いや有難う御座います！」と大男は軍隊風に大きな聲で言つた。そして彼の肥つた指がひらつと動いて私の手から——財布残らずではない——たつた二留だけを掠めた。「有難う御座いました！」と言つて頭髪を後へ振つて馬車の處まで駆けて行つた。

「おい！旦那が銀貨を二留守すつたぞ！」するとみな一度にわいゝゝいひ出した。……大男は轉がる様に取者臺に上つた……

「旦那御氣嫌よう！」
それ切り彼等は見えなくなつた。馬が勢よく駆け出して馬車はがらゝと小山を登つてゆくも一度車が空と地との境の薄暗い線の上に現はれたが降りて行つて消えてしまつた。

そしてもう車輪の音も人の喚きも太鼓の音も聞えない……
四邊は死人の様に寂靜として仕まつた。

フィロフエーも私も暫くは元氣が出なかつた。

「あゝ、なか／＼面白い奴だわえ！」と遂にフィロフエーが口を切つた。そして帽子を脱いで十字を切り出した。「諸誰をやる奴だなあほんとに」といひ足し暗くした顔色をして私の方へ向いた。「だが彼奴好ゝ奴で御座いますわい——全く！さあ、さあ、さあ、こら、しつかりしろ！助かつたぞ！みんな助かつた！私等を通せん棒したのも彼奴で馬を追つてつたのも彼奴だ。戯けた野郎だな！さあさあ！しつこらつ！」
私は何もいはなかつたが心の中ではやつぱり嬉しかつた。「助かつた！」と獨言を言つて乾草の上に横になつた。「あゝ廉價くてすんだ！」

今となつてはズーコフスキーの詩の一節を憶ひ出したのが耻かしい位だ。
ふと思ひ付いた事がある。

「フィロフエー！」

「なんだかね？」

「汝女房はあるか？」

「ありますだ」

「子供はあるかね？」

「ありますだ」

「どうして汝はその事を思はなかつたんだ？馬ばかり氣の毒がつて女房や子供は可愛さうだとは思はないのか？」

「可愛さうに思ふわけがありません。彼等あ盗賊に捕まるといふぢやなしね。だが私始終腹ん中ぢや女房子は忘れましねえだ、それで今だつて……そりやもう」

フィロフエーは息を休めて……「大方……神様あ女房子のためを思つて私等助けて下さつんだかもしれませぬ」

「だがあれが追刺でなかつたらどうだらう？」

「そりや分るもんでがすな。他人の心ん中へ入るわけにやいませぬ。他人の心つちうものは全く分らんもんだかね。だが心の中に神様あ念じて居りさへすりや物事あいつだつてうまく行きますだ……どうしてどうして……家族の事あ私毎時……急げ……急げ！こらこらよ！」

既う明るくなりかけた時分であつた自分等はチユーラの町へ入りかけた。私は横になつて夢を見る様な半分睡てる様な心持であつた。

「旦那」とフィロフエーが突然呼びかけて「あれあそこに酒屋の前に奴等が止つて居りますだ……奴等の馬車だ」

頭を擧げて見ると……居る馬車も馬もある。不意に居酒屋の戸口の處へ例の肩衣をかけた大男が出て来た。「旦那！」と帽子を振り乍ら大きな聲で、「私等あ貴方の御健康を祝つて飲んでるんでがす！——やあ馬丁さん」とフィロフエーの方へ帽子をふり乍ら言ひ足す、「汝一寸恐がつて居ただね當然だよえ！」

「面白い奴だあ」と居酒屋から五十碼近くもはなれた時にフィロフエーが言つた。

どうく／＼チユーラへ入り込んで弾丸を買つたその間に茶も買ふ酒も買ふ馬まで

も馬商から購ひ入れた。

眞晝頃にまた歸途についた。自分等が最初後から来る車輪の音を聞きつけた邊までやつて来た時分には、フィロフエーはチューラで一杯やつて大へん口が軽くなつて居たので——御伽話さへ始めた位だつたが——その場所を通る時に不意に笑ひ出した。

「覺えて居るだかね、旦那私の言つた事を音がする………車輪の音がつて言つたのを？」

フィロフエーは幾度か手を揺つた。斯様言つたのが彼には大變面白かつたのである。其晩私等は村に歸り着いた。

私は自分の身にふりかゝつた此出来事をエルモライに話しをした。彼は眞面目くさつて居て別段同情を寄せもしなかつたが只妙な呻聲を出した——賞めるつもりか識るつもりか思ふに彼自身にも分らなかつたのであらう。然し二日程経つて彼は大へん嬉しうな様子をしてフィロフエーと私とがチューラへ行つたあの晩而もあの道路で一人の商人が金をとられた擧句殺されたといふ事を語つた。始めは何だか變だと思つて居たがその後それを信用しないわけには行かなくなつたと

いふのは能々そのために巡查部長が大急ぎで馬をとばせて来て確かな話をして行つたからである。

あの元氣のいゝ奴等が戻がけたと言つた婚禮といふのがそれではなかつたか？——面白い大男の語の中にあつた「床入」をさせた色男といふのがその商人ではなかつたか！私は其後五日程フィロフエーの村落に滞在して居た。彼に會ふといつても「車輪の音は如何だなおい？」と言つてやつた。

すると彼は定つて、「面白い奴だつたあね」と答へて笑ひ出す。

「二十五」 結文

森と野

「静やかに物ありて引き戻しぬる、
 田圃に暗き苑生に。
 菩提樹はいと巨大に、陰影繁く、
 山百合は小女の如く美しく、
 圓き形せる葉柳は汀の上に、
 列並に岸より垂れて椹の木は、
 いと頑健に、動かざる大野の上に生ひになり、
 麻蔴の香の中に列りて……
 其處にしも、遠く擴ぐる牧にして、
 爲絨なせる大地は黒く豊けく、
 香はしき麥の穂並は眼路の限りに、

音もなく緩きうねりの濤と揺蕩ひ、
 圓らかに白く透きたる雲洩れて
 いと強き黄金の光流れたる、
 其處にして物なべてよし……」

(愛讀詩篇より)

讀者諸君は恐らく既に我小篇に倦かれた事であらう。で私は既刊の斷片を以て
 筆を止めるといふ約束を固く結ぼうと思ふ。さり乍ら此處に獵人生活に別るゝに
 際して猶數言を添へる事を禁じ得ない。
 犬を連れ銃を肩にして獵に出る事は昔から言ひならはして居る通りそれ自身既
 に面白い。が讀者諸君は獵者でないにしても同じく自然を愛するものならば諸君
 はまた吾々獵人を羨まざるを得まい……先づ聞き給へ。
 諸君例へば春の黎明に先立つて出掛ける愉快を知つてゐるか？先づ諸君は階段
 の上に出て来る。……濃い灰色の空に星影が彼方彼方にきらめいて居る。しつと
 りとした微風がそよ〜と吹いて折々諸君の肌を觸る。ひそやかな判然としない
 夜の囁きが何處からともなく聞えて来る。暗黒に包まれた樹々の葉がかすかにざわ

めく。下僕どもが車の蓋を引いて湯沸器を容れた箱を諸君の足下に置く。鞍馬が絶えず身動きする、鼻息をふく、軽く地を爬く。たつた今起きたばかりの白い鷺鳥が一番音を立てずゆる／＼と身体を揺ながらやつて来て、そつと道路を横切る。生離の向ふの庭の中に、番人の平和な所が聞える。すべての物音が凍つた空の中、凝然と停止して居る様だ——宇宙に停まつて居るので動いて居るのではない。腰をかける、馬は直様動き出す、馬車は高い音を立て、轆り出す。……馬を驅る——寺院を過ぎて、右の方に丘を下り堤を横切つて駈させる……池の面には今しも霧が立ち、單めやうとして居る。少し冷や／＼する、毛皮の外套の襟をひき立て、顔をかくす、ふら／＼と夢心地になる。馬の蹄が水溜を音高く撥かす、と取者は口笛を吹き始める。然しもう三哩程やつて来たのだ……空の縁に深紅の色がさす、樺の木の中で鴉が不器用にはばたきをして鳴いて居る、雀が澤山黒ずんだ積み草のまはりでちゆう／＼鳴く。空気がだん／＼澄み道もだん／＼判明して来て、空は明るく、雲も漸く白く、野はますます、緑に見える。あたりの小屋の中には燃え立つ木片の紅い焰が見える、門のなかから睡さうな人の聲が聞えて来る。兎角するうち、曙の色がさし初める、黄金の縞の幾條かが最早空を横切つて廣がつた霧は雲の様に谷の上に聚り雲

雀が調子よく歌つて居る、曙の先導をする微風が吹いて来る、それからおもむろに紫色を帯びた旭日が悠然と上つて来る。光が洪水のやうに天地に満わたると、諸君の胸は小鳥の様に羽撃する。萬象悉く生き／＼して快よく楽しい！四方ずつと遠くまで見渡される。その道の杜の向ふに村落が一つ、それからずつと離れてまた一つ村落があり、白く塗つた寺院が見え、丘の上には樺の林がある、その背後にこれから行かうとする沼があるのだ……急げ馬よ急げ！速足に進め！まだ丁度三哩ほどある。——それより多くはない。太陽はすんすん高くのぼり、空は清らかである……晴れ渡つた日にちがひない。家畜の一群がぶら／＼と村落から出て来るのに、出會ふ。小山に登る……何んといふ良い眺望であらう！河は霧を通してほの白く、紅く、縞つて流れる事、十里河の彼方は緑澤やかな牧場、其の彼方は勾配緩き小山である、遠く沼の上あたりで千鳥が高い聲で鳴きながら舞ふて居る、空に満ち渡つた濕ある光彩のために遠の方が劇然と見える……夏には見られぬ景だ。此時人は如何に思ふのまゝに空気を吸ひ、如何に活潑に四肢を動かして如何に全身の強壯を覺えて爽快な春の呼吸の中に抱合した心持になる事であらう！……

儲又夏の朝——七月の朝。黎明に雜木林の中を逍遙ふ事の樂しさが獵人でない

ものに如何して解らう？諸君の足跡は白露を帯びた草の上に一條の緑を残す。濡れた叢を分けてゆくと、夜の間、暗へられた燈心草の温味を帯びた鬱郁たる香に出會ふ。空氣は苦蓮の新らしい苛味蕎麥や苜蓿の蜜の様な甘き香に満ち、遠くの檜の樹は壁の様に立つて、日の光に照り映いて居る。まだ朝の清々しさは失せないが既に暑さの近寄つて来た事が知れる。頭は夥しい芳い香に酔つて、ぼつとして眼が廻る様だ。杜の廣さは測りもしられぬ……只間々に遠くの方に熟した麥が黄に光ると、莖の赤い蕎麥が狭い畝をなして見えるばかり。と其時車の輪のきしる音が聞える。一人の農夫がゆるやかに叢の中へ入つてゆく、そして日中の暑さの來ぬ内に木蔭に其馬をつなぐ……一寸挨拶をして行つてしまふと、鎌の音がさやくと背後から聞えて来る。太陽は次第次第に高く登つて、草は速かに乾く。もう全く蒸し暑くなつて来た。時は刻一刻と過ぎてゆく……地平線あたりの空は薄暗く、動かない空氣は刺す様な熱さに熾りつけられる……「おい、此處いらで何處へ行つたら水が得られやう」と草刈に尋ねる。「向ふの谿ん中に清水がありますよ」蔓草の這ひ纏つた鬱然とした榛樹の下をくいつて、谿の底に降りる。崖の真下に小さな清水が隠れて居る。檜の叢が太い指ともまがふ様な小枝を何かかき集めるやう

に水の上に延ばしてゐると、大きな銀の水珠が綺麗な、絨の様な苔に蔽はれた底からゆらくと湧き上つて来る。地に身を投げて水を飲む、何だか動きたくない。木蔭に休らつて、濕した香を吸ひ込むと胸もくつろぐ。思ひ前の叢は日に輝いて、まるで黄色に變つた様だ。だがはて何だらう？不意に一陣の風が颯と吹いて来た。四邊の空氣がざわ／＼する雷やなかつたか？暑さが増して来るのか？暴風がやつて来るのか？今かすかに電光がひかつた……あゝ、こりや暴風だ！太陽は猶燃えて居るからまだ獵をついける事は出来る。けれども雨雲がだん／＼廣がつて来る、その前の端が長い袖の様にひきのばされて、弓門形に垂れて居る。草も樹もあたりはすべて暗くなる……急げ！急げ！そこいらに草小屋が見附かるだらうと腹の中で思ふ……急げ！小屋に走りついて、飛び込む。何たる雨！何たる電光！雨滴が草屋根の穴を洩れて、香のいゝ乾草の上に滴ちる……がもう太陽はまたきら／＼しく輝いて居る。暴風雨は止んだ。小屋を出る。あゝ、物皆の嬉しげな閃き！爽な透きとほつた空氣、薔や菌の香！すると漸々夕方になる。燦爛たる焔の光が半天を蔽ふて燃えて居る。太陽が沈みかけると、近所の空氣は一種特別な水晶の様な透明な色を持って居るが、遠方には一面に暖かさうな霧がふうはりとかゝつた。つい今方まで透

明な黄金の洪水を浴びて居た野邊の露には真紅の光が宿つて居る。樹から叢から高い草積から長い陰影が引かれて居る……太陽はもう全く没つた星が一つ日没の火の海の中にきらきらとゆらめく……今はその火の色も褪せて空は藍色に劃然とした物の陰影も消えてあたりは漸く暗くなつた。もう今晩宿る村落の小屋に歸る時刻だ。銃を肩にして疲れたにもかゝはらず元氣よく歩き出す……兎角するうち夜はやうやく迫つて二十歩先も見わけられぬ犬ごもは暗中にぼんやり白く動いてゆく。彼方真黒な杜の平地平線間近の空に漠然とした明るい處がある……何だらう？——火事？……ではない月が出て居るのだ。そのすつと下に右によつて村の灯が幾つかもうちら／＼瞬いてゐる……そこで遂々小家に着く。小さい窓から白い布をかけた卓が見えて燈燭が燃えて居る夕飯だ……

また時としては早馬車を仕立てさせて山鶴撃ちに杜へ出掛る。兩側のらい麥が高い壁の様になつた徑に沿つて歩を進めるのは愉快なものである。その穂がそつと顔に觸る矢車菊が双脛にまつはりかゝる鶉があたりには呼んで居る馬は悠々と歩んでゆく。と遂に杜につく彌が上に生ひ繁つて森閑として居る。娉婷とした白楊が頭の上でさや／＼と鳴る樺の長く垂れた枝は殆んど揺かぬ大きな樫が勇者の姿

をして可愛らしい菩提樹の傍にすつくと立つて居る。樹々の陰影で縞になつて居る緑の徑に沿ふて進む大きな黄金色の蠅が日の光を浴びてちつと宙にぶら下つたやうにして羽を動かして居たが不意にすつと飛んで行つて仕まう。小蚊の一群が群つてとび廻る。陰に入ると白く日に照らされると黒い小鳥がたのしさに歌ふわけて咽喉のよい鳥の金鈴の様な聲は山百合の香を動かして無邪氣い浮き立つ様な喜悅をうたふ。猶猶杜の奥深く入ると杜はますます幽邃くなる……心の内には言ふべからざる静寂を感じるいや心の内ばかりでない外面の景色も静かに且夢みる様である。然し今一陣の風が吹き起つた樹々の梢は碎ける瀉の様にざわめく。此處彼處去年の枯葉の積つた下から丈の高い草が延びて居て菌は鋸びろの帽子を冠つてすくすくと立つて居る。と突然に兎が一疋とび出した犬は杜に響く聲を擧げてその後を追ふ……

斯様な杜の秋晩く鶉の立つ頃の景色は實に美しいものである！鶉は杜の奥には居ないものだから其裾を探さなければならぬ。風もなく日の目も見えず日向もななく陰影もなくそよぎもなければ物音も聞えぬ新酒の香の様な秋の香がやはらかな一面の空氣中に漲つて薄い霧は向ふの黄金色した野面をこめて居る。寂寥たる犬

空が平和な落付いた白光を堪えて葉の落ち盡した灰色の枝の間から覗いて居ると菩提樹の枝に所々残んの朽葉がしがみついて居る。地面は濕然として踏む足の下に撥ねかへる様だ萎んだ草の長い葉はそよともせぬ長い蜘蛛の園が洒れた芝生の上に露をふくんで光つて居る。心地よく呼吸をするが然し心の中には一種不思議な戦慄を覚える。杜の縁に沿うて犬の後を追跡けて行くところまで愛した事のある人々の容姿面貌が亡き人のも生きて居る人も相率ひて心に泛で来る。長く長く睡つて居た印象がふと醒ると想像が翼を伸して小鳥の様に高く翔翔る。すべての幻影の動く様さへ判然して宛然眼の前に髣髴する。と心臓が一時鼓動して無中に前方に突進しやうとする。かと思ふとまた聲も及ばぬ遠い追憶の中に陥ちてしまふ。今迄の全生活が恰も繪の様に容易にさらさらと繰り展られる。人は斯る時そのすべての過去すべての感情すべての精力——とりも直さずその全靈魂に想ひ到る、そしてあたりには何も彼を妨げるものがない——太陽も風も物の音も……また澄み切つた肌寒を感じる程の秋の日の朝な朝な霜を見る時分になると白樺が昔話の中にある樹の様に黄金色をして薄蒼い空を背景に劃然と繪の様に寫し出される。太陽は低くかゝつてゐるもの、暑くはなくて却つて夏よりも一層さらさら

らと輝いてゐる。小さな白楊の杜が恰もその真裸なのを氣樂に楽しんで居る様に一帶に光を浴びて居り霜が窪地の底にはまだ白く残つて居ると爽快な風がそつと起つて乾からびた落葉を追ひかける、すると河の流れには藍色の小波が嬉しさうに立つてうつかりして居る鴛鳥や家鴨を調子よく揺り上げ乍ら走つてゆく遠くの方で柳隠れの水車がきしると彩美はしい鳩が幾羽かその上の澄み切つた空を輪をかけてすうと飛んで居る。

懶い様な夏の日も獵する者はあまり好かないがなかくうれしいものである。斯様な日には鳥が足下から起つてそして直様降りて居る霧のはの白い間に消えるので獵をする事は出来ぬ。けれども四邊は實に平和何ともいはれぬ平和である萬象は醒めて居て然もみな静まり返つて居る。或る樹の側を通る樹は一葉だも動かさぬ休息に耽つて居るのだ。平らに空に擴がった蒸氣の様な霧を通して前の方に一帶の長い黒い條理が見える。それはこのあたりにあるすぐ近くの杜だと思ふ行つて見る——と杜は境の深に並んで生へて居る丈の高い苦蓬の叢にかはる。上にも周圍にも四邊一面——すべて霧だ………が微風がかすかに立つと薄蒼い空の一片がぼんやりと覗き出す、今薄れゆく宛然煙の如き霧を通して金色の日光がさつと

破れると、それが河の様に進つて野を照らし、杜を照らす——かと思ればまた萬象は霧に蔽はれる。や、暫らく此争闘が演ぜられるが遂々光が凱歌を擧げると、その日の光景は華麗壯大真に言語に絶して居る。是に至つて暖められた霧の最後の波濤は自づと崩解れて平野に廣がり、幽邃い、やはらかに光る丘陵の間に迂廻つて消えて仕舞ふ……

またはすつと離れた曠野に出掛ける事がある。凡そ十哩ほども傍道を辿つてゆくとやがて本道に出る。荷馬車のはてもない列を過ぎ廂の下に湯沸がしゆつくと音を立て、居る路傍の旅舎、そのおつ開いた門、其處から見える井戸などを後に見て村落から村落へ果しもない野を横ぎり緑の麻畑に沿つて長い長い間馬を驅る。藪は柳から柳へとびうつり百姓女は長い草蓑を持つて圃の間をさまよつて居る、靡り切れた帆木綿の上衣を着た男が一人、杖細工の背負籠を肩にして倦るさうに足をひきすつて歩いて居る。頑丈な田舎馬車が足の弱い六匹の丈の高馬をつけてやつて来る。敷物の端が窓から食み出してゐる、後の方には繩で結び付けられた袋の上へに毛皮の上衣を着た馬丁が一人、肩まで泥をはね上げてとりついて居る。兎角して小さな田舎町に行き着く、そこには倒ふれかゝつた小さな木造の家、長い長い生

籬空寂とした石造の店深い谿にかけ渡した古風な橋などがある……猶進め！……さてすると途に曠野近くの田舎に着く。丘陵に上つて眺ると何たる眺望ぞ！頂上まで耕されて種をおろされて居る圓い低い小山は相連つて大きな波濤のうねりの様に起伏してゐると、其間を灌木に蔽れた谿が迂廻して居る。小さな杜が細長い島の様に散在して村落から村落へ細い徑が走つて居る。寺院は白く聳えて柳の立ち並んだ間を小河の水がきら／＼と流れ、四ヶ所程堤防で堰きとめられてゐる。すつと離れて野の中に舊い邸が一線を劃して、その長家、果樹園、米搗場などが順々に並んで小さな湖の岸まで雑然と立ち續いて居る。猶もつと進むと丘がだん／＼小さく小さくなる、此邊にはもう樹一本も見當らぬ。是に至つて途に——限も知られぬ人跡絶えたる曠野の中にあつて来たのだ！

また冬の日には兎を遂つて降り積もつた雪の上を驅づり廻る。軽い雪の清らかな眩しい光に我知らず半眼を閉ぢて鋭い凍つた空気を吸ひ込み、また冬枯の杜の上に碧玉の様な空を望む……さてまた初春の日ともなると萬物光り輝きゆるぎ初めて雪解の水に量を増した小河のあたりに、もはや弛み初めた地の香がする、もう融解け切つた裸地に斜にさす光のうちに雲雀が楽しさうに歌つて居ると、歡喜の波を擧

げ聲を立て乍ら湖の如き流の水は溪から溪へと落ちてゆく……
 さり乍らもう終るべき時が来た。序に言ふが私は春の事まで話をした春には別
 離はさまざまでつらいものではない春の時節になると心の楽しい人は何となく遠い處
 へ行つて見たい様な心持がするものだ……さらば讀者よ！望むらくは諸君の繁
 榮の永久ならん事を。

野 々 森

獵人日記終

發行所

（振替貯金口座東京七六七四番）
 東京市本郷區号町二丁目二番地

昭文堂

著作
 權
 所
 有

正價金貳圓參拾錢

明治四十二年九月十二日印刷
 明治四十二年九月廿三日發行

（獵人日記奥附）

著譯者 戸川秋骨
 同 敵戸會同人
 發行者 東京市本郷區号町二丁目二番地 宮城伊兵衛
 印刷者 東京市豊町區有樂町二丁目一番地 中村政雄
 印刷所 右 同 報文社

木下尚江作

隨筆小說小說小說論

飢乞墓勞荒
渴食場働野

三版 五版 三版 三版 近刊

定價四拾五錢 送料六錢
定價參拾五錢 送料六錢
定價四拾五錢 送料六錢
定價四十五錢

何處ニ往ク

シエソキエツチ作
文學博士坪内逍遙序
松本雲舟譯

菊判クローヌ製
紙數五百頁
定價壹圓貳拾錢
小包內地拾貳錢
清、韓、臺、卅五錢

本書は十九世紀の文壇を風靡したる名作にして我國此譯書
出で、より讀書界の傾向を改め就中婦人界に清新なる情味
を興へたるに甚大なり

メレソスキイ大作
松本雲舟譯

神々之死 近刊

パチエラ・オプロス
渡邊萬藏 著 **和漢英格言辭典** 近刊

正則英番
學校講師
東北中
校講師
間崎勝義 共著
ユニヤン
第四讀本 **詳解講義** 近刊

第一高等學校教授 探偵
村田祐治 譯 **外交之秘密** 註解 近刊
講義

吉野臥城 著 **新體詩研究** 定價六拾錢
送料六錢

天生目杜南 編 **俳聖五家句集** 近刊

支那文學講話叢書

尾池宜卿述

孫子子子
莊子子子
墨子子子
戰國策

近刊 近刊 近刊 近刊

報知新聞記者摩天樓主人著

現代之風雲兒

正價金六拾錢
送料金八錢

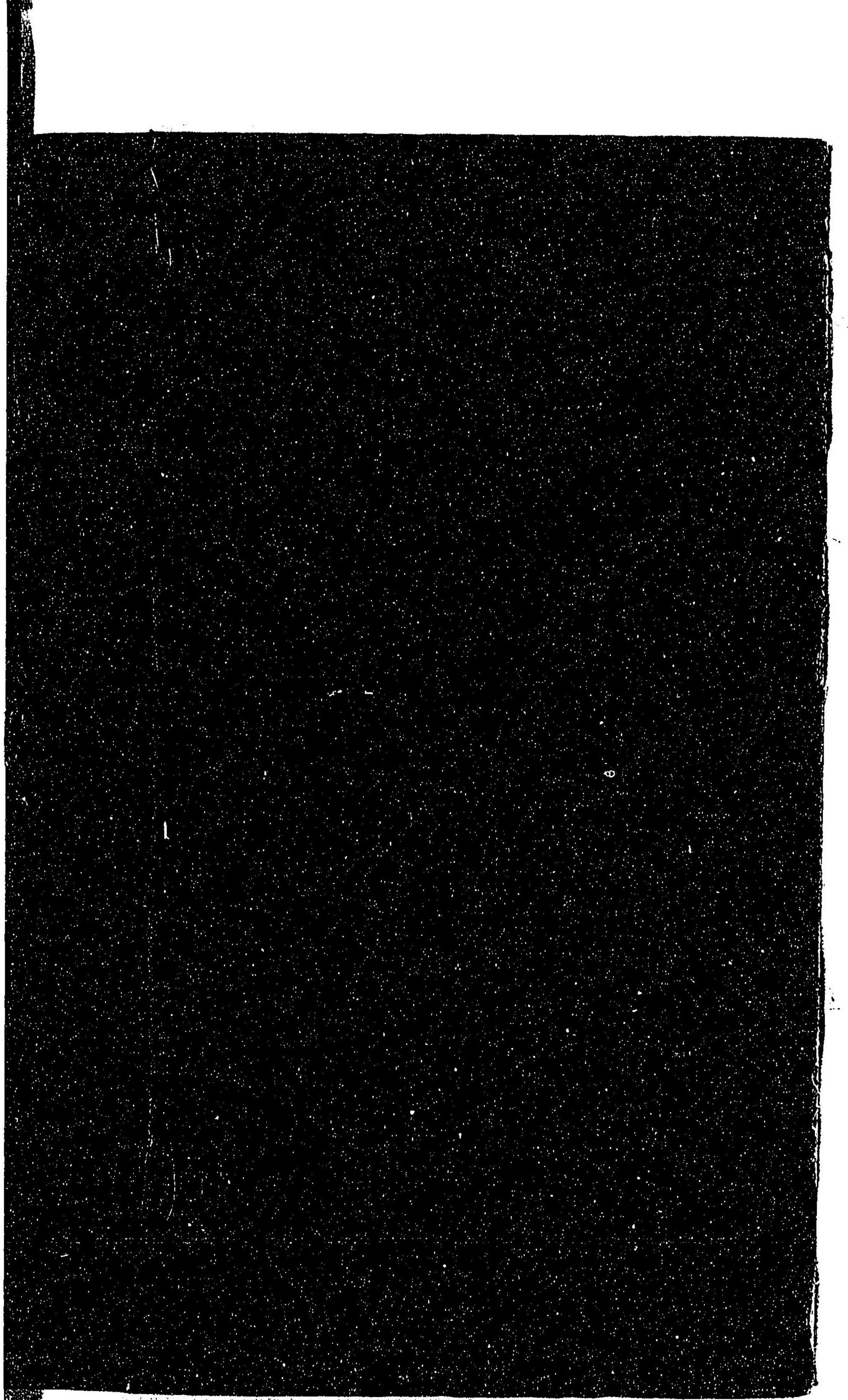
蚯蚓も風雲に會すれば、天上し、蛟龍も時を得ざれば、蟄伏す、報知新聞記者摩天樓主人なる徒ら者、現代の風雲兒、傑出権兵衛、大人會、荒助、才人原敬、風雲兒、新平、日曜御前寺内正教、貧更壽太郎、中納言公望の七人を捕え、來つて、無盡論を試み、熱罵時に骨を刺し、冷嘲往々、鬼氣を帯ぶ、而も紙面に溢る、蓋し近來の快文字なり、此等の性格、躍如として、蚯蚓か蛟龍か、請ふ一本を備えて、其眞價を知れ、雲兒果して、蚯蚓か蛟龍か、請ふ一本を備えて、其眞價を知れ

(各卷讀切)
天之卷 第五版
地之卷 第五版

報知新聞連載
熊田章城著
日本史蹟
各冊正價金貳圓
小包料內地拾貳錢
清、韓、臺、卅五錢

(各卷讀切)
日之卷 九月發行
月之卷 十一月發行

329
6



101425-000-3

329-6

獵人日記

ツルゲーネフ / 著

M42

DBY-0762



